

「お願いといふのは、外ぢやございませんが、私の妊娠中は、あなた様のいつもの短氣をつしんでいたゞきたいのです。」

この野中良明といふ人も、なかなか偉い人でありましたが、すこし偏狭なところがあつてとかく世に容れられず、その不平が家庭内でも洩れて、氣短かで家の者を怒鳴りつける癖があつたのです。

お萬からさう云はれると、良明は、頭を掻いて、

「いや、解つた。わしは、勘くとも、お前が子供を無事に生むまでは決して短氣を見せぬことにする、どんなことがあつても決して怒鳴つたりはしない。」と誓ひました。

これ以來、お萬は、朝となく、夕となく、立つ、坐る、寝る、日常のあらゆる行動に氣を配つて、その上に、精神の修養も怠らなかつたのです。例へば、當時、武士の家庭の流行として、琵琶法師を招聘するやうな場合にも、努めて胎内の子供の教育に裨益するやうな曲を注文したといふことです。それに又、この女性の偉いところは、絶えず他の妊婦の有様を見て、その不注意や

修養の足りない點を發見すると、直ちに自分を省みて、自分にもさういふ足りない點はないかと氣を配るといふ方法を採つたことです。かういふ聰明な女性であつたればこそ、野中兼山の如き、後の世まで知られる學者の母となることが出来たのであります。よき母となるには、先づ胎教から考へてかゝらねばなりません。

伊藤仁齋じんさいといふ人も、京都の堀川ほりがわといふところで塾を開いてゐた有名な學者であります。この人も常々胎教の大切なことを説いて、その妻が妊娠すると、仁齋は毎晩のやうにいろいろの經書や、偉人の傳記などを讀んできかせました。その結果、生れたのが東涯とうがいでありまして、この東涯はまた父の仁齋に劣らぬ大學者となつたので、これによつても、胎教は決して忽ゆるがせに出来ないものであることがわかるだらうと思ひます。

子供を養育する力

子供を生まない女性には、子供を一人や二人、育てるぐらゐなんでもないことのやうに思ひますが、これは大へんなまちがひです。およそ女性に課せられた仕事として、何がむづかしいとい

つても、子供を完全に育てるほどむづかしい仕事はないと思ひます。たとひ一本の草花にしても、これに花を咲かせるまでには相當の骨折が要るのです。況んや人間の子供です。これを立派に育てるには並大抵の努力では追つゝきません。恐らくお母さんとして泣くにも泣かれないやうな苦しみがありませう。しかし、昔の川柳にもあるやうに、「我ものと思へば輕し傘の雪」で、これが自分の子供であればこそ、骨身を削られるやうな苦しみも、親としての愛の力、いはゆる母性愛で克服して行くことが出来るのだと思ひます。

私は、かつて或る婦人雑誌で、次のやうなお母さんの赤ん坊を育てる體驗談を読んだことがあります。

生れた時九百匁にもう二匁といふ丸々と肥えた女の兒が、どうしたことか三日目の暮方から泣き始めまして、夜通し火のつくやうに泣きつゞけるのでした。抱けば泣きやみませんが、寝かせば直ぐにまた泣きだします。かういふ日が五十日ばかりもつゞいたのには、世話に来てゐたお婆さんもまつたく困り抜いてしまひました。

「このまゝで行つたら、何時になつて手が離せるかしら」とは、家中の者の心配の種でした。

當時、私の頭は、どうしたら赤ん坊のこの悪い癖を直すことができるだらうか、といふ考以外にはほとんど空虚だつたといつてもよい位です。

私は試験的に授乳の時間を決めました。授乳は晝は五時間毎にしました。そして乳をやる時は晝でも夜でも必ずすわつて、抱いて與へ、お乳がすむと直ぐに寝かせることにしたのです。もとよりはじめは寝てゐることを嫌つて盛んに泣きました。しかし、襦袢も別に汚れてゐないし、たゞ抱いてもらひたさに泣いてゐることが明かな時には、二時間でも三時間でも、聲がすつかり嘔れて出なくなるまで泣き放題に泣かせておくことにしました。

餘り泣かせるとお腹の工合を變にしてしまふ、といふ話を聞かされてゐました私達は、ある時はお腹を繻帯で縛つて泣かせたことさへあります。もしこの時可哀さうだからと一度抱きあげてやるやうなことをしましたら、折角の苦心も水の泡となることはわかりきつてゐますので、私はお腹の中で泣きながら忍耐の幾日かを送りました。

四日五日と日がたつにつれ、赤ちやんはだんだん寝ることに慣れて來まして、やがて泣き聲を揚げてまで起きようと聞えなくなりました。半歳ばかりもたちますと、夜半には一度も起し

せんで、翌朝までぐつぐつと眠つてくれるやうになり、間もなくすわれるやうになつてからは、玩具さへあてがつておきますと、獨りでおとなしく遊んでゐるやうになりました。午前と午後時間を定めて晝寝をさせるやうな習慣をつけましたが、その時間がまゐりまして横に寝かされますと、おとなしくやすやすと眠るといふ、まるで生れ變つたやうに手のいらぬ赤ちやんになつてくれました。これはまつたく親と子の二三日間の血を吐くやうな忍耐の贈物です。

これを読んだとき、私は、自分らのお母さんもみなこのやうな苦心をして、自分らを育て、來て下すつたのかと思つて、ほんたうに涙のこぼれるやうな氣持になりました。母の愛といふものは、なんといふ大きなものでありませうか。

子供は兩親の膝下にあつても、子供をそだてるのは、八九分まで母親の力によるのであります。子供を養育するといふことは、母としての女性の天來の務めであります。我が國の家庭では、育兒と家政といふことが、女性に課せられた最も主だつた務めとなつてゐます。英米の家庭では、赤ん坊に母乳を吞ませると母親の體力が衰へるといつた考へから、子供に母乳を與へず、

牛乳ばかりで育てたり、中産階級以上になると乳母をおいて子供をそだてたりしてゐますが、これは、まことに間違つたことだと思ひます。醫學上から見て、如何なる人工榮養よりも母乳が子供の成育に大きな力のあるのは申すまでもありませんが、又、精神上から云つても、母親が自分の乳房を子供に含ませるといふことには、子供の成育に一種云ふことのできなない靈妙な力があります。

大體、子供を立派に、完全にそだてるといふことは、自分のためのみではありません。子供はただ自分のものだと思ふから、英米の女性のやうに、自分の體力をおもつて子供を牛乳のみで育てたり、乳母まかせになつたりするのです。子供は自分ばかりのものでなく、國家のものです。これを立派に、完全に育てるのは、女性としての國家への務めであり、女性に課せられてゐる最も重要な國家的義務であります。このことをはつきりと自覺してゐれば、子供をそだてる上で、自分の體力の衰へることを氣にしたりすることはないわけです。

頼山陽が老母に孝養をつくしたことは、誰れ知らぬ者のない美談として傳へられてゐますが、山陽は、そのお母さんにどれほどの孝養をつくしても決してつくし足りることのないほどの深い

恩を受けてゐます。

それは、天明八年三月、山陽が久太郎といつて、九歳の少年の折のことであります。その頃は、まだ種痘瘡しゅとうそうなどのない折のことで、久太郎少年は可哀さうにも命取りの痘瘡に取りつかれました。父の春水しゅんすいは丁度江戸表にあつて、家には、母の静子と、あとは奉公人ばかりでありました。この折、母の久太郎に對する看病は、到底、筆や紙につくせぬものがありました。病氣が現はれたのは三月十二三日のことではありますが、病氣の経過がはつきりわかるまでは、これはまづたく自分の責任だとばかりに、帯一つ解かず、不眠不休で約一週間近くも過し、三月十八日頃になつて、やつと良好の経過が見えたので、安心して奉公人に看護をまかし、彼女はホンの暫しの間まどろみました。その時、彼女の身體はもうまつたく綿のやうにふなふなに疲れ切つてゐたのでせう。しかし、彼女はそれさへも、自分の落度でもあるやうに考へて、今日にも傳はる有名な病間日記に、「我れその時まどろむ」と、如何にも申譯のないやうに認めてゐるのです。なんといふ熱心な母性愛でせうか、私共は到底涙を催さないではゐられないのであります。

今日から見れば、病中にも卵たまごひとつあてがはれるわけでなし、牛乳が與へられるわけでなし、

まことに不自由がちな手當で、この命取りの恐ろしい病氣を立派に全治させたのであります。下手をすれば満面にみにくいあばたを残すところであつた久太郎少年の痘瘡が、すこしの痕跡も残さず、きれいに全治したのは、偉大なる母性愛の力であります。どのやうなことがあつても子供を助けたいといふ母親のまごころは、恐ろしい命取りの病氣を完全に征服したのであります。偉なるかな、母の力よ、私共は、この日本女性がもつところの母としての力を讚美し、歎仰せずにはゐられません。

子供を訓練する力

子供を丈夫に育てると共に、その精神によき訓練を施すといふことも、母としての務めであります。今日、大東亞戰に勇名をとゞろかせてゐる皇軍の將士が、その壯烈な精神は、すべてかれ等のお母さんたちの丹精たんせいの賜物だと云へます。お母さんたちの熱心な訓育の力がなかつたならば、世界に無比といはれる我が皇軍の將兵も生れなかつたかも知れません。かのハワイ眞珠灣の敵艦撃滅戰に花と散つた我が海軍特別攻撃隊の軍神九勇士の壯烈なる行動は、一億同胞をひとし

く感泣せしめ、その赫々たる勳功は、百代の後までも我が軍史を飾るものでありますが、かゝる果敢なる行動を生むに至つた攻撃精神は、どうして鍊成されたかといへば、それは、いづれも少年時代その家庭におけるお母さんたちの訓練の賜物であることが知られます。

この軍神九勇士の一人である横山正治少佐は、薩摩の御出身であります。この薩摩は、古來、我が國でも家庭訓育に力をつくされたところであり、薩摩の女性は、我が兒の教育に對してはまつたく自分の身を犠牲にして、その全生涯を捧げつくしました。たいした學問のない女性でも、母親となると、湧き出づる愛の力によつて、忠孝の精神、文武の奨励は云ふまでもなく、人にヒケをとるな、嘘をつくな、卑怯な振舞をするな、禮儀正しくあれと、いつも口癖のやうに教訓して、わが兒をわが兒とのみ考へず、お國の寶として立派に育てあげました。

それに就いて、乃木將軍が靜子夫人を薩摩藩の家中から迎へられた動機として傳へられてゐる話があります。將軍がまだ若い頃、何かの用事で薩摩へ赴かれた時、知人の家の子供が路傍の石ころに躓いて、わあと泣き出しました。すると、その母親は、

「なぜ泣くかつ、石を打つて來なさい！」

と訓しました。これを目のあたりに見られた將軍は、

「あゝ、家庭教育は母にある、母は薩摩の女性に限る。」と、しみじみ感じられたといふのであります。

このやうに、母親の厳格な訓練のもとに育てられた男兒が、ひとたび戦陣に立つたならば、一死奉公の精神を以て生還を期せず、斷じて負けて退くなどといふことを潔しとしなかつたのであります。そこに、かの烈々たる薩摩魂の養はれたことが知られます。遠くは西郷隆盛の母、大久保利通の母、松方正義の母、近くは東郷元帥の母、山本英輔大將の母など、世に知られる偉人の蔭にはみな偉大な母があつたのです。

西洋でも、ドイツの母は、家庭における士女の訓練に極めて嚴格であつて、常に烈々たる祖國愛と鐵の意思を焼き込むことを忘れないといはれます。かのヒットラー大總統が田舎の小官吏の子供から身を起して、大ドイツ建設といふ古今未曾有の大事業を完遂しつゝあるのも、少年時代に於けるお母さんの訓育の力であるといふことであります。

又、古代ギリシアは實に立派な國家で、その男子はみな勇氣を重んじ、廉恥を尙び、忍耐力に

富んでゐましたが、これは、平素の家庭訓育のお蔭であつて、母としての女性の力でありました。すなはち、家庭を守つてゐた古代ギリシアの母は、たいへんやさしい、血もあり、涙もある女性として、良人には飽までも従順に、舅姑には親切で、その子供に對してはあふるゝばかりの慈愛をそゝぎかけてゐましたが、その一方において、まことにきびしい態度で子女の訓育に當つたのであります。たとへば、男の子が大きくなつて戦争に出かけるやうなとき、その母親は、

「必ず勝つて歸れ、しからざれば、楯たてに乗つて歸れ。」

と云つたものであります。これは、勝たないで歸るやうならいつそのこと討死して歸る方がましだ、戦ひに敗れておめおめと生きて歸るやうなことは、男子としてこの上もない恥辱だとの意味であります。

この古代ギリシアの母の態度にしても、又、薩摩の母の感度にしても、世の母となつた女性のひとしく學ばねばならない態度ではないでせうか。すなはち、母としてその子供をそだてるには、常に慈愛にあふれてゐなければならぬと共に、その反面において、あくまでも嚴格なところがなくてはなりません。よく世間の家庭では、お父さんはきびしいもの、お母さんはやさしい

ものといふことになつてゐますが、子供を甘やかすことばかりが能ではありません。それではたゞ意氣地のない人間をつくり上げることになります。子供に強堅な精神を植ゑつけるやうに訓練するため、時には父親に代つてきびしい鞭もふるはねばならないと思ひます。

かうした母親の嚴格な訓育について、前文部大臣の鳩山一郎氏がそのお母さんの有名な春子刀自に就いて、次のやうな話をしてゐられます。

家庭に於てはやゝ放任主義であつた父のやり方とは正反對に、おそらくわが子に臨む母の態度として、僕等兄弟の母春子刀自ぐらゐ峻厳で、冷徹で、一步もかしくしない教師はなかつたであらう。僕たちの家はその頃牛込區東五軒町——現在の片山醫學博士邸——にあつた。僕はそこへ父と母がひき移つた次の年、すなはち明治十六年一月元旦に生れ、翌十七年の二月七日に弟が生れたのであるが、四五歳になると母がかつてその校門を出たお茶の水の幼稚園に通ふことゝなつた。

僕の家は、父がすでに東京府會議員であつたし、決して貧しい家庭ではなかつたのだが、母は斷乎としてスパルタ式な教育システムをたて、どうしても僕たちに電車や人力車に乗つて幼稚

園へ通ふことを許さない。東五軒町の屋敷から、江戸川べりを砲兵工廠の前まで歩き、あれから茗溪の坂をのこのこあがつて、往復必ず歩いたものである。母はさうしながらもたえず僕たちの影を追ふものゝ如く、ひそかに電車や車に衝突したり、ひかれたりしないやうに、護衛してきてくれたのである。僕たちよりもつと小さな家に生れた子が、堂々と人力車に乗つて通ふのを見て、始めはその理由が僕たちには判明しなかつた。母の、深遠にして長大な、斷々乎たる人間教育の根本義に觸れて、なるほど僕たちの母はエライ母上だ、かういふ母を持つた以上は、何事を措いても人の下風に立つてはならぬと決心したのは、實を云へば母の心子知らず、恥かしながらすつと後年のことだつたのである。〔わが母を語る〕より〕

こゝに鳩山さんが「僕等兄弟」と語られるのは、氏と令弟の前東京帝國大學教授、法學博士鳩山秀夫氏のことであります。

春子刀自の家庭教育についての決意は、すでに早くから持つてゐられたといふことで、一郎氏が生れると間もなく、良人の和夫氏に次のやうに進言してゐられるのです。

「私たちの子供は、あなたが老後に及んでも、完全に信頼の出来るやうな子供にそだてあげた

いと存じます。それにはまづ愛の心と、敬の精神がなくてはなりません。若しも子供を前にして私があるに叱り飛ばされるやうなことでもあつたら、子供は私の言葉を信じてくれませぬ。どうか子供の前でだけは私をお叱りにならないで下さい。私の足りないところは、子供のゐないところで充分戒めて頂きます。いかなる場合でも、ほかのことはあなたに絶対服従いたしますから、この一つだけをお願い申します。子供の教育を一切私にお委せ下さるなら、誓つてかならず立派な子供に育て、御覽に入れませう。」

このやうな決意と抱負があつたればこそ、二人の男の子を、一人は大臣に、一人は大學教授といふ立派な人間にそだてあげることができたのだと思ひます。

子供は、母親に甘やかされすぎると、たとへば、泣けばお菓子をやると、ころべばすぐ抱っこしてやるといった風のそだて方をされると、つひその愛になれて、母親はなんでも自分の思ふやうにしてくれるものだと思へ、大きくなつてから、女親は甘いものだとなめてかゝるやうになります。そのためには、他目にすこしぐらゐ冷やかに見えても、子供にはあくまでも嚴格、峻烈な態度をとることを忘れてはなりません。

子供を感化する力

母親は子供に厳格でなくてはいけないといつて、たゞやたらに頭からガミガミと怒鳴りつけるのでは、子供は決して母のいふことをきくものではありません。その厳格な母の訓育の裏には、やさしい慈愛がこもつてゐてこそ、子供は、母の愛と厳とに感化されて、立派な人間に成長するのです。それに、また、子供を感化する母の力は、學問や知識によるものではありません。母としての純愛のまごころによるのです。しかもそのまごころは、日常のホンのつまらぬ事柄の上にも現はれ、それが存外に強く子供の心に感化を與へ、精神教育の上に大きな影響を及ぼすものです。

幕末勤皇の志士吉田松陰の名は、何人もこれを知らないものではありませんが、松陰先生があつたやうな立派な人間になつたのは、みなその母堂瀧子さんの感化薫育によるものであります。松陰には兄さんの梅太郎、妹さんの千代子、この妹さんは後にかの有名な久坂玄瑞の妻となりましたが、その他にも多くの妹や弟があつて、少年時代には長州萩郊外の山屋敷といふところで、父の

百合之助、母の瀧子、それから、叔父の玉木文之進などと共に、皆いつしよに暮してゐました。その家は、人里はなれた淋しいところにあつて、ほかに遊び友達といつてなかつたから、自然にさうなつたかとも思へますが、その兄妹たちが仲のむつまじかつたことは、外の見る目も羨ましいばかりでありました。

かれら兄妹には、喧嘩口論をするといふやうなことが一つもなく、ともに讀書し、ともに手習をし、同じ蒲團に寝て、お母さんがお膳を運ぶと、茶碗に移して一つの箱膳の上で、兄妹たちが頭を突きよせて三度の食事を共にすることを唯一つの楽しみとしてゐました。一つの椀の汁をわけてたべ、一皿の菜もいつしよに味ふといつたやうな有様でありました。

又、兄弟たちが庭の隅の椎の實を拾つたり、或は裏の山に松茸を取りに行つたりすると、母の瀧子は子供たちの歸るのを待つて、これを夕飯のお菜にする、それは、ほんとに心の底から楽しく仲よく育てられたのであります。子供たちはみな、その日その日をいかにあたくさい母の愛情に抱かれつゝ、平和にたのしく暮してゐました。私共にもその家庭の和やかな空氣が眼に見えるやうに思はれます。

父の百合之助は、萩藩の士分ではありましたが、至つて微祿で、いはゞ半士半農の生活をしてゐました。それで、時々、父は、飼馬を曳いて、梅太郎、大次郎（松陰先生の幼名）兄弟をつれて、半道ばかりはなれてゐる東光寺の裏山まで草刈りに行くこともありました。そんな折、留守中には、母の瀧子が千代子を相手にいろいろと家の仕末をしますので、すなはち日中は炊事のかたはら洗濯やら針仕事をし、夕刻になると、野良から歸る良人や男の子たちを迎へる夕飯の準備や風呂焚き既の掃除までする、それから、更に夜仕事の用意をする、夜にはまた、閑でもあれば、薄暗い行燈の側で、子供を膝下によせて、名将傳や心學本などの話をしてきかせるのがお定まりでありました。

かうして、母に仕込まれたので、松陰の妹の千代子さんは、十三四歳の頃から、もう臺所のことでも、洗濯のことでも、何くれとなくお母さんの片腕となつて働いたものです。天保十四年、お父さんの百合之助が役目の都合上から、山屋敷の家をはなれて、この千代子さんと仲間一人をつれ、お城近くの或る知人の宅に寄偶することになりました。そのとき、十三四のホンの少女でありながら、千代子さんは、父の身のまはりの世話から、家事一切を引き受けて、毎日父と仲間

とのお辨當まで揃へるといつたやうに、まことにまめやかに立ちはたりました。今日の娘さんならば、恐らくまだ何も彼も母親の手を借りなければ出来ないやうな年頃で、これほどの仕事をやつてのけたといふのも、まったくお母さんのきびしい、行届いた仕込み、躰けによるものです。家庭内の和合、兄弟仲のむつまじさ、子供の躰けなど、さうしたことは、すべて母親の感化力によるものであることが知られます。

又、かのハワイ眞珠灣特別攻撃隊の軍神勇士のお一人である古野繁實少佐の母堂まささんもまた、この母にしてこの子ありと思はせる、世の母の模範ともなるべき女性でありました。まささんは、福岡縣遠賀郡遠賀村の名望家嶺圓太郎氏の一人娘として生れましたが、幼い頃に兩親を失ひ、祖父貞平氏の弟古野矢八郎氏の養女として迎へられ、養父の一人娘としてきびしい躰けのうちにも、慈愛を一身に浴びて成長しました。明治維新の際、勤皇志士として知られる早川養啓先生は、この嶺家から早川家に養子入籍せられたものであります。生れながらに脈々と血縁を流れる烈しい氣性をうけついでまささんは、また、男まさりの勝氣な氣性の女性でありました。思つたことは必ずやり抜くといふ、烈しい氣性をそのしとやかな心のうちに包んで、子供たちの感化

薫育には、すこしも假借かしゃくすることなく、きびしい鞭をふるひました。繁實少佐の壯烈な行動も、この母堂の氣性をうけつぎ、その感化によるものだといふことが知られます。

まきさんは、二十五歳の折、同縣宗像郡むなかたの河東村から彦市氏を養子に迎へました。御主人との間に七人の子供が出来ましたが、この子供たちの教育には非常に細やかな注意を拂ひ、まことに慈愛ふかい母であると共にまた、あくまでも厳格な母であることを忘れなかつたのです。子供たちにあまりきびしい鞭を加へた後で、

「自分はよく蔭で泣いて、子供に詫びてゐるやうなことがありました。」

と語られるまきさんの心のなかには、きびしいうちにも母としての限りない愛情が含まれてゐるのでした。

まきさんは、子供の教育にあたつて、すこしでも勉強を怠けたり、嘘をついたりした時は、最初は必ずこんこんと叱りさとしてゐましたが、それが度重なると、祖先のお位牌の前につれて行つて、

「そんなことで、ご先祖の靈にすむと思ひますか、この前でよく胸に手をおいて考へてみなさ

5.1

と、涙ながらにさとすのでありました。繁實少佐も、少年の折には、お母さんのために何度か佛前にひきすえられたことでありませう。後年、このくらゐ子供心にびびしと胸をうつたことはなかつたと、述懐してゐたさうであります。

まきさんは、また、常に子供を集めて、楠木正成や新田義貞などの歴史上の忠臣の話をして、子供に勤皇精神を鼓吹することに努めたのでありました。しかもその訓話をするときのまきさんの態度は、たゞ暇つぶしにお話をするといふのでなく、あまりにも精神がこもつて、語りながら眼から涙がポトポトながれ出るといふ有様で、かうして涙ながらに忠臣烈士を讃へる母の一言一句は、ひしひしと童心をうち、いかに腕白な子供でも感激しないではゐられなかつたといふことです。

母が子供を感化するには、その全精神を打込むところがなくてはなりません。母の氣性、母の精神、母の全人格、それは、子供の上に偉大なる影響を及ぼすものです。

まきさんは、自分が一度云ひ出したことは決して後にはひかないといふ、堅い意思の持主でありました。悪いことはどこまでもそれを質しました。子供たちはいたづらをしては、よく家に入

ることはならんといつて外へ出されましたが、そんなとき、心から詫びて來なくては決して許さなかつたのです。

このやうなきびしいお母さんでありましたが、子供たちは心からお母さんを慕ひ、敬ひ、何事もお母さんにだけはぶちまけてゐました。それは、まつたく、母としての慈愛と嚴格を綱ひませたまきさんの全心的な感化の力によるものであります。

子供を指導する力

子供を指導するうへに働きかける母親の力もまた大へん偉大なものがあります。何んでも子供の折は母を頼り、母の胸に抱かれることを何よりも幸福に感じてゐるのでありますから、その母が子供を指導する力の大きいことは、私共の想像する以上のものがあらうと思はれます。およそ人間はどのやうな悪人でも根から葉から悪の染み込んでゐるものは稀であります。どこかに必ず善良な人間性が残されてゐます。昔、支那の學者のなかには、人間の性は善であると説いた人もありますが、それは兎も角として、世間からつまはじきされてゐるやうな性の悪い人間でも、母

親の温かい愛情の力で、づるづる眞人間になつて、世の人のためにつくすやうになつたといふ例はすくなくないので。昔のことを語る講談などには、他人の家へ押込んで、物を盗つたり、人をあやめたりした兇盜が、ふと母親のふところに抱かれて、子守歌をきかされてゐた頃のことを夢に見て、善心にたちかへるといつたことが、よくありますが、それは、受動的に、いはゞ消極的に母親の指導力に目覺めたものであることが知られます。けれど、なほ積極的に母の力で、極悪無道の人間をも善人に改心させるといつたこともあり得ると思ひます。大體、人間は、生れたときは、純眞無垢なものであります。天真爛漫の心を持つたものであります。それが世間でいつか悪に染まつて、世間から擯斥されるやうな人間になるといふのは、社會環境の罪だとも申されませうが、また、子供に對する母親としての指導力が面白くなかつたからだとも考へられます。子供をよくするのも母の力であり、子供を悪くするのもまた母の力であります。母親の子供に對する指導の力は、まことに恐ろしいものであります。

岩崎彌太郎といつても、お若い人には、ご存知のない方があるかも知れませんが、この人は、一介の船子から身を起して、維新の風雲に乗じ、つひに日本一の大富豪になり、大富豪になつた

ばかりでなく、國家にもいろいろの貢献をして、今日の「大三菱」の土臺を築き上げた傑物であります。この彌太郎氏が大成功を収め、國家に大勳功をたてたのは、母堂の指導によるものであります。そして、成功者にありがちな、成功後のおもひあがつた氣持から意外の失敗を招くやうなこともなく、最後まで國家のために盡したのも、その母堂の指導によるのであります。彼女は、彌太郎氏がすでに大成功をして、自分も老齡に達した後までも、なほかつ母としての指導の綱をゆるめなかつたのであります。

彌太郎氏が多年わが國家に盡した功績によつて、特に男爵を授けられた或る夏の夕のことでありました。老母は自分の部屋に彌太郎氏を招きよせて、一つの色のあせた古蚊帳を出して、しみじみと語るのです。

「彌太郎、お前はこの蚊帳を覚えてゐますか。ちやうど、今夜のやうな夏の夜のことでした。田舎のあばら屋で、その日その日の食べ物にも困つてゐたわたしたち親子が、この蚊帳に入つて、寝ながら月の光を浴び、虫の音をきいてたのしんだものです。今日は、その思ひ出の記念に、これをお前に上げます。」

成功すると、誰れでも昔のことなどは忘れてしまつて、とかく思ひあがつた氣持になるものです。そして、思はぬ失敗を招いたりするものです。彌太郎氏の母堂は、これを戒めるために、日本一の大富豪となり、男爵となつた息子に、昔の古蚊帳を與へて教訓したのです。

この母の偉大なる指導力、これあればこそ、岩崎彌太郎の名は伊藤博文、山縣有朋、松方正義、井上馨などのいはゆる明治元勳と共に、我が近世史の上に輝き、今日の「大三菱」の土臺は築き上げられたのです。まつたく偉大なる母の力です。この古蚊帳は、今でも岩崎家に大切に保存されてゐることです。

我が國の歴史を顧みますと、幾多の忠臣烈士を見るのでありますが、かれ等の盡忠報國の至誠は、その母の指導力から生れたものであります。私共は、その事實を、楠木正行の母に見ます。吉田松陰の母に見ます。乃木大將の母に見ます。東郷元帥の母に見ます。更に大東亞戰において護國の御柱となつた幾多の軍神の母に見ます。

そもそも母としての日本女性には、子供を指導するのに一つの信念がありました。それは、殉國至誠のまごころであります。子供を決して自分ひとりのものと考へず、國家のものであり、陛

下にさし上げるものであるとして、その熱烈な信念のもとに、指導し、薫育して来たのであります。

安政六年の秋、十月廿七日

身はたとへ武藏の野邊に朽ぬとも

留め置まし大和魂

更に、

吾れ、今、國のために死す

死して、君親に背かず

悠々たる天地のこと

鑑照明神にあり

の辭世の詩歌を残して、江戸傳馬町獄刑場の露と消え去つた殉國志士吉田松陰先生の、あの烈々たる盡忠の精神は、母瀧子の指導教育の結果でないとは誰れが云ひ得られるでせうか。

この母としての日本女性の指導精神は、昭和の今日、大東亞戦争の完遂に當つて、幾多の護國

の英靈を生き育てた母の精神となつて、受け継がれて來てゐます。わが皇軍の赫々たる武名、その忠烈無比なる精神は、母としての日本女性の指導によるものでないと誰れが云ひ得るでせうか。この指導精神こそ、母としての日本女性の持つ獨特の力でありまして、英米の女性などには決して見られないのであります。それは理窟や學問から來てゐるものでなく、強固な信念によるのであります。英米流の個人主義的な指導教育の方法によつては、到底、かくの如き烈士の精神を育むことはできないのであります。

社會に働く女性

國家と女性の力

日本女性の報國精神

女性の力が民族および國家のうへに如何に大きな影響を及ぼすものであるかは、その民族な

り、國家なりの歴史が何よりも雄辯にその事實を語つてゐます。女性の力は、いつの場合でも、表だつて現はれるものでありませんから、いはゆる正史のうへからは看過されがちであります。が、民族、國家の盛衰興亡の跡を辿つてみますと、そこには必ず女性の力がいろんな形で動いてゐます。民族が大なる發展をなし、國家がすばらしい飛躍を遂げたやうな場合には、必ず女性の力が大きく、然かも健全なはたらきをなしてゐます。これに反して、民族が衰滅の際に瀕し、國家が廢亡の淵に沈まうとするやうな場合には、そこに動く女性の力もひとしく頽廢してゐることが知られます。

我が國は、萬國に比類のない美しい國體のもとに、たゞの一度も外國の侮りを被つたこともなく、連綿二千六百有餘年の輝く歴史を保つてゐるのでありますが、この國家發展の背後には、常に女性の力が大きくはたらいてゐるのであります。すなはち、政治にしても、經濟にしても、藝術にしても、更にまた、軍事の方面にしてさへも、ありとあらゆる歴史を構成する要素のなかに、女性の力が脈々として動いてゐます。勿論、それは、歴史の表面にあらはれて、積極的な役割をしてゐるといふものではありません。(尤も、男装して御自ら三韓征伐の軍をお進めになつた

神功皇后のやうな御方もありますが、これは、特別の御例であります)例へば、海神の怒りを解くために逆捲く波濤のなかに身を投じたまひし弟橘媛の御行動にしても、また、敗戦の良人を勵まして賊徒を平定する力を與へた上毛野形名の妻の行動にしても、弟清麿をしてよく精忠の道にすゝました和氣廣虫の行動にしても、忠義の精神を説いて我が兒を訓戒した楠木正行の母の行動にしても、また、野村望東尼、村岡局、松尾多勢子などの幕末維新當時の烈婦と稱される女性の行動にしても、それらはあまり歴史の表面には現はれてゐません。しかし、彼女等の蔭における行動が如何なる役割をしてゐるかは、こゝに改めて説くまでもないと思ひます。

ご存知のやうに、我が國は、今や歴史あつてこの方未だかつて經驗したことのないやうな非常時局に際會してゐます。國民たるものは、男にしても女にしても、並々の覺悟では、この難局を乗り切ることが出来ません。我が一億同胞が眞に上下協力一致して、あらゆる努力をつくしてこそ、始めてこれを克服することが出来るのであります。戦争のことはすべてこれを軍人にまかしておいて、國民は安閑としてゐるといふやうなことは絶対に不可ません。今日の戦争は、度々云はれてゐますやうに、武力戦であると共に、經濟の戦ひであり、思想の戦ひであり、文化の戦ひ

であり、精神の戦ひであります。軍人ばかりに、男子ばかりにこれをまかしておくべきものではありません。たとへ銃剣を持つて戦場に出なくても、國民として分擔しなければならぬ仕事があります。いづれ銃後において發揮すべき女性の力については、後段で詳しく述べるつもりですが、戦場と銃後とを問はず、男たると女たるとの區別なく、すべてのものが一團となつて進撃しなければなりません。それでこそ、この重大なる聖戦の目的を完遂し、大東亞共榮圈確立の理想を實現することが出来るのであります。

今日の女性は、外に出て如何なる職業に従ふ者にしても、また、家の内にあつて妻として母としての務めをなすものにしても、國民協力の精神をよく理解し、いはゆる大政翼賛、臣道實踐の國民義務をつくすべきことを忘れてはなりません。それが報國の精神であります。國民として國家への義務を忘れない精神であります。

今後の戦争は、昔の戦争のやうに二年か三年の短期間に雌雄を決するといふことは不可能であります。十年は愚か、二十年、三十年の長期戦になることを充分覺悟しなければなりません。國民としてこの覺悟が缺けてゐては、たとへ戦争には勝つても、結果において面白からぬ状態に陥

らぬとも限りません。されば、この非常時局に處するのために、今後も益々國民としての覺悟を強固にし、ひたすら報國精神のうへに生き抜くことを誓はねばならないと思ひます。

野邊に咲き出でたる白菊の如く、楚々たる風姿の日本女性、その姿はあくまでも清らかで、美しく、その精神は凛として如何なる風霜に堪える強いもの、そこに、日本女性の特徴があるとされてゐます。そして、この日本女性の力によつて、我が國家の驚くべき發展をその裏面より助けて來たのであります。女性の立場より國家社會へ種々なる貢獻をして來たのであります。私共は、その實例を、過去及び現在における彼女等の輝かしい行動のうへに見ることが出来ると思ひます。

愛國至誠の女丈夫

我が國民は、元來、愛國の至情に厚く、國家のために自分の身命を投げすてることを、些かも惜しいとは思ひません。それは、我が國體に基いて、二千六百有餘年の傳統によつて生れたものであります。白菊の風姿をおもはせる純情可憐な日本女性の精神のなかに、愛國の至誠は烈

烈として燃えたぎつてゐます。平素は如何に温順柔和な女性であつても、ひとたび難に立てば、毅然として男子をも後へに撞着たらしめるほどの勇猛心を振ひ起します。その愛國の熱情、至誠の力は、まことに偉大なるものがあります。

國史に輝く數々の女性のなかで、神功皇后の御事蹟についてはすでに幾度となくお話し申しましたが、古い時代には、國家のために自分の身命を投げ出して、よく日本女性の面目を保つた女丈夫を幾人となく數へることができます。さうした數々の雄々しき大和撫子のなかでも、三韓の昔、新羅で良人と共に壯烈な最後をとげた大葉子こそ、まことに愛國至誠の日本女性の模範といふべき人であります。

それは、人皇第二十九代欽明天皇の二十三年のことです。當時、我が國はすでに大陸に進出し、朝鮮の任那に日本府を設けてゐましたが、その隣國の新羅が次第に強くなり、つひに任那の日本府を攻めかゝりました。そこで、わが朝廷では、紀磨を大將軍として間罪の師を起され、調伊企儼が副將の重任を帯びて出征し、伊企儼の妻の大葉子もその子の舅子と共に、その陣に従ひました。

ところが、この戦ひに皇軍の武運は拙くて、伊企儼はその妻子と共に敵の捕虜になりました。敵將は、その時、刀を抜いて伊企儼を脅かし、尻をまくつて日本に向ひ日本の將我が腕睨を齧へと云ふならば、命だけは助けてやらうと云ひました。すると、伊企儼は、早速尻を敵の大將の方に向けて、

「新羅王我が腕睨を齧へ！」

と叫び、つひに殺されてしまいました。これは、まことに胸のすくやうな話であります。それにしても、今次の大東亞戰などで、皇軍の俘虜になつた英米の將兵が、しきりに味方の悪口を云つてゐるのは、まことに滑稽の至りであります。彼等には、自分の命の助かりたいためには祖國も何もあつたものでありません。

その時、伊企儼の子の舅子も、父の屍を抱いて死にました。

大葉子は、自分の目前で、良人や子供が殺されるの見て、悲歎の涙に咽びましたが、元來、彼女は絶世の美人でありましたので、敵將は、大葉子だけは助けて自分の意に従はせやうといろいろの甘言をもつて、彼女を誘惑しようとかゝりました。しかし、祖國に抗ふものであり、自分の

良人や子の仇であるものに、どうして自分の身を任すことができませうか。大葉子は、凛としてこれを拒み、

韓國の城の邊に立ちて大葉子は

頒布ひれふらすも大和へ向きて

といふ悲痛なる歌を詠んで、自ら敵の刃にかゝつて、従容として良人や子供に殉じました。かくして、大葉子は、かよわい一女性の身を以つて、敵の甘言に従はず、祖國日本に向つて最後の別れに頒布ひれを振り、潔く死にたいのであります。そこには、武人の妻としての日本女性の面目がよく現はれ、その烈々たる愛國の至情は、百代の後までも傳へられてゐるのであります。

三韓の昔、調伊企儼の妻大葉子が、新羅國で日本女性のために萬丈の氣を吐いてから千數百年の後、昭和の初めごろ、同じく朝鮮において、國境警備に當つた一巡査の妻女が、良人や子供ともろ共に殉職の聖血に、倒れた悲壯な物語があります。

そこは、鴨綠江の西北部、滿洲と露領との國境にちかい一部落でありました。その邊には絶え

ず馬賊が襲來するので、國境と朝鮮部落を守るために巡査駐在所がまうけられてゐました。

或る冬、降り積つた雪のうへを、肌身はだみもつんさくばかりの寒風の吹きすさんでゐる夜のことでありました。駐在所の磯野巡査が、いつものやうに巡視に出かけて、部落はづれまで來ると、はるか彼方でカツカツと馬蹄の音がきこえるではありませんか。彼の全身は恰かも電氣がかゝつたやうになりました。胸をとどろかせながら、青白い月光のながれる前方を見つめると、森の間の雪路にチラチラするものが……

「あゝ、馬賊だッ」

馬賊の一隊が月光を浴びて、雪路を部落さして一直線にかけて來るのです。もう寸刻も躊躇してゐる場合でない、磯野巡査は、手にしてゐた拳銃を空に向つてパンパンと打ち放ちました。それは、馬賊の襲來を告げる非常信號なのです。

この時、駐在所では、妻の良子が産後まだ日が浅く、産褥に臥せてゐましたが、その銃聲をきくと、思はず身體を起しました。側にそば寝てゐた十三になる長男の金一も目をさまして、

「お母さん、あれは、ピストルの音だね。」

「あゝ、金一、警報です。」

身體の衰弱してゐた良子は、よろけながら蒲團のうへに起き上りました。

「お母さん、僕、行つて来るよ。」

金一は、子供心に父の身が心配になつたのでせう。座敷の隅にかけてあつた銃をとつて出かけやうとしました。

「お待ちよ、金一、お前は、それよりもこの安子をおんぶしておくれ。」

さう云つて、良子が金一の背なかに生れたばかりの赤ん坊をしばりつけてゐると、そこへ磯野巡査が轉ぶやうに駆け込んで來ました。

「あなた！」

「うむ、馬賊だッ」

「俺はすぐ本部へ電話をかけるから、お前、金一と赤ん坊をたのむぞ。」

「はッ。」

背なかに赤ん坊をしばりつけた金一は、壁にかけてあつたラツパを取り外して、咽喉も裂けよ

とばかりに吹き鳴しました。それは、部落の人々に、賊が襲來したから逃げよとの警報ラツパです。非常ラツパの響は、部落の人々の夢を破つて、あわたとしく鳴り渡りました。

賊はやがて駐在所に向つて迫つて來ました。銃弾が事務所硝子窓をバチバチと破ります。今は、磯野巡査も良子も必死となつて防戦につとめてゐましたが、賊の發射する弾丸はいよいよ烈しくなるばかりで、もうとても防ぎきれなくなりました。二人は、自分の身の上のことなどをすこしも考へてゐません。たゞ部落の人々が無事に避難してくれるかどうかを念願するばかりです。

この時、銃弾が凄い唸りをたて、飛んで來ました。

「あゝッ」

良子の額に命中したのです。彼女は仰向けに倒れました。

「おい、良子！ しつかりしろッ」

「お母さん。」

金一は、母の身體にすがりつきましたが、良子は、眼をつぶつたまゝ、

「……………」
言葉もなく、ガツクリなつてしまいました。

磯野巡査は、妻の仇だとばかりに、駐在所の中へはいらうとする賊の一人を見事に撃ち倒しましたが、もう弾がありません。ふと気がつく、金一がラツパを口にあてたまゝ、良子の屍の上
に折りかさなつて倒れてゐます。殺氣だつた彼は、銃をすてゝ、剣を抜き放つと、賊のなかへ飛
び込んで行きました。……………

やがて、救援部隊がかけつけたときには、賊はもう散り去せた後でありました。駐在所の親子
四人のものが枕をならべて打ち倒れてゐる様を見て、人々はたゞ涙にくれるばかりでした。

あゝ、何といふ悲惨なことでありませう。しかし、かうした尊い血によつて、國境は、朝鮮の
部落は守られてゐたのであります。

立派に職に殉じた磯野巡査、その良人の職務に協力して、一命を捧げた良子さんは、實に昭和
の女丈夫といふに相應はしい女性であります。

戦線に活躍する女性

日本女性がいざといふ場合、驚くばかりの偉大な力を發揮するものであることは、すでにお話
したところでありますが、古來、日本の女性のなかには、戦場に現はれ、男子と共に銃剣を執つ
て戦つた例もありますし、又、剣を執らないにしても、砲煙彈雨の下を潜つて、捨身の活躍をし
たといふことは珍しくありません。娘子軍などといひますと、なんだか支那人臭くきこえます
が、女性の戦場に出ることは、我が國古代からの習慣となつてゐました。然かもそれは、かの支
那共産軍の女子部隊などがいはゆる物好に、又、無知なる反抗心などで組織されてゐると譯が
ちがつて、盡忠報國の至誠と熱情から戦場における活躍となつてゐるのであります。

昔、敵軍のために城を包圍されて、味方との連絡を断られたやうな場合、この連絡をつけるの
は、男子よりも女子の方が敵をあさむくの都合がよかつたといふので、かよわい女性によつて
よくさうした決死の任務が行はれてゐます。さうした任務に當つたからには、無論、自分の身命
などを捨てゝかゝつてゐるのですから、その目的を果すためには、如何なる苦難にも堪え忍んで

あります。その果敢な行動は有髯男子さへもよく真似の出来ないやうなことがあります。

又、いざ籠城といふやうな場合にも、その城のなかの女性は、城兵の食糧を供給するため、實に涙ぐましいまでの努力の行はれた話をきいてゐます。例へば、明治十年西南の役において、熊本城が賊軍のために包圍され、救援の軍もなかなか来ず、鎮臺司令官谷干城將軍を始め、諸幕僚は、城内の兵糧の日に日に缺乏して行く様を見て、絶望の溜息を洩してゐるとき、谷將軍夫人の玖満子さんは、他の將校夫人たちと協力して、城内の米倉のゴミのなかから、米粒を拾ひ集め、それで粥汁を作つて、城兵の元氣を大につけたといふことで、これは、熊本籠城の秘話として今もなほ傳へられてゐます。

幕末維新の際に、勤王の志士を助けて、劍撃の間に活躍した女性はすくなくありませんが、わけて有名なのは、伏見寺田屋の娘お龍であります。彼女は、土佐藩の名士坂本龍馬の愛人であつたとして傳へられてゐます。慶應二年の春、龍馬が同志の三好愼三と二人で寺田屋に泊つてゐると、突然、例の新撰組に襲撃されて、まことに危なかつたことがあります。このとき、お龍は丁度風呂場にあつて、新撰組の一隊が土方歳三を先頭に襲つて来たことを知ると、着物もまとはず

裸體のまゝで、すばやくこのことを龍馬に注進したので、まことに危ないところをまぬがれたのであります。若い女性が身に一丝もつけず、裸體のまゝで男の部屋にかけつける。これは想像してもとても生やさしいことではないのですが、さうした危急の場合に愚圖々々してゐては間に合ひません。國をおもふまごころは、若い女性の羞恥心さへ吹飛ばして、そのやうな勇猛な行動を敢てさせたものと思はれます。

今次の大東亞戦争において皇軍將士の活躍は申すまでもありませんが、後方任務として、野戦病院などにおいて傷病兵の看護に任じてゐる、いはゆる白衣の天使としての活躍もみのがすことは出来ません。そこに、日本女性としての盡忠報國の精神があらはれてゐます。彼女等がかよわい女性の身で、兵隊さんと同じやうな苦勞をして、よくその任務を果してゐるのは、盡忠報國のまごころであり、日本女性の偉大な力だと思ひます。私共は、彼女等のその涙ぐましい努力を讚美し、歎仰せずにはゐられません。

それは、戦争が起つて間もない頃のことです。戦地の某陸軍病院で、多くの傷病兵からまるで肉親の姉のやうに慕はれてゐる白衣の天使がありました。假りにその名を大和菊子さんと

申しておきます。

彼女は、或る大きな新聞の大阪支社に営業主任として勤務する人の夫人でありました。大分縣の佐伯高等女學校を卒業して、結婚するまではつと赤十字病院に勤めてゐましたが、すでに奉職の義務年限もあけて、更に望まれて年限を延長したところへ、突然、事變で召集を受けることになつたのです。

その時、菊子さんには、年老いた舅、姑はじめ、八つを頭に、その年生れたばかりの赤ん坊まで加へて、五人の手のかゝる家族がをりました。子供はともかくとして、あとへ残す老父母のことを考へると、さすがの菊さんも容易に覺悟がきまらず、一時は辭退しようと思つたのでありますが、そのとき、舅の寛平さんは、

「わたしたちのことなら決して心配はいらないよ。また、赤ん坊はわたしたちが引受けて、風邪をひかすやうなことをしないから、どうぞ安心してお國のために御奉公をして來なさい。」と激勵しましたので、菊さんは勇躍任務についたのであります。

しかし、應召の時刻まで、一番下の文子さんにはおつばいを嘔ませてゐた身であります。忙し

く立働いてゐるうちにも、またしてもお乳が張つて痛みます。時々、洗面所へかけつけて、茶碗に乳を搾り取つたり、氷嚢をあてたりして苦痛をまぎらすのでしたが、一番辛かつたのは、仕事を終つてしばしまどろむ時だつたと云ひます。

うとうとしたかと思ふと、ふみ子さんを腕に抱きあげ、乳をふくませてやる夢をみるのでした。はつと夢を破られ、

「あゝ、今ごろはどうしてゐるだらう、おばあさんのおつばいをくはへて泣いてはしないだらうか。」

思ひは故郷の家庭に走り、幾たびか枕をぬらす夜もありました。しかし、そんなときにも、菊子さんはすぐに、

「兵隊さんたちの御苦勞を思へば、これくらゐのつらさはなんでもない。」

と、我が心を勵まし、晝となく夜となしに傷病兵のため我が身を忘れ、まごころをつくして看護の任に専心するのです。

その健氣にも尊い菊子さんの姿を見ては、同僚たちはもとより、看護を受ける勇士たちまで

が、

「これこそ白衣の天使だ。軍國女性の華だ。」

と、感激の涙を流したといふ話であります。

戦地の病院で働く看護婦は、武器を持つて敵と渡り合ふことこそありませんが、その勞苦は戦線の將兵とすこしも變らないのです。かよわい女性の身で、夜晝なしに立働く、その力、それは、彼女たちの報國精神のあらはれでなくて何でありませうか。

大陸開拓と女性の力

わが日本の國威の膨脹するにつれて、國民の海外發展といふことは益々重大な使命となりつゝ、ありますが、殊に必要なことと考へられるのは大陸の開拓であります。大陸といへば、滿洲、朝鮮、やがては、北支、中南支もこれに加はりませう。これらの土地は、南方の海洋と共に、國防日本の生命線でありまして、今までにもその開發には力を注がれて來たのでありますが、今後はその必要が次第に大きくなりつゝあります。政府でもそのためにいろんな機關を設けて、銳意努

力してゐます。しかし、かういふことは、政府だけの力では到底なし得られるものでないので、國民の自覺によらねばなりません。すなはち、日本朝野の人々の協力によつて、大陸開拓といふ大きな仕事は始めて進行するのであります。

ところで、この大陸開拓といふことは、男子ばかりに任すべきものでありません。また、男子ばかりで出来るものでもありません。女性の協力が非常に必要であります。男子と力を協せて進んで大陸開拓の捨石とならうといふ自覺のある女性の力があつてこそ、この我が國策のうへに最も重大な仕事は初めて遂行されるのであります。我が國威の發展の線に沿ふて進む將來の女性は、その報國の精神と至誠の力を、この方面に發揮されねばならないと思ひます。

我が國の女性の大陸開拓について、私共が先づ思ひ起すのは、明治の女傑として有名な奥村五百子女史の朝鮮における日本村建設のことです。

それは、明治三十一年のことです。その頃、奥村さんはもう五十四五のいゝお婆さんでありますが、お孫さんの守りなどをして安閑と暮してゐることの出来なかつた彼女は、將來、朝鮮は日本の大陸進出にもつとも大切な足場となる土地だと考へ、その熱烈な愛國の精神から、

最初、自分の近親八名ばかりの者をひきつれて朝鮮に渡り、全羅南道の光州といふ町の郊外に、日本人の村を建設したのであります。

この八名のものが草分けとなつて、その後、奥村さんのまごころに感激した人々は、一隊また一隊と朝鮮に渡りました。かくて、大工さん、左官さん、桶屋さん、傘屋さん、建具屋さんといふ風に、さまざまの職業の人々が、その日本村に集つて、やがてその数が百人にも上つたのであります。

しかし、何事にしても新しい仕事には迫害が加はるものです。わけて未だ内鮮の融和のない當時のことで、朝鮮の土地に日本村を建設するといふのは、並大抵のことではなかつたやうです。そこには、いろんな誤解があり、誤解から起る反感があつて、奥村さんをはじめ、移住の人々はみな言葉で云ひつくせないやうな苦しい思ひを受けました。

奥村さんは、その日本村にさゝやかな事務所をつくつて、日本から新しい移住民が来ると、そこへその人たちを集めて、日本村建設の抱負と理想を説き聞かせました。

「たとひ私はこのまゝ朝鮮の土となりますとも、この地に極楽村を打ちたて、朝鮮の人々と

日本内地の人々との融和を計り、産業を起し、將來、わが國の大陸進出に際しての確つかりとした足場をつくつておきたいと思ひます。」

それが、奥村さんの信念であり、抱負でありました。

或る夜、彼女がさうして移住民の前で熱辯を揮つてゐますと、その事務所へ、バラバラと石のつぶてが飛んで来ました。それは、今までにもよくあつたことで、奥村さんたちの日本村の建設を誤解した朝鮮の人々が、一團となつて襲つて来たのです。

何かわけの分らぬ罵聲と共に、石のつぶてはだんだんはげしくなつて、事務所の硝子窓を破壊し、人々の集つてゐた席へも落ちて来ます。人々はみな青くなつて、顔を見合せてゐました。しかし、奥村さんは平然として、話をつゞけてゐるのです。

そのうちに、たうとう石のつぶてか、硝子の破片かが奥村さんの顔に當つて、額から血がタラタラと流れました。人々は「あつ」と聲をあげて、思はず立ち上りました。けれど、奥村さんはすこしも騒がずに、ハンケチで額のところを抑へたまゝ、

「皆さん、静かにして下さい。こんなことはなんでもありません。この婆は、いつでも石のこ

馳走になります。今は誤解して反感を持つてゐられるかも知れませんが、朝鮮の人々もいつかは私共のまごころの通じることがありませう。それまでは、いつでも悦んで石のご馳走になります。」

あゝ、なんといふ雄々しい精神でありませうか。この有髯男子にもまさる強固な信念の力によつて、奥村さんは、そのやうな迫害を物ともしないで、大陸開拓の捨石となる覺悟をもつて活躍したのです。

かうして奥村さんが朝鮮に日本村を建設してから四十有餘年、我が大陸開拓の根據地は、朝鮮から滿洲に移つてゐます。

この滿洲の土地には、かの昭和六年の滿洲事變が契機となつて、滿洲國が出来上り、その後國內の治安も次第に肅正されつゝありますが、日本と滿洲國とが仲良く手を握つて、眞の王道樂土を建設するためには、これまでの經驗によれば、日本内地の優秀な農村の人たちを滿洲國に送つて滿洲の農村の人々と土を通して確つかりと手を握り、そして、これらの人々を指導して行くことが、もつとも力強い方法であります。それで、滿洲事變が終ると直ぐに大陸移民の必要なこと

が叫ばれ、朝野の間に移民の計畫がたてられたのであります。

しかし、滿洲國に立派な理想的な日本村を建設するには、男子ばかりの力では到底不可能であります。それには、女性の協力がなくてはなりません。今日、大陸開拓の上に、「花嫁移民」といふことの説かれてゐるのは、この女性の力を求める聲であります。すなはち、大陸開拓のために逞しい青年を送り込むと共に、この青年たちと協力して、かれ等をしてよく大陸の土となる覺悟を持たせるためには、優秀な花嫁移民が必要となるのです。幸ひ今日までも立派な花嫁移民が選ばれて、大陸に赴き、良人を扶けて立派な村の建設に努力して來たのであります。今後、大量の移民が送り込まれる計畫になつて、青少年の移民は現地で猛烈な訓練を行つてゐます。されば、これに配するだけの立派な大陸の花嫁をも同時に養成されねばなりません。

在來、日本の海外發展がもう一步といふところで、成功しなかつた大きな原因といひますと、それは、主として女性の協力を得なかつた點であります。これを考へても、移民男性の好伴侶となり、すぐれた協力者となるやうな移民女性が必要であります。現在、内地の各府縣において、花嫁移民の鍛錬所といふやうなものが設置されて、いはゆる「大陸の花嫁」の養成につとめられ

てゐますが、結局、かういふことは、國家が強制的に行つて出来ることではありません。女性自身が國家のために一つの捨石となつて働かうといふ進歩的な精神によつて自覺するところがなくてはなりません。私共は、日本の女性、殊に若い、逞しい女性に對して、このやうな進取的な自覺を求めてやまないであります。

南進日本と女性の力

新興日本が目ざすところの大東亞共榮圈の確立のためには、大陸の開拓と共に、南方海洋への進出といふことも極めて大切であります。元來、我が國は島嶼國として、海外飛躍の精神に富み、かの御朱印船の昔には、今日から見るとまるで木の葉のやうな小船に乗つて、よく南洋の大海へ乗り出し、海國日本の國威をかゝやかしたのであります。その後、江戸時代に入つて、徳川幕府の鎖國政策のために、一時邦人の海外發展は阻止されたといふものゝ、なほシヤム(今のタイ國)に渡つてその國の内亂を平定し、國王の女婿となつた山田長政の如き、又、臺灣に赴いてオランダの大守を擯黜した濱田彌兵衛の如きものがありました。進取の氣性に富んだ日本人

は、絶えず南洋の諸國に向つて、その鵬翼ほうよくをのばさんとしてゐたのであります。

まことに國防日本の將來におきまして、北門の守りとして大陸は日本の生命線と考へれば、南洋はこれまた日本の生命線であります。されば、大東亞共榮圈の確立と共に、南方開發といふことは、將來、私共日本國民の双肩にかゝる大きな使命となるわけであります。

かくの如き南方開發の必要が考へられるとき、かの大陸開拓と同じく、それが男子のみによつて行はるべきものでなく、やがては女性の協力が必要となるのであります。

元來、我が國の女性は、神功皇后の御事は申すまでもなく、進取の氣象に富んでゐまして、海外へ航出することが國禁となつてゐた時代から、すでに臺灣、シヤム、安南等にはいはゆる日本町といふものが出来て、そこには幾多の女性が赴き、男子を助けて大いに大和撫子の意氣を示してゐたのであります。前にお話しましたシヤムの日本娘の如きは、そのもつとも代表的な女性といはれませう。今日は未だかうした日本人の南方進出にともなふ日本女性の活躍についての事蹟は、あまり具體的に知られてゐませんが、熱風の吹きすさぶところ、椰子の葉の茂るところ、彼女等が男子に協力して種々の産業に従つた事蹟は、決して尠くないのであります。のみならず、

南進日本の將來を考へますと、日本女性の南進協力といふことは愈々必要でありまして、かの朝鮮に日本村を建設して、我が國の大陸進出の上に、自ら捨石とならうとの意氣を示した奥村五子子女史のやうな女性の出現が望まれます。

今次の大東亞戦争において皇軍の占據するところとなつた南洋の島々は、何れも豊富な資源を藏し、天然の寶庫とさへ云はれてゐます。しかるに、これらの無限の資源を藏する寶庫は、貪婪飽くところを知らぬ英米人のために自由に掠奪され、蠶食され、その土人は、彼等の非人道的な爪牙に虐使されて來たのであります。されば、これらの寶庫を再び東洋民族の手によつて奪還し、英米の鬼畜共に虐使されてゐる不幸な東亞民族を解放し、八紘一宇の御稜威に浴せしめ、ここに樂土の共榮圈を建設することは、大東亞戰の最後の目的であり、又、私共日本國民の使命でもあります。そして、重大な使命を完遂するためには、たとへば文化の方面にしても、教育の方面にしても、生活改善の方面にしても、民族共榮といふ點において、どうしても日本女性の力を必要とするのであります。

かのマーシャル群島などには、すでに多くの日本女性が赴いて、南風吹きそよく椰子の葉蔭

で、男子と協力していろいろの仕事に従つてゐるのであります。將來は、マレー半島にも、フィリピンにも、スマトラ、ボルネオの諸島、その他、南方の大陸、島々に、進取的な氣性に富む日本女性の活躍が見られることだらうと思ひます。

輝しき南進日本の前途、洋々たる大東亞共榮圈の確立、そこに求められるものは、遅ましき日本女性の力であります。

女性の勤勞奉仕

西洋では、一般にドイツの女性がよく働いて家庭の主婦に適するといふので、嫁を娶るならドイツの女性に限るといふやうなことがいはれてゐますが、日本の女性もよく働くといふ點で決してドイツの女性にヒケを取りません。かういふことを云ふのは、男子として甚だ面目ない話であります。我が國の或る地方では、女性の勞働によつて立派に男子を食べさせてゐるところさへあります。女が一人前になつて男一人養へないやうでどうするといつたわけで、まことに凄じい話です。これは、しかし、どうかと思ひますが、働くといふことにかけては、日本の女性ぐらゐ

よく働く女性はありません。まるで働くために生れて来たやうで、世界中の如何なる國の女性よりもよく働くことだけは確かであります。

しかし、かうしてよく働く日本女性のなかにも、近時、西洋かぶれのした都會文化の悪弊の一つとして、いはゆる有閑女性といふものが出来て、働かないことを自慢にしてゐるやうであります。これは、およそ今日の時局を認識しない、まことに困つた人だと思ひます。今日は、一家にはお金があるから、そんなにガタピシと働かなくてもよろしい」などと考へる時代ではありません。働くといふことを、たゞ報酬を得るためのものだと考へるのは、大まちがひであります。今や我が國は、男子を第一線に出動させて、そのためにあらゆる部門の産業が著しく生産力の低下を招いてゐますから、女性によつて二倍の生産力を發揮されることが、何よりも必要とされてゐます。銃後における生産力を十二分に得るためには、犬猫の手も借りたい時局に、働かなくてもいゝからといふやうな個人的な理由から、呑気に遊び暮してゐるといふのは、實に國家への不忠の上もない次第であります。それは、積極的に國を害してゐるものではないかも知れませんが、消極的に國家を害するものと云へるでせう。

されば、最近、勤勞奉仕といふことが各方面から叫ばれて、未婚の女性は勿論、たとひ人妻であり、家庭の主婦であつても、時間的にすこしでも餘裕のあるものは、職場に出て働くことが要求されてゐます。しかし、この勤勞奉仕といふことに就いて、よく考へてみなければならぬのは、その精神であり、その態度であります。昔、金持が道楽から土いぢりをしたやうに、たゞ面白半分に、遊び半分にお手傳ひをされたのでは、甚だ迷惑であります。と云つて、體裁がよく、仕事が樂で、その上に収入が多いならばといふやうな、さうした贅澤な、虫のいゝ氣持は絶対に許されません。勝手氣まゝな個人的な要求から、職場に出て働くのでは、勤勞奉仕になりません。國家に御奉公するつもりで働くのだといふ心構えが必要であります。

それに就いて、私は、いつぞや明治神宮を參詣した時、眼にふれたことがあります。どこかの女學校の生徒か、それとも女子青年團の人々か知りませんが、參道のゴミを拾つて歩いてゐるのです。私は、これはまことに結構なことだと思ひまして、彼女等を指導する方々にも大へん敬意を表したのであります。ところが、彼女等があちらに一とかたまり、こちらに一とかたまりとなつて、何かつまらぬ雑談に耽りながら、ゴミ入れの籠をさも荷厄介のやうにブラブラさせてゐる

のを見て、そのまるでまことごとのやうな「勤勞奉仕」に、これは困つたものだと思ひました。このやうな勤勞奉仕は、勤勞奉仕の精神を冒瀆するものであります。彼女等は何分にもまだ年若い少女のことで、無理のない點もありませんが、彼女等を指導する人々に再考していただきたいと思ひました。

八十五年の奉仕生活

これは、明治時代のことではありますが、その身に振りかゝる災厄を見事に克服して、心樂しい奉仕の生活に入つたといふ、まことに尊敬すべき女性があります。

伊豆七島のなかで新島といへば、古くから人々に知られてゐるところであります。その島の一部落に生れた宮川タンさんといふのが、この美談の主人公であります。

タンさんは、その地の慣はしで十七歳のとき早くも良人を迎へ、農業を営み、夫婦の仲もまことに睦じく、二人の子供も生れ、貧しい暮しのなかにも、至つて平和な歲月を送つてゐました。ところが、明治十一年に、この島に初めての猛烈なコレラが流行して、良人と六つになつた長女

と、親類から預つてゐた娘と、一家五人のうちで三人までも命をとられ、當時二歳の長男榮次郎さんを抱いてあとに残つたタンさんは、あまりの悲しさに一時呆然としてしまつたのです。しかし、彼女は、人生のなかでこれ以上の不幸はなからうと思へる災厄のなかに、信仰の力によつて、遺兒を守つてどこまでも生きぬかねばならないと覺悟をきめました。

そのうちに、タンさんは、世話する人があつて、再婚して二人の女の兒を生みました。しかし、この再婚の良人の福松さんは、たゞおとなしい一方の人で、生活は殆んどタンさんの手によつて營まれました。肥桶をかついで畑にも行けば、薪を作り山にも行く、それからまた、磯に出て海苔を採り、櫓をあやつつては若布や海藻を採るなど、ナリもフリもかまはず、一日まつくろになつて働くといふ有様で、部落の人々もタンさんの働きぶりに眼を丸くして感心してゐました。その烈しい勞働のお蔭で、貧しい生活のなかにも幾らかの貯へも出來て、これでいくらか安心だと思ふ間もなく、タンさんは、また、第二の災厄に見舞はれたのであります。

それは、タンさんが良人と共に萱を刈りに山に登つてゐた留守の間に、火事が起つて、家が丸焼になり、残つたものといへば、手に持つてゐた鎌が二挺と、濱につないであつた小舟が一つだ

けでしたが、その舟さへも、間もなく暴風にさらはれてしまつて、持物は何一つもなくなつたのであります。福松さんはあまりのことに氣落ちがして、それからどつと病の床に就きましたが、勝氣なタンさんは、三宅島の親戚から材木をとゝのへて来て、女手でとにかく家らしいものを建てました。そして、重なる災厄のなかにも、更に氣落ちすることなく、生活をたて直すために、甲斐々々しく働いてゐましたが、やがて新しく生きる道を見出しました。

新島の西の方、二軒のところに式根島といふのがあります。小さな島でありましたが、まだ人が手をつけてゐないで、資源も大へん豊富でありました。殊にむろ鱈や海老などの海産物に富んでゐましたから、タンさんは、そこに渡つて新しい生活の道を開拓しようといふので、先づ姉嬢だけをつねてその式根島に渡りました。當時、タンさんが十八人目の移住者であつたといひますから、その島は殆ど無人島にひとしかつたのです。彼女はホンの雨露をしのぐばかりの堀立小屋に住んで、密林を切り開いて畑を作りましたが、その勞働の烈しかつたことはとても言葉につくされません。時には食べる物にも困つて、山のあけびを口にして飢を凌いでゐたこともありましたが、とにかく、倦まずたゆまず働く力といふものは偉大なもので、僅か一年そこそこの間に、

どうにかこうにか一家の生活をたてることが出来るやうになりました。

そこで、タンさんは、新島から良人と妹娘を呼びよせていつしよに暮すことにしましたが、彼女はまたも悲しい打撃にあひました。それは、當時二十二歳の若者になつてゐた長男の榮次郎さんが、或る日漁に出て、黒潮躍る式根島の一角で、暗礁にぶつかつてあへなき最後を遂げたことであります。タンさんは、この子に家のあとを繼がせやうと大きな望みをかけてゐただけに、その悲しみは他目にも氣の毒でありました。

しかし、彼女は、幾度となくふりかゝる不運不幸にも世を呪つたり、人生をはかなむだりすることはなく、自分の苦しい體驗から推して人々の苦しみを除かうと、その温かい母性愛を島の人人にふりかけて行きました。それは、佛様のやうな大慈悲と申されませうか、その後のタンさんは信仰の人として生きました。

タンさんがたゞ黙々として働いてゐるうちに、三十餘年の春秋がすぎて、島に移住する人々も次第に殖えて來ました。この間に、彼女は、この島に始めての共同便所を設けて島内の清潔を圖つたり、濱邊に樹木を植ゑて防風林を作つたり、島の青年團の基本財産として植林をやつたりす

るなど、次から次に公共の仕事に力をつくして、島の人々からまるで生神様のやうに尊敬されたのであります。

かくして、タンさんはいつしか六十九歳の高齢に達してゐたのでありますが、その頃から多年の宿願であつた燈臺の建設に取りかかりました。ところは、島の小濱港に程近い高杜山で、その附近は暗礁が多く、黒潮の流れが激しく、帆船や漁船の難破するものが毎年どのくらゐあるかわからぬといふので、魔の海とされてゐました。榮次郎さんの遭難したのもその邊でありました。その息子の菩提を弔ふといふ氣持もあつたでせうか、彼女は、そこに燈臺を立て、今後のさうした不幸をなくしようと考へてゐました。しかし、タンさんは、このことを誰れにも明かさず、自分獨りの力でこのことをやりとげようと決心しました。

それから、タンさんは、毎日鋏を持つて高杜山に登りました。先づ頂上に場所を定めてその邊の樹木を伐り拂ひ、地ならしをして、次に、海邊に突き出てゐる岩山の岩を切つて石段を作つて、上り下りにも便利にしておいて、今度は濱邊から木箱に砂利を入れて運びました。それは、七十の老人には相當過激な労働でありましたが、これも御國のためだと強い信念で、およそ三年

間、一生懸命に働きつゞけました。

それは、初夏の或る夜のことでありました。高杜山の頂上から明るいランプの光りが、そのあたりの海上の暗闇をばつと照し始めたのです。

「あゝ、毎日のやうに高杜山に登つてゐた、あのお婆さんの心願は燈臺であつたのか。」

島の人々は覺えず感歎の聲をあげました。

魔の海と呼ばれた難所も、それからは殆ど難破坐礁の難にあふ者がなくなつて、その附近を船出する人々は、どれほど助かつたか知れませんが、タンさんの三年間の努力は、かくして報いられたのであります。

その後、タンさんは、寒暑にかゝはらず、風の夜も雨の夜も、自分でこのランプに火を點し、その側に建立した觀音堂に海上安全の祈願を捧げ、十五年の春秋を通して、たゞの一日も缺かすことなく、八十五歳の老體を以て今もなほ貴い奉仕の生活をつゞけてゐるのであります。

このタンさんの崇高な精神と鋼鐵の力、その奉仕の生活こそ、將來の日本を育て、行く若い女性の模範としていたゞきたいものだと思ひます。

働く女性と職域奉公

現今、都會と云はず、地方と云はず、多くの年若い女性が産業の戦士として活動してゐますが、今日、私共は日々の仕事を持つてゐるといふことに、限らない幸福をその身に感じます。朝、床のなかで眼をさましたとき、先づその一日の仕事の段取を考へながら、今日もまた元氣に楽しく職場で働きたいと心に誓ふのであります。

昔は、仕事もせず一日ぶらぶらと遊び暮してゐるやうな身分の人々は羨まれたものでありますが、今は全然反對で、さういふ人々を見ると、何となく淺猿しく氣の毒に考へられます。そして、毎日與へられた仕事にいそむことの出来る自分自身が大へん幸福に考へられます。まことに、自分の身體が健康で、家庭に何の心配ごともなく、仕事の上に何の故障も起らず、親しい同僚たちと心を協せて、終日まごころをこめて、いはゆる職域奉公の臣道を實踐することの出来るのは、日本國民としてこれにすぎた幸福はないと思ひます。こゝに、産業戦士としての限らない矜持けいぢがあり、云ふにいはれぬ満足があります。

畏くも、大正天皇の御製に、

年々に我が日の本の榮行さかくも

いそしむ民のあればなりけり

と仰せられてゐます。我が國が一年一年と盛んになつて來たのも、それぞれの仕事に勵む國民のあるためであると、國民の職域奉公を嘉よませ給へる大御心を拜することが出来ます。

又、明治天皇の御製には、

國をおもふみちにふたつはなかりけり

軍の場ばにたつもたゝぬも

と仰せられてあります。國家非常の時に當つて、戦線で活躍する將兵も、銃後の仕事に勵む國民も、愛國のまごころにはすこしも變りはないとの大御心が拜せられます。

私共國民はこのやうな有難い大御心を拜して、ますます職域奉公のまことを誓ひ、それぞれ與へられた仕事に勵まねばならないと思ひます。

こゝに、その身は貧しい職場の一女性にすぎませんが、私慾を忘れ、ひたすら職域奉公の日本

精神に生きてゐる立派な人があります。それは、關口リヨ子さんといつて、その人の職域奉公の實踐は職場に働く若い女性の模範として、今や全国の各職場に語り傳へられてゐます。

新潟縣の某村に生れたリヨ子さんは、両親と弟二人で、貧しいながらも温かな家庭に育つてゐるうちに、彼女の十一歳のとき、父親が亡くなりました。そこで、彼女は尋常三年で學校を止めて、母を扶け、小さな弟の世話をして、村人に養められながら、十九の春を迎へましたが、その年の秋、母は子供たちの行く未のことを案じながら、父の後を追つて勞苦の一生を終へました。リヨ子さんは、一時途方に暮れましたが、小さな弟たちの姿を見ると、やがて母に代つて家を興さねばならないといふ重い責任を感じて、自分の手で一家を支へて行かうと決心したのです。

娘さかりの身をナリフリも構はず、晝となく夜となく汗みづくになつて働くリヨ子さんの姿を見て、村の人々はみな感心してゐました。そのうちに、弟たちもそれぞれ大きくなつたので、彼女は、二十三のとき、懇望されて嫁ぎました。ところが、運が悪くて、この結婚は不幸に終つて、夫婦の間に子供が一人生れたのに、その翌年に離縁となりました。リヨ子さんは、子供をお

いて自宅に歸つて、両親の位牌の前でさんざん泣きくづれましたが、そのとき、もう二度と結婚しないで、獨立して家を興さうと決心を固めました。そして、東京に出て有名な紡績工場へ就職したのであります。

さういふところで、二十四といへば、年長者の方です。年は喰つてゐても仕事にかけては新米ですから、十七や八の小娘に笑はれたり、叱られたりして、いろいろと厭な思ひをすることもありました。リヨ子さんは決して厭な顔をせず、さうした小娘たちから仕事を教はりながら、ただ熱心に勉強しましたので、忽ち仕事に熟練して、今まで教へられてゐたものがアベコベにひとに教へるやうになりました。仕事の上ばかりでなく、何事にかけても人よりすぐれ、よく注意が行きとゞくので、間もなく寄宿舎では室長に選ばれました。

彼女は、早く両親に分れて苦勞したために、親の有難さが身にしみてゐたのでせう。室の人々には親の許への手紙を缺かさないうやうに勧め、筆、紙、硯などを自分で買つて與へました。裁縫なども一々自分が手を取つて教へるといふ有様で、彼女の室の若い女性たちはみな彼女を姉とも親とも慕ふやうになりました。さうした室内に於ける場合は、まことに和やかなものでありまし

た。

その頃よく寄宿室の外には、誰れが捨てるのか、鼻緒はなぞの切れた草履などが散亂してゐましたが、リヨ子さんは、それを見つけると知れずに修理して、キチンと揃へておくのでした。今まで見向きもされないでゐた捨草履もさうして履けるやうになつてゐると、誰れかゞそれを履いて立派に役に立てゝゐるので、それがリヨ子さんにとつてこの上もない嬉しいことでありました。

又、職場にあつては自分の仕事を一心不亂に勤めるのはもちろんのことですが、お正午ひるの休憩時間などに、他の女従業員たちが思ひ思ひに遊んでゐる間にも、リヨ子さんは工場内に怪我や災害の因もとになるやうなことの無いやうに見廻るのでした。

或る時、硫酸を使用してゐる作業場に、リヨ子さんは自分で長靴を買つて来て、五六足も揃へておきました。職場の者は、これは有難い、工場長もなかなか気が利くと思つて履いてをりました。たまたま工場長が見廻りに來たので、皆の者が長靴の禮を云ふので、不思議に思つて調べてみると、リヨ子さんのしたことがわかつて、工場長も彼女の篤志に感心しました。

これらはホンの一二の例にすぎませんが、何事につけてもかういふ風に、工場のためになるや

うに、皆のためになるやうにといふ親切な心から、自分の骨折はすこしも厭はず働くのでした。しかも、それを自分の手柄にして、褒めて貰はうとか、昇給させて貰はうといふ考へなどはすこしもありませんから、誰れの目にもその行ひは非常に氣高い感じを與へるのでした。大勢のところ、一人でもかうした善行の種子を蒔く者があれば、それに見習ふ者が出来る、また、それに感謝する者も出来るので、工場全體が明るく朗らかになつて、リヨ子さんの存在は益々有名なものになり、會社からも功勞者として次第に重く用ひられるやうになりました。

そのうちに、十六年の歳月が流れて、リヨ子さんも四十歳になりましたから、いつまでも厄介になつてゐるのも心苦しいと云つて、いよいよ圓滿に退社することになりました。その身は一女従業員にすぎなかつたのですが、會社では彼女の功勞を重んじ、彼女が會社を去る日、社長は重役一同と共に記念撮影をなし、工場全員が集つて、彼女の善行篤行を語り合ひました。その時、リヨ子さんの貯金は一萬四千圓、それに退職手當や功勞金が一千圓と、記念品が一個であつたといひます。初めは、二三百圓もためたいといふ考へであつたさうですし、また、他人のために金を出すことを吝まなかつたのですが、よく儉約して、無駄遣ひをしなかつたので、知らず知らず

の間にそのやうな巨額の貯金が出来たのです。

十六年間の勤積といふのは實に立派なものでありますが、私共はたとへ三年勤めるにしても、五年勤めるにしても、勤めてゐる間はこのリヨ子さんと同じやうな心掛で仕事に勵みたいと思ひます。自分の身勝手といふことはすこしも考へず、仕事のために友達のためにすべての者が幸福になるやうにとの一念で、作業に力を入れ、人々にも親切をつくして暮してゐれば、第一に自分の心が安らかで楽しみが多く、周囲の人々の心持をも明るく愉快にすることが出来ます。そして、それがまた銃後の女性としての國家への御奉公になり、いはゆる職域奉公の臣道を實踐してゐることになるのです。私共は、我が國が今日のやうな強大な國家となつたのも、歴朝の御仁慈のもとに、私たちの祖先が代々相繼いで、勤勞奉仕、職域奉公のまごころをつくして來た結果であることを、ゆめゆめ忘れてはならないと思ひます。

社會と女性の力

社會活動と日本女性

日本の女性は、久しく貝原益軒先生の女大學によつて教育されて來て、今日でもなほさうした封建時代の儒教思想の影響は存外に強くて、いはゆるよき花嫁となるやうに教育されてゐます。彼女たちは、娘から妻になり、妻から母になつて、その一生を家の片隅かたすみで、良人や子供たちの蔭となつて生きて來ました。今でこそ若い女性はぞくぞくと職場に出て、いろいろの仕事に従つてゐますが、昔の女性の生活といへば、家庭以外には殆どなかつたわけでありました。女の幸福といへば家庭の幸福であり、女の悲しみといへば家庭の悲しみでありました。しかし、これはあまりにも窮屈なことで、今日の社會狀勢ではどんなものかと思はれます。これからの女性の生活は、家庭以外にもどんどん進出しなければならぬのではないでせうか。現に日本女性のなかにもその一生を社會活動に捧げ盡してゐるやうな女性もすくなくありません。

女性が社会的な活動に従事するといふことに就いては、勿論、いろいろの批評もあります。申すまでもなく、人間の力は限りがあつて、そんなに四方八方のことに力を注ぐことの出来るものでありませんから、社会的の活動をすれば、家庭内の仕事はつい疎かになりがちであります。妻としての仕事、母としての義務を怠るやうにならぬとも限りません。それでは、日本女性としての道徳に反するといふわけですが、しかし、社会に活動するからといつて、まるつきり家庭内の仕事を放擲してしまふといふのはあまりにも極端で、家庭における女性としての義務をも或る點まで果しながら、なほ且つその餘力を社会の活動に注ぐといふことは出来得ないでせうか。これは可なり無理な註文かも知れませんが、その人の心構えによつては全然實行の出来ないことでもなからうと思ひます。

現に隣組の仕事などは、多く女性の手によつて行はれてゐるやうですが、二人三人のいたづら盛りの子供のある奥さんでも、結構組長などをとめて、いろいろと手数のかゝる仕事を果してゐるのであります。女性には、従来、このやうな仕事は出来得まいと考へられてゐたのであります。隣組が出来て以来、女性のこの方面における活動は實際目覺しいものがあります。

これを見てもわかるやうに、女性は家庭の妻として、母としての義務を果しながら、社会的活動に従ふだけの力を持つてゐるのであります。西洋では、社会的の活動をしようといふやうな女性は一先結婚をしないで獨身であるやうでありますが、我が國では、結婚して立派に家庭を持ち、かつは數人の子供の母親であるやうな女性が進んで社会的な活動をしてゐるのであります。すなはち、その一方において完全な家庭の女性として、良人の世話もし、子供を育てる面倒も見ながら、他方で男子も及ばぬばかりの社会的な活動をしてゐる女性さへあります。そして、この家庭の女性でありながら、その一方、社会的の女性であるといふことは、日本の女性道徳に於いて決して矛盾しないのであります。何故なれば、良人に仕へる貞淑の精神は、自分一身の幸福を犠牲にして社会のために盡す精神と合致するからであります。こゝに、世界に比類のない日本女性の美しさがあり、力があります。

かういふ日本女性の美點に就いては、西洋人でありませんが、日本に歸化し、日本の女性を妻とし、日本及び日本人の性格をよく認識してゐた小泉八雲（ラフカチオ・ヘルン）先生が、次のやうな意味のことを述べてゐます。

たゞ他人のために働き、たゞ他人のためにのみ考へ、たゞ他人を楽しませることにのみ幸福を感じ、柔和温順な性質でありながら、いざとなれば、いつでも自分の生命を投げ出すことを辭せず、義務のためには萬事を犠牲にすることを躊躇しないのが、日本女性の性格である。

これはまことに明敏な理解を示したものであつて、ここに、新しいとか、古いとかいふやうな言葉を超越して日本女性の傳統的な姿が見られます。

時局いよいよ多難にならうとする今日、一人で二人分も三人分もの仕事をしなければならぬ時代に、このやうな日本女性の性格は大いに發揮されねばなりません。家庭内の仕事さへしてゐれば、社會の仕事などはどうでもよいといつた風では困ります。家庭内の仕事にすこしでも餘裕をみつければ、せめてその分だけを社會的活動に振り向けてゆくやうにしたいものだと思ひます。否、たとへ實際には社會的活動をしてゐないまでも、その心持において、たゞ家庭内だけの仕事に満足してゐないで、何とかして社會的な仕事にも従ひ、よしんば自分の幸福を犠牲にすることがあつても、社會のために盡さうといふ意欲があつてほしいと思ひます。これこそ、今後の日本女性が時難を克服して、生き抜く上にもつとも大切な心構えではないでせうか。

慈善事業と愛の力

女性の社會的活動の基調をなしてゐるものは、愛の力であります。その身を犠牲にして社會の不幸な人々を救済したいといふことが、その主なる動機となつてゐます。されば、女性の社會的活動といへば、先づ慈善事業が擧げられます。慈善事業は、女性の愛の精神力を基調としてゐるのであります。

日本全國のいたるところに、孤兒院だの、育兒院などがあつて、両親のないみなし兒、また、親があつても養育を受けることの出来ないやうな哀れな子供を世話してゐますが、さういふ事業に従つてゐるのは多く若い女性であります。また、その一方で、いろんな女性の團體がつくられ、それぞれの義捐寄附などによつて慈善活動を行つてゐます。その他、各地に散在するところの保育院、感化院、養老院などにおける慈善事業の主力となつて働いてゐるのも、實に女性であります。

慈善は、愛の精神力に富む女性の生れながらの性質だといへます。それで、いろんな意味で家

庭生活に餘裕のある女性ならば、慈善事業に活動するといふことは、女性としての生れながらの性格をよく發揮し、その一生を意義ふかくすごすことになりす。

慈善は、社會愛の精神に基き、恐らく女性に限らず人間としてなすべき道であります。しかしそれが一片の虚榮心から行はれるとすれば、決して悦ばしいことではありません。女性は虚榮心に囚はれ易いだけに、女性が慈善事業に従ふときは、この點をよく考へなければなりません。それについて、女子教育家として有名であつた故棚橋絢子先生が次のやうなことをお話しになつたことがあります。

慈善とか、慈善事業とかいふことは、近ごろしきりにとなへられる流行言葉であつて、特に婦人と慈善とは、はなれることの出来ないものゝやうに思はれてゐます。なるほど情にあつた婦人としては、慈善に意を注ぐことは當然であつて、わたくしどもは力の及ぶだけ、このやうな事業に努力せられることを希望するのであります。情にもろいといはれる婦人にして、幼くして父母なき、老いて扶養すべき人なき、病みて財なく、俄に天災を受けたる、かくの如き人に同情して、應分の義捐寄附又は保育、養老扶持をなすことは、實に願はしいことでありま

す。

慈善の行ひは、かくの如く、もつともよいことに相違ありませんが、それは、まつたく一片の虚榮心などで行はれてはならないと思ひます。人間が相共に助け合ふといふ大きな精神のもとに、その生活における餘裕をそこに用ひんとする眞剣な、實質的な行ひであります。

この棚橋先生のお話でもわかるやうに、女性が慈善を行つたり、慈善事業に活動したりするのは、たゞ世のなかの不憫なもの、氣の毒なもの、哀れなものに、物質的なめぐみを興へるといふばかりでなく、さういふ下積の人々が物質にめぐまれぬ生活のために變にねぢけてゐるその性格を、博大な愛の力で矯め直す、感化指導するといった覺悟をもつてかゝることが必要であります。

あだかも飢ゑた犬に餌を投げ與へるやうに、哀れな境遇の者に金錢を投げ與へるやうな慈善は、決して好ましいものではありません。すなはち、與へるものゝ優越權をあまりにはつきりと見せびらかしたり、また、慈善行爲に對して自分の膝もとに頭をさげさせるといふやうなことは、自分でその慈善の行ひを殺してゐるやうなものです。いはゆる自己満足のためにするのは、慈善

行爲にしても、慈善事業にしても、決して本當のものではありません。

日本女性の慈善事業に就いて、先づ私共の思ひ起すのは、自分の愛兒を犠牲にして、世の貧兒の教育のために盡された瓜生岩子刀自のことです。

愛兒を犠牲にして

明治維新の折、最後まで官軍に抵抗した會津では、男も女もすべて討死をし、あとに残されたのは幼い子供たちばかりでありましたが、かれ等はみな住む家がなくて、可哀さうに路頭に迷つてゐました。さればといつて、誰れも彼も、家を焼かれたり、良人をなくしたりしてゐる者ばかりでありましたから、これらの哀れな子供の世話をやらうといふものは一人もありません。政府に民政局がおかれて、戦後の會津藩のことなども支配してゐたものゝ、そこまでは手がとどかないのです。この時、

「たとへ、その父兄は、官軍に抵抗したとしても、かれらの無邪氣な子供たちには何の罪があらうか。彼等をこのまゝ捨て、おくのは、あまりにも可哀さうだ。なんとかして、その面倒を見

てやりたい。」

と、雄々しくも立ちあがつたのが瓜生岩子刀自であります。

瓜生さんは、文久十二年二月十五日、岩代國耶摩郡熱鹽村に生まれました。お父さんは、渡邊利右衛門といひましたが、九歳の折、死別し、その年、家が火事に遭つて丸焼になつて、彼女は早くも人生の苦難を経験したのです。天保十三年、十四歳で、叔父に當る山内春瑞といふ、會津藩の典醫の許に見習奉公に行き、十七歳まで勤め、その年、佐瀬茂助といふものを婿養子に迎へて、呉服屋を始めました。そして、一男三女を生んだのでありますが、良人の茂助は病身がちの男で、文久二年、瓜生さんの三十四歳の折、たうとう亡くなりました。そこで、彼女は、子供たちを他家へ奉公に出し、自分は未亡人としての半生を世の貧困のものゝために捧げやうと覺悟しました。明治元年、會津戦争の起つた時にも、藩の婦女子を引きつれて戦場に入り、敵味方の區別なく湯水を給し、握り飯を運び、傷病者或は老人や子供たちを救護するなど、大へん活動したのであります。

さて、戦後、會津藩の惨状を目撃した瓜生さんは、みづから民政局に出願して、藩校であつた

日新館といふのを再び興し、そこへ子供たちを入れました。そして、浅岡といふ先生に、児童教育の擔任を依頼しました。

ところが、この浅岡先生は、官軍に敵對した一人であるといふことがわかつたので、民政局の手に捕へられました。

「かんじんの先生がなくなられては、折角、これまでにした學校も閉鎖しなければならぬ。わたしは、それでいゝとして、いたいけな多くの子供たちが可哀さうです。なんとかして先生を救ひ出す道はあるまいか知ら。」

と、瓜生さんは、いろいろと思案をこらした末、當路者に哀願しようと思ひました。

しかし、それもたゞ助けてくれといつても、許される筈はありませんので、自分の長男を先生の身代りとして差出さうと思ひました。そこで、長男の祐三さんに向つて事情を打ち明けた後、

「わたしがお前を愛してゐないから、こんなことを云ふのだと思つてくれては困りますよ。それは、もう、わたしのためには、かけがへのない大事なお前であることはわかつてゐます。けれど、わたしは、今、かうしてたくさんの子供たちを預つてゐるので、わたしが身代りになつて出

ては、この學校がたちゆきません。それで、お前はわたしの身代りになり、また、浅岡先生の身代りになつて、この場を救けてくれませんか。」

かうした切々の情をこめて、わが子を口説く瓜生さんの心のなかはどんなであつたでせうか。

私は、子供の折、芝居や講談でよく見きゝした「仙臺萩」の政岡の心情を思ふのです。

しかし、祐三さんも、立派な男子でありましたので、お母さんの苦しい心をよく察して、すこしも恨むやうな氣振はなく、

「はい、よくわかりました。わたしは、みんなの犠牲になりませう。」

と、こころよく承諾しました。

かうして、泣いても泣いても泣き切れないやうな辛い思ひを胸三寸にをさめ、瓜生さんは、自分の愛兒を身代りとして突出しました。その上で、日新館の事情を述べ、當路者に取りすがつて、浅岡先生の釋放を頼みました。

當局でも、さすがに、この瓜生さんの悲壯な覺悟にふかく感動して、彼女の要求を入れることになりました。

かくて、先生をうしなつて、一時は途方にくれた日新館には、また、明るい光がさしました。けれど、身代りに差出したわが子のことを思ふと、瓜生さんもさすがに胸がいつばいになるのです。

明治五年七月、學制が發布されて、日本の全國に學校が設けられることになりました。そこで、日新館も閉鎖して、これ等の子供をそのまま、小學校へ移しました。

祐三さんは、その後、東京に送られました。幸ひに罪は許されて、間もなく故郷の會津へ惹なく戻つて來ました。

お金のどつさりあるものが、そのお金をばらまいて、人を助けるのは何でもありません。しかし、岩代國耶摩郡の一農家に生れた瓜生さんは、四人の子供を残されて、良人に先だたれた寡婦であります。ことに、良人は七年といふながい歳月を、病床についてゐたために、まことに貧しい生活をつゞけてゐたのであります。

その貧しい生活をしながらも、憐れなものを見ると黙つてはゐられない、たとへ、自分の着てゐるものを脱いで裸になつても、三度の食事を二度にへらしても人助けをしたい、こゝにこそ、

四海同胞萬物を愛しようといふ、眞の博愛があり、慈善があるのです。それは、止むにやまれぬ切實な氣持であります。

「まことに失禮ですが、あなたはさういふ生活をしてゐて、どうして人に恵みを與へるだけの餘裕があるのですか。」

人々が不思議におもつてたづねますと、瓜生さんは、

「仔細はございませんよ。平生の心掛ひとつで、つゝましく暮して行けば、人を助けるくらいのことなんでもありません。」
と申したとのことです。

我身を忘れ 人命救助

或る西洋の學者は、かういふことを云つてゐます。

他人のために、自己を放擲すること、これを措いて他に愛はない。愛はそれが自己犠牲である時にのみ愛である。たゞ他人に力を與へるばかりでなく、愛する者のために肉體を犠牲にし

て、彼のために生命を棄てる、これより他に愛の解釋はない。このやうな愛にのみ私たちは幸福を見出す。即ち、愛の報酬を見出すのである。

しかし、私共はかゝることを今更に西洋人から教へられるまでもなく、かの「身を殺して仁をなす」といふ東洋の聖者の箴言を受け入れて、自己犠牲といふ、又は、没我愛他といふ美しい愛の力をもつて、世の人々のために盡すことを、日本女性の美德として來てゐるのであります。

これは、昭和八年三月、かの三陸地方に大海嘯の襲來した折の話であります。

當時、新聞の報道によりますと、三千の生命を屠り、五千の漁船を壊し、一萬の家屋を失ひ、十五萬の罹災者を出すといふ、未曾有の災害を招いたのであります。その時、數名の交換手が、かよわい女性の身で、最後までよく通信事務に當つたばかりでなく、多くの住民を災厄から未然に救つたといふ美談がありました。

それは、空気が凍るかと思はれる夜もしんしんと更けていつた午前二時半頃のことです。大槌郵便局では、交換手の佐藤ひめ子さんが職場について居りますと、突然、ドンと強震が來ました。思はず氣を張りしめた彼女は、それから間もなく、かすかながらも妙な騒音の傳は

るのを感知しました。

「あゝ、海嘯だ！」

突嗟にさうに感づいた彼女は、胸を躍らせながら、

「モシ／＼、モシ／＼、こちらは大槌です。今、大海嘯がやつて來ました。」

と、釜石、山田の兩局に急報して、兩局の交換手から町民の全部に通報させました。

つゞいて起る第二回の大海嘯の襲來、それは、まさに地獄繪そのまゝ慘狀でありました。家屋は怒濤に吞まれ、人間も草木もすべて濁流に押し流され、泣き叫ぶ母と子の喚きを交換局の窓から聞きながら、自分の家はどうなつたことかとの氣遣ひもありましたが、自分の職責を感じたひめ子さんは、つひにその席を動かさず、最後まで交換事務に携はつてゐたのであります。

また、一方、ひめ子さんからの通報を受けた釜石郵便局交換手の叶井たか子さん、鎌田はる子さん、山田郵便局交換手の沼崎ついで子さん、湊つや子さん、内館あき子さんたちは、すぐにこのことを警察署、消防署、役場等に通知し、同時に片つばしから電話加入者に急報し、海嘯につゞいて起る火災のなかにも、斷乎として踏みとどまり、自分の本職を全うしました。

彼女たちは、みな十七八から二十一二までの若い女性でありましたが、その非常の場合に臨んでの目ざましい働きは、實に立派なものであります。それは、たゞ自己の一身をすて、世の人々のためにつくすといふ、尊い犠牲の精神によつて高められた愛そのものゝ力だと云へます。

かうして、彼女たちの奮闘のお蔭で、釜石と山田の兩町は、海嘯の襲來がもつともはげしかつたのでありますが、人命の被害は非常にすくなく、山田町の如きは死傷者わづかに七名にすぎなかつたのであります。

松葉杖に縋つて

柔和で、つゞしみ深い日本女性が、いさといふ場合に、その美しい精神力を發揮して、如何にすばらしい活動をするかといふことは、以上のお話でもわかると思ひますが、女性のさうした活動力は、時に有髯男子をも凌いで、驚嘆させられるやうなことがあります。

次に、その例として、松葉杖に縋る不幸な身を、然かも貧困のなかに育ちながら、毅然とした心構えで、つひに全村の指導者とまでなつた女性のお話を致します。

福島縣信夫郡大森村は、その邊における模範村として縣やその他から幾度も表彰されてゐますが、それは、その村に瀧澤マンさんといふ女性があるからであります。

彼女の父は大酒呑みで、家計もなかなか苦しかつたのですが、彼女が國民學校へ上る前後に亡くなり、母もつゞいて亡くなりました。孤兒となつた彼女は、兄のもとに引きとられました。ところが、不幸なマンさんは、なほその上に、十三歳の折、結核性のカリエスで足首のところから切斷しなければならぬ破目になりました。

傷つきやすい年頃の少女が、兩親をつゞいて亡くし、その身は生れもつかぬ片輪者になつた時、その心のなかにはどんなであつたでせう。恐らく泣いても泣いても泣ききれなかつたこと、思ひます。彼女は、そこで、次のやうな手紙を、受持の先生にあてゝ認めました。

私はたうとう片輪者になつてしまひました。一時は、それがとても悲しくていつそ死んでしまはうかとさへ考へましたが、そんなことはいけないといふことに、やつと氣がつきました。

片輪者にだつて出来る仕事は、世の中にくらもありませう。そして、その心になりさへすれば、片輪者だつて御國のために盡せないことはないと思ひます。私はいろいろと考へた結果、

小學校はこれでやめて、福島のカミ縫學校へ入り、お裁縫をしつかり習つて、村の娘さんたちにそれを教へながら、出来るだけのことをして、村のため、國のために、働きたいと思ひます。私は、かう決心してから大へん心づよくなり、世の中が明るくなつて來ました。

内容は、大體、さうした意味のことです。これは、別に誰れに教はるといふことなく、その小さな胸で悩み抜いた揚句、さう決心したのです。十三の少女とは、とても思へないやうな立派な決心だと思ひます。

ところが、かう決心してみたものゝ、世話になつてゐた兄も貧しい暮しをしてゐたので、彼女の希望どほりに、上の學校へ入るといふことは、ちよつと覺末ないのです。

「お前の病院の治療代さへどうして拂はうかと思つてゐるのに、そんな、福島の學校へ上るとなんか、とても思ひもよらないことだよ。」

兄からさう云はれてみれば、兄の家庭内のことも見てゐるマンさんとしては、強ひてとは云へないのです。しかし、自分もこゝまで決心して、先生にまで打ち明けたのだから、なんとかならないものかと、その小さな胸を千々に碎いて考へつゞけてゐますと、こゝに思ひがけなくも、こ

のマンさんの健氣な決心と氣の毒なる情を耳にして、それでは、二年間の學資をすつかり引受けて上げやうといふ人が現はれました。

マンさんは、いまさらながら人の情けの厚いのに泣きました。そして、希望に燃えながら、福島の渡邊女學校まで、毎日往復三里、その不自由な身を松葉杖にすがつて通ひつめました。やがて、彼女は、十八歳でその學校を卒業して、兄の家の二階に裁縫教授の看板を出しますと、村中の娘さんたちは、みな争つてマンさんの家に集まるやうになりました。

たとひ年は若くても、人の師として立つものはそれだけの心がまえがなくてはなりません。マンさんは、さうして多くの娘さんたちに裁縫を教へるやうになると、そのなかから善いことや、悪いことを發見して、よいことは無論大いに獎勵し、悪いことはぜひ矯正してゆきたいと思ひ、いろいろと奔走した結果、その村の國民學校の校長を顧問として、女子同窓會、今のいはゆる處女會をつくりました。そして、毎月一回集まつて、修養雜誌の輪讀をしたり、講演會を開いたり、縣の衛生課の技師を招いて、衛生、育児、看護、按摩などのためになる技能や、農業や養蠶の實地講習會などを開きました。また、敬老會、謝恩會なども年中行事として行ひました。

神社と墓地を掃除するのも、毎月の定めとしました。

マンさんがかうして村の若い女性の先頭に立つて、いろいろのことをするのを見て、保守的な考への村人たちは、最初のうちは、

「片輪者のくせに……」

といつたやうな蔭口もきいてゐましたが、やがて、彼女が自分の身を忘れて、たゞ村のため、人々のために盡してゐるのを知ると、すっかり感心してしまひました。そして、

「お前なんか、一人前の身體をしてゐて、そんなことでどうするのだ。ちとマンさんを見習ふがよい。」

といふのが村の人々の口癖のやうになりました。

女子同窓會は、やがて處女會と改名しました。會員の数はだんだん増へて來ましたが、會が大きくなるにつけて、費用がかさむので、マンさんもそれには何かと頭を悩ましました。そこで、彼女は、會員の手藝、裁縫などの作品展覽會を開いてその出品を賣つたり、また、雑巾を縫はして福島あたりの工場へ賣つたり、また、會員總出で蝗いばこを何石もとつてそれを賣つたりして、會の

資金に充てました。そして、どんなに苦しくても、會員からは一錢の會費も徴收しなかつたのです。

人間のまごころといふものは恐ろしいものです。まごころの力は、どんなにむづかしい仕事をもどんどん成就させて行きます。マンさんの努力で、處女會は年ごとに盛んになり、やがてその村全體がそのあたりでの模範村といはれるやうになりました。かうなると、もう一人だつて蔭口などをきくものはありません。全村の人々は、こぞつてこの不自由な身の女性に深い感謝と、厚い信頼のこゝろをさしげるのでした。

マンさんは、その功勞によつて、縣廳その他から度々表彰されましたが、彼女は決してさうした名譽を得ることを目的として活動したわけではありません。たゞ村のために、村の若い女性たちを感化教導したいといふ純粹なまごころから、さうした活動に、全身の精力を傾けたのです。そこに、彼女の社會活動の美しさがあり、輝かしさがあり、非凡の力が見られるのであります。

農村處女會の活動

現在、各地には、女子青年團とか、處女會とかいつたものが出来てゐます。元來、これらのものは、農村に發生したものでありますが。最近、都會の工場などでは、場所によつては、何千人といふ夥しい女性が従業してゐますので、それぞれの工場内でも、それに類似したものが出来つつあるやうに見受けられます。

抑も、これらの處女會は、男子青年團と協力して、産業能率増進の上に大なる力となり、また、お互ひに精神を練磨し合つたり、女性文化の向上を圖つたりするところに、その目標が置かれてゐます。明日を約束する日本女性の若々しい努力と精進とがそこに見られ、輝かしい日本女性の力がそこに生れつゝあります。私は、かうした處女會の活動の一つの例として、鳥取縣日野郡山上村の處女會の力づよい活動について語つてみたいと思ひます。

この山上村の處女會といふのは極めて有名であつて、今日、山上村がその縣内ばかりでなく、日本全國の模範村として讃えられてゐるのは、まったく處女會の活動によるものであります。今から約四十年ばかり前には、その頃の他の農村といふ農村がさうであつたやうに、その山上村でも、村内の男女の風紀が大へん紊れて、村は日に日にさびてゆく有様でありました。この有様を

見るに見かねたのは、當時山上の學園長をしてゐた内藤岩雄といふ人で、この人が一青年の身を以て村の改革のために立ち上りました。そして、爾來、四十年間その身を忘れて改革に努力した結果、こゝに村風はまつたく一新され、處女會を始め、青年團、在郷軍人會などがいづれも優良團體として表彰され、遂に縣下第一の模範村と謳はれるやうになつたのであります。これには、改革者の努力も偉としなければなりません、その改革者の叫びに呼應して奮起した處女會や青年團の活動をも認めねばならないのであります。

「村内の風紀がみだれるのは、たゞ男子青年ばかりの罪でない。女性にもそれだけの自覺がないからだ。」

改革者は、機會のあるごとに、村の若い娘たちを集めて、その自覺をよび起しました。

この指導に目ざめた村の若い女性たちは、今までの彼女たちの行ひの誤つてゐたことを知り、盆踊などに出て夜おそくまで踊り狂ふ娘たちの姿も、年々減つてゆきました。やがて、その村に處女會が出来ました。これは世間でまだ處女會がどんなものだか知られてゐない頃のことです。それで、人々はこの山上村の處女會を驚異の眼で眺めたのであります。驚異の眼はやがて

羨望の眼に變りました。

山上村の若い女性たちは、青年たちに向つて、いろんな形で心から激勵しました。その激勵は彼等に涙ぐましい氣持を與へ、山上村の青年たちは一人として彼女たちのまごころに感激しないものはなかつたのです。かうして、青年たちの安價な享樂物となつてゐた村の乙女たちも、今はその青年たちから清純な氣持で敬慕されるやうになつて、山上村の若い男女の間には、他村に見られないやうな、まことに美はしい心情が流れ合ふてゐました。

この地方は、一體に砂鐵の名産地として知られ、昔から製鐵業がさかんでありましたが、一時餘儀ない經濟事情のために、それは殆ど休止され、他にこれといふ副業もない、いはゆる純農村となつてゐました。

「これでは、村が貧乏になるばかりだ。なんとかして有利な副業を奨励しなければならぬ。」といふ考へから、處女會が率先して講習會を開いて試みたのが發端であります。これは、やがて農會の手に移され、今日では村の副業として相當な収益をあげてゐます。

「山上の娘さんたちは感心によく働く。嫁をもらふなら、山上の娘さんに限る。」

そんなことを云はれる山上村の若い女性たちは、ほんたうによく働きますが、それはたゞ自分の家のためばかりでなく、處女會のため、村のためにも骨身を惜まず働いてゐます。例へば、處女會の修養費をかせぐために冬は峠越えの木炭はこび、夏は田植の手傳ひ、秋は粟拾ひの共同作業などに従事します。又、大雨があつたりして、村の道路が痛んだといへば、いつでも村の若い娘さんたちが繰出して、砂利や土砂を運んで道路の手入れをします。

村の山上學園といふのが開放された當時、山地であつたために校庭はわづか六十坪にみたなかつたのです。ところが、三十年間に十六回の大工事を行ひ、山を掘り、谷を埋めまして、現在では二町歩の廣さまで開墾されました。このやうな大がかりの作業にも、若い娘さんたちは、軍人會や青年團の人々と協力して、汗と泥にまみれながら働いたのです。

谷間に咲く清らかな皆百合にもたとへたき山上處女會。その美はしい花束の中心となつてゐるのは、三上貞子といふ女性で、處女會の活動には、この三上さんの眞剣な努力に負ふところがすくなくないのです。

彼女は、物質的にはあまり恵まれぬ大工の娘として生れ、國民學校と、四ヶ年の補習學校とを

卒へたばかりでありましたが、学校の成績は非常によく、また、評判の孝行娘でありました。山上學園の校長は、彼女の行末を非常に頼もしく思ひ、

「三上さんのやうな人こそ、教育者になつてこの村を守りたてゝ行くべきだ。」

といつた言葉に、彼女は發奮して、遂に教育者となつて世に立つ決心をしたのであります。ところが、その準備に勵んでゐる折柄、一家の柱とも頼む父がふとした患ひから、つひに世を去つたので、彼女もその志を斷念しなければならぬことになりました。そして、年老いた母と二人の弟を養ふために、米子銀行山上支店の預金係となつて、生活戦線の陣頭に立つたのであります。それは、彼女の二十四歳の春のことでありました。

髪を刈るのに一軒の理髪店さへなかつたやうなこの山上村に銀行のあつたのは稀しいのですが、それにもましてめづらしいのは、全村紅一點の職業婦人として、毎日銀行の窓口に村人の眼をひく彼女の姿でありました。

一家の生計をかよわい女性の細腕で保ちながら、村のために、その先頭になつて、骨身を惜しまず働いてゐる三上さんの活動は、現代の若い女性の生活に如何なる示唆となるでせうか。

技術と女性の力

職場に生きる女性

現代女性の生きる道みちとして、家庭か、職場かといふことは、可なり大きな問題とされてゐます。かの第一次ヨーロッパ大戦の後には、女性は家庭に歸るべきであらうといふことがよく叫ばれました。しかし、これにはいろんな理由があつたのです。當時、戦争の結果、ヨーロッパ各國の出産率が非常に低下して、殊にドイツやフランスの如きは、殆ど危機に頻ひんしたのであります。それは、戦争によつて働き盛りの男子を多く職場に送り出して、女性がその男子に代つて各職場に就いた——ウツカホントかわからないが、イギリスやフランスでは女巡査さへ現はれたといひます——ために、濫あまかい家庭生活といふものが失はれてしまつた結果であります。これは、戦時としては當然のこと、止むを得ないのであります。戦後における人口の激減を喰ひ止めるためには、どうしても外そとに出て働いてゐる女性を家庭に戻す必要があつたのです。それから、これ

は戦後数年して現はれた現象であります。例の金融恐慌のために、あらゆる企業が著しく衰退し、失業者が街頭にあふれるといふ有様になつて、その失業者に職業をあてがふ失業救済の意味からも、なるべく女性を職場から退かせることが必要になつて来たのです。これも、その當時としてはまことに止むを得なかつたことだと思ひます。ドイツのヒットラーなども、今日こそ、國家の人的資源を總動員する建前から、職場に働く女性を讚美してゐますが、その頃は、女性はずべて家庭生活に戻るべきことを強調してゐたのであります。すなはち、女性が家庭から外に出て働くことは、いろんな意味合ひからして歓迎されなかつたのであります。

しかし、今日の社會狀勢は、そのやうなことの叫ばれた時代と、だいぶ趣が變つてゐます。ヨーロッパといはず、アジアといはず、全世界は今や人的資源の大動員が行はれ、かつて職場から離れてゐた勞務者も、今では次第に増加しつゝある軍需又は民需の各生産部門の要求に應じ切れぬ有様であります。各國ともに徵用令といつたやうなものが公布されて、仕事を持たない者は、お上の命令でドンドン職場で働かされてゐます。かゝる有様でありますから、未婚の女性や、たとへ結婚してもまだ母となる前の女性は、さうした男子の勞務力の缺乏を補ふために、よ

しんば半日、何時間でも、職場に就くことが必要とされてゐます。今日、我が國などでも、半日労働などといはれ、家庭の主婦が半日だけは家庭の仕事をして、あとの半日を職場に出て働くことの求められてゐるのは、現在、國家社會が男子勞務の不足から、若い女性の勞務をどんなに要望してゐるかゞわかると思ひます。

日本女性は、たゞ人形のやうに美しく、つつましやかに、家庭の仕事さへしてゐればよろしいといはれてゐたのは、昔のことでありまして、切迫した今日の社會狀勢では、若い女性の勞務を熱望してゐます。されば、若い女性の方々も、この時代性をよく認識して、無駄に時間をつぶすやうなことはなるべくつゝしんで、その時間を職場に出て働くといふ心掛を持つていたゞきたいと思ひます。と云つて、すべての女性が家庭を忘れて職業に従事せよといふのではありません。主婦として家庭を確つかり守つてゐることは、銃後の女性として飽までも大切なことでもあります。職場に出て軍需品をつくることも國家のためであるならば、銃後の家庭にあつて、戦地にある良人に後顧のうれひがなく、子女を丈夫にそだてあげることとも國家のためであります。たゞここで云ひたいのは、銃後の家庭を守ると共に、その餘力を家庭外の勞務の方に振り向けていたゞ

きたいことです。それこそ、一億一心、火の玉となつて進軍しようとする今日、日本女性の新しい生活指標でなければなりません。家庭で働くにしても、職場で働くにしても、我が身を捨て、國家のためにつくすといふ覺悟さへあれば、女性が家庭に生くべきか、職場に生くべきかといふやうな些未な問題は、自然と解消してしまふのであります。

若い男女が結婚して新家庭を建設するといふ場合、男子の力ばかりでも不可ない、と云つて、むろん、女子の力ばかりでも不可ない、男子と女子との協力によつて、始めて立派な家庭が建設されるのであります。このことは、前段でもしばしば述べたところでありますが、職場の仕事も同じことであります。それは如何なる生産部門であらうとも、仕事はたゞ男子の手ばかりで進行するやうに考へるのは大なる誤りであります。今後はどうしても女性の協力がなくてはなりません。職場における女性の力は、男子の力の補足か何かのやうに考へられて、これまででは幾分輕視されてゐたやうであります。これからは、この方面に於ける女性の力を大いに重要視されてもよいだらうと思ひます。それには、女性自身が自己の力を自覺して、それぞれの仕事の技術の上などにおいても、その力を十二分に發揮することが必要であります。

元來、日本の女性は、前にもお話ししたやうに、よく働くといふ點で、世界に比類のないものがあります。昔から、農家における仕事は、男子も女子も殆ど變りなく行はれてゐました。又、漁場における仕事も、同様に女性の手によつて多く行はれてゐました。たゞ都會地における各工場、その他の職場において、女性の勞務者を採用することになつたのは比較的最近のことです。ますが、今後、この方面に於ける女性の進出はますます著しくなるだらうと思ひます。そこで、この方面に働く女性がその力をそれぞれの仕事の技術の上に如何に發揮するかは、國家社會の生産能率の上にも重大なる影響があります。

されば、私は、こゝに働く女性がそれぞれの職場において仕事の技術上どのやうな力を發揮しなければならぬか、それを述べてみようと思ひます。

工場に働く女性

今日、女性の職場として最も多く人数を收容してゐるのは、都會地の各種工場であります。林のやうにたちならぶ煙突から、天を冲して濛々と吐く黒煙、大小の都會における工場は、まさに

新しい世紀を彩る力づよい存在であります。そこには、幾百人、幾千人もの若い女性が、いはゆる産業の戦士として、非常時日本の産業につとめてゐるのであります。

……國運まさに隆々と

東亞に臨むこの朝

全産業の陣擧げて

仰げよ 今ぞ日はのぼる……

——産業報國歌——

それは、働く者のよろこびに輝く彼女等のたくましい肉體から、湧き出づる叫びであります。この産業報國歌の高唱と共に、彼女等の熱と汗との一日の崇い勞務が始まるのです。

産業戦士の重い使命——云ふまでもありませんが、銃砲や彈丸などをつくる軍需品工場につとめてゐる人ばかりが産業戦士ではない、紡績や織物などの工場につとめてゐる人々も、非常時日本には大切なお役目をつくしてゐるのです。たとへそれが直接戦地に必要な品物でなくても、國民の生活に必要なものは、また、外國へ輸出して日本の經濟を助けるやうな品をつくる人々は、

すべて産業戦士であります。産業戦士として、男子が戦場に出て御國のために働くのと同様に、その使命は極めて重大なものと見られるのであります。

産業戦士にとつて最も大切なことは、その與へられた仕事に熱と興味を持つことです。それが如何なる種類の産業であつても、それに従事する人々には熱と興味がなくはなりません。熱と興味はやがて努力をともします。また、この逆に、仕事に努力すれば、自然とその仕事に對しての熱と興味は湧いて來ることと思ひます。毎日同じやうな仕事を繰返してゐるうちには、その仕事にあきて、いつとはなしにダレ氣味になるのであります。その仕事に熱がないからだと思ひます。もう一步努力をしないから、興味が湧かないで、ダレて來るのだと思ひます。よしんばそれがどのやうな平凡な、いはゆる面白味のない仕事であつても、その仕事に對して熱を持ち、いろいろの改良工夫をこらすだけの努力をすれば、その仕事の技術が上達して、いつか興味が湧いて來るのではないでせうか。

況んや自分は産業戦士として、國家のために極めて重大な役割をしてゐるのだといふことを、はつきりと自覺すれば、その仕事に對して、何等の不平や不満もなく、熱と興味をもつて全力を

傾けて行くことができると思ひます。

日本の女性は、元來、手先のことに極めて器用であると共に、いろんなことを考案し、工夫する上に天才的などころがありました。今日のやうに機械の發達してゐない昔から、いはゆる家内工業などにも一種獨特の技術を持つてゐました。例へば、かの織物、染物などの仕事であります。友禪染にしても、絞りにしても、緋にしても、いづれもみな女性の研究工夫によつて發明されたものであります。

久留米緋を發明した井上でんさんのことは前にお話しましたが、國武緋といふのを發明した人に、牛島のしさんがあります。彼女は、牛島太七といふ人の妻で、文化九年、今日の福岡縣に生れ、明治二十年、七十六で亡くなりました。のしさんも、久留米緋のおでんさんと同様に、少女時代から機械のことに従ひ、つねづねその仕事に心をひそめて研究工夫をこらしてゐましたが、ある時、數年の間天井張として置いた蔦が煤のために眞黒になつてゐるのを取り下して、何心なくその編んであつた縞を解いてみたところが、縷のあとが點々と白く残つてゐたので、それから工夫をして、絲を絞つて染めることを考へ出したといふことであります。それは、やがて國武緋

といつて評判がたかくなり、つひには一村全部が緋を生業とするやうになり、後になつて、久留米緋同業組合から表彰され、農商務大臣からも追賞せられました。のしさんが貧しい片田舎の機織女工でありながら、このやうな名譽を博したといふのも、その仕事に極めて熱心であつて、常に研究工夫の心掛を忘れなかつたためであります。

研究工夫などいふと、大へんむづかしいことのやうに思はれますが、こののしさんの國武緋を發明した由來でもわかるやうに、その仕事に熱さへ持つてゐれば、ふとしたことから立派な發明を考へ出すことが出来るのであります。

紡績でも、織物でも、現在の工場では、すべて大がかりの機械が用ゐられてゐて、昔の小規模な手工業時代のやうに、いろいろの研究工夫をする餘地はないかも知れませんが、しかし、その人々の熱心によつては、随分、その作業技術の上に優秀な手腕を發揮することが出来ると思ひます。

現に、我が國の工業界においても、女性の作業技術上の才能が大いに認められて、次第に重用ゐられつゝあります。たとへば、軍需工業方面の火薬、機關銃、砲彈等の製造にも、女性の熱

練工がドンドン採用せられ、施盤工にさへ女性の採用せられてゐることがめづらしくないので。西洋では、建築設計の上に優秀な技術をもつてゐる女性がゐて、庭園、臺所、子供室などの設計に女性の特色を發揮してゐるさうであります。日本の女性も、昔の家内工業において發揮した研究工夫の力を、その他の工業にも大いに發揮すれば、女性特有の技術を示すことが出来るだらうと思ひます。

ビルに働く女性

煙突の林立する工場と並んで、天空に魔物のやうに聳ゆる高層建築、いはゆるビルディングは、都會の生活を濃く彩る存在であります。その六階、七階といふ怪物のやうな高層建物の中には、何々商會、何々會社、何々銀行と、いろんな種類の會社や銀行の事務所、營業所、出張所などがあつて、そこには、また、數多の若い女性が男子の社員に混つて、國防色の事務服も凛々しく、或は事務デスクに、或はタイプに、或は計算場に、或は交換臺に、或は受付に、それぞれの持場で働いてゐます。

彼女等の仕事は、工場に働く女性とは自から仕事の種類も異つてゐますが、社會機構の一部門においてそれぞれ有用の役割を演じてゐる點で、立派に國家への御奉公をしてゐると云はれます。たゞ肉體をより多く働かすか、精神をより多く働かすかの相異でありまして、その働くといふ點です。この變りもありません。彼女等がその持場々々の仕事に忠實であり、勤勉であるといふことは、職域を通じて國家への御奉公をしてゐることになるのです。

田山よし子さんは、東京丸之内某商會社のタイピストであります。神田の某タイピスト養成所を出ると間もなく、十八歳で、その會社へ見習として入社したのですが、三ヶ月の後にはその立派な技術が認められて、同社の邦文タイプを殆ど一手で引受けるやうになりました。他の仕事も同じことではありますが、殊にタイプのやうな仕事は、技術の効果が非常によくあらはれるもので、たとへ一枚の紙片に數行の文字を印字するにも、その技術の上手下手がはつきりと印字の上に出て來ます。そこに、タイピストとしての人知れぬ苦心と努力とが必要とされるわけです。

よし子さんは、國民學校時代から、習字、圖畫、手工、裁縫、編物と、手先のことは何でも器用でありました。それで、本人もその氣になり、両親もその本人の希望を容れて、タイピストと

しての修業をさせたのでありますが、いくら手先の仕事だと云つても、たゞ手先だけではタイプの技記にすぐれることは出来ないで、よし子さんには、手先の器用にとりなふ頭のはたらきもありました。如何に汚ない原稿を渡されても、一度だけ讀んでもらへばそれで内容を正確に讀みとつて、一字も誤ることなく立派に打ちあげるので、会社の人たちは、社長を始め、専務や各課の課長たちも、よしさんの年若いに拘らず、その技術の優秀なことに感心してゐるのです。

よしさんがそのやうに印字技術にすぐれてゐるのは、その生れながらの天才でもありませんが、たゞ天才といふだけではありません。人々に感心せられるまで技術の上達したことについては、彼女にも人知れぬ苦心と工夫がありました。

彼女が養成所を出て、始めてその会社に入つたとき、試験的にあてがはれたのは、洋罫紙に三枚ばかりの原稿です。

「これを十分間で打つてくれたまへ。」

専務は、その原稿を二度ばかり讀みあげると、さつさと出て行きました。

よしさんは、タイプに向つて、頬の熱てるのを感じながら、その原稿を手にしたとき、その

手がブルブルふるえて来るのです。

勝氣な彼女は、齒を喰ひしりながら、原稿からタイプへ、タイプから原稿へといそがしき眼を移しながら、たゞ一心に手を動かして、やつと十分間でそれを打ちあげて、専務のところへ持つて行きますと、専務は、

「ホウ、出来たか……」

と微笑を含みながら、彼女の手から紙片を受取つて眺めてゐましたが、

「君、これや、どうしたのだ、三ヶ所もまちがつてゐるぞ。」

と云つて、赤インキでピシピシ指摘されたところを見ると、彼女の顔はその赤インキよりも赤くなりました。

「まあまあ、これは試験的のものだからよいが、今後のものには、よく注意してくれ給へね。」専務は、ごくおだやかな言葉で注意するだけでありましたが、自分の部屋へ歸つて行くよしさんの眼からは、しきりに涙があふれて来るのでした。

タイプの技術は、皆さんのなかにはよくご存知の方もあることゝ思ひますが、タイプを打つこ

とすることよりも、原稿を正確にすばやく読み取ることが必要であります。

原稿は、大抵、一二度読んでから渡されるのですが、秘密なものになると、そのまゝ渡されることもありませう。また、急を要するときには、原稿の読み上げでタイプを打たねばならないこともありませう。そんなとき、一々文字をきゝたゞしてゐたのでは間に合ひません。尤も、馴れて来れば、どんなに汚ない原稿でも、また、どんなに早口に読まれても、まごつくやうなことはありませんが、馴れない間は、文體や字體のまちまちの、書入れや書直しの多い、汚ない原稿を、まちがひなく読み取るとは、なかなか骨が折れます。殊に、側に立つてゐて、早口に読み上げられたりしたのでは、茫としてしまつて手も動かなくなりませう。しかし、それが出来なければ、タイプストとして一人前とは云へません。

よし子さんは、それからといふものは、いろいろと苦心をして、この原稿を正確に読み取ると、如何に早口に読まれてもまごつくことなく打ちこなせるだけの技術を感じてこみました。その間には、若い女性としていろんな恥かしい思ひもしたことせう。しかし、一つの技術を完成するには、如何なる苦難にも耐え忍ばねばなりません。それには、熱と力が必要です。この

熱と力によつて、よし子さんは、僅か三ヶ月の見習期間で、どのやうな面倒な原稿でも、また、どのやうに急を要するものでも、一字のまちがひもなく打ち上げるやうな立派な技術を持つやうになりました。会社の専務や課長たちも、今では、彼女の上達に舌を巻いて驚いてゐることでもあります。

よし子さんのタイプストとしての苦心と努力、これは、他の事務上の仕事をする人々にも、電話交換臺の仕事をする人々にも、受付の仕事をする人々にも、計算場の人々をする人々にも、すべてあてはめて考へることができると思ひます。たとへば會社や銀行のなかで名交換手とか、名計算係とか云はれる人々も、決して最初から名交換手でもなければ、名計算係でもなかつたのでありますが、その仕事に熱と力をもつて、あらゆる工夫と苦心とに力を傾けた結果、始めてさういふ名譽が獲られたのであります。

私共は、たとへ年若い女性にしても、それだけの力を持つてゐるのですが、その持つてゐる力を出すか出さないかによつて、技術の上下が出来るといふことをよく考へて、自分に與へられた仕事には全力を盡す心構えを持つてゐたいと思ひます。

賣場に働く女性

工場に働く人々、會社、銀行に働く人々——その他、官廳、役所に働く人々、各驛、郵便局に働く人々、新聞雜誌社に働く人々、病院に働く人々、學校、圖書館、研究所に働く人々、更にバス、電車などの交通機關に働く人々など、都會における女性の職業戦線は、まことに多方面に亘つてをります。このやうに職場の變るにつれて、その仕事の性質も多少異なりますが、それぞれの職場における仕事技術にすぐれるには、その仕事に對して熱と力とを持つてかゝることが何よりも大切であります。それは、また、時局の非常性をよく認識し、銃後の國民としての覺悟を新にする所以のものであります。

百貨店の各賣場における従業員は、いはゆる女店員と稱し、都會における若い女性の職業として、もつとも華美な存在であり、それだけに、世の人々の注目を惹いてをります。ひと頃、百貨店の女店員といへば、マネキンとかなんとかいはれて、たゞ美しいお化粧をして、お客の眼を惹きつけるやうな、いはゆる英米流の販賣戰術の廣告手段に使はれてゐました。この時代における

彼女等についての風聞は、社會一般から擧げられるやうなことがすくなくなつたのであります。尤も、その頃とても、百貨店の女店員のすべてがさういふ人ばかりではなかつたのですが、おほよその傾向がさういふ風でありましたから、人々の眼も自然とさういふ風になりがちであつたのは止むを得ません。

女店員は、賣場の従業員であつて、明かに商人であります。商人は、お客に對して親切であり、丁寧であることを、第一の心得としてゐます。追従や媚びの必要はありませんが、お客に對して飽までも親切な心で接し、丁寧な取扱ひを忘れないことは、商人道徳としてたかくかゝげられてゐます。恐らく米國あたりの卑しい商人根性の模倣かと思はれますが、まるで飾り人形のやうな美しいお化粧をして、お客を惹きつけるといつたやうなことは、品物を商ふ上に不必要なことであります。そのやうなことを女店員に強要する店は、今日、おそらくないことと思ひますが、若し假りにもさういふことを強要する店があるとなれば、そんな店の賣場で働くことは、若い女性として恥ぢなければなりません。

數年前のことです。私は、都下の某百貨店で、すこし混み入つた買物をしたことがあり

ます。品物はすべて家へ届けてもらふことにして、お金だけ拂つて家へ歸つて來ましたが、家で買物の計算をしてみると、すこし勘定が合はないのです。しかし、それはホンの四五十錢の程度でありましたから、よく調べて受取らなかつたのをこちらの不注意としてそのまゝにしてゐますと、その日の晩のことです。家内と二人で夕飯をすましたころ、玄關で、

「今晚は、御免下さいまし、小島さんとおつしやるのは、こちらまでございませうか。」と、きゝ馴れない若い女性の聲がしました。おや誰れか知らうと思ひながら、家内の立つて行つた後から、私も玄關の方をすかして見ますと、内側から射す電燈に照されて、玄關の入口に立つてゐるひとの顔は、なんだか見覚えがあるやうです。

「あゝ、さうだ、あの、百貨店の……」

私は、やつと、その女性が、今日買物をして來たばかりの百貨店の女店員だといふことを知ると、思はず起ち上つて、玄關の方へ出て行きました。

家内は、私の姿を見ると、

「あなた、今日、お買物のお勘定がまちがつてゐたと云つて、わざわざお釣りを持つて來て下

さいましたよ。」

といふのです。

「やあ、そいつは、恐縮したな……」

私もすつかり驚かされました。

あまり思ひがけないことで、その人の名前もきかずにしまひましたが、なんといふ丁寧な行ひでせうか。百貨店の女店員といふにめづらしい、その人の質素な服装と共に、美しい氣持が、いつまでもいつまでも私の心のなかに残つてゐます。

それは、たとへ四、五十錢といふ僅かなお金のことでありますが、一日の勤めで疲れた身體をわざわざ郊外の遠い私の家まで出向いて、その渡しちがひの釣錢を返さうといふのは、お客に對して、また、店に對して、よほどのまごころがなければ出來ない行ひです。云ひ換えると、女店員として飽までも商人道徳を重んじ、その仕事に對して、特別の熱と力を持つてゐなければ出來ない事柄です。

戦争が始まると、あらゆる物資が不足して、賣物にもいろいろの制限が加はつて來ましたの

で、そのために、百貨店などでも、店員とお客との間に、いろんな行きちがひの生じることがありました。

これは、日本橋の或る百貨店での出来ごとであります。一人の立派な服装をした夫人が、鱈皮のハンドバッグから百圓札を何枚か出して、棚にあつた純毛の毛絲を買はうとするのです。その賣場にゐた女店員たちは、みな顔を見合せて、どうしたものかと迷つてゐます。その有様を他の賣場から見つてゐた藤野みよさんといふ女店員は、そこへ出て来て、その夫人に向つてちよつと會釋すると、

「あの、まことに申しかねますが、毛絲はお一人何オンスといふことになつてをりますので、それ以上はちよつと……」

と、極めて丁寧に申しました。すると、その客は、眼鏡を釣上げて、

「な、なんですつて。賣れない、そんな馬鹿なことがありますか。……わたしは、〇〇の家内です。あなた、ちでわからなければ、主任でも、専務でも呼んで下さい。」

と威丈だかになるのです。他の店員は、みなびつくりしたやうな顔をして、小聲で何か云ひ合

つてゐましたが、みよさんは、あくまでも落着いて、言葉もおだやかに、

「はい、あの、ご存知のやうに、いろいろとご注意もありません。私共は、専務からかねて云ひ渡されてをりますので、どなたさまにも一様にさういふことにしていたゞいてをります。お氣に召したのを、何オンスだけお求めを願ひたいのでございますが。」

かう云はれてみると、さすがにその客もそれ以上強いことも云へないので、そのまゝ何オンスかの毛絲を買つて、その場を立ち去つてゆきました。

「あゝ、私、びつくりしたわ、〇〇の家内ですなんていはれたとき、どうなるかと思つて、ほんたうに心配したわ。」

「でも、藤野さんのお蔭で、無事にすんでよかつたわね。」

その賣場の朋輩たちは、みなみよさんに感謝の言葉を浴せかけるのでした。

百貨店へ来るお客は、まことに千差萬別で、いろいろの種類の人があります。この多くのお客に接するといふことは、若い女性にとつて、それだけで世のなかのことを知る上に十分の修養になります。その多くの客のなかには、いろんな無理な注文や厄介な文句もあつて、それぞれの

お客を満足させるやうな態度で接するといふのは、彼女等としてなかなか骨の折れることです。何か特別の賣出しなどで、お客が急にたてこんで来て、手が足りないときなど、

「おい、こちらはどうしたのだ、早くしてくれないかッ」

と怒鳴られたりすると、泣き出したくなるやうなこともありませう。しかし、お客本位の店員としては、さういふ場合にも、なるべくお客を怒らさないやうにしなければなりません。これが賣場で働く人々の辛いところです。女店員としての技術、それは、すべてのお客に好感情を與へることです。それには、やはりその賣場の仕事について、熱と力を持つて従ふことです。その熱と力とさへあれば、自然とお客に對する態度も親切となり、丁寧となつて、彼等に満足を與へることが出来ると思ひます。

農村に働く女性

日本女性のよく働くことは、農村における女性の活動が何よりもよくこれ證明してゐます。このことは前にも述べたのでありますが、農村の女性は、朝から晩まで一日も勤勞を廢することが

ありません。すなはち、彼女等は、農村の青年男女と共に、村の中心力となつて、年々の收穫を増すために、村の發展のために、文字通り汗と泥にまみれて働いてゐるのです。

各地における農村では、農林省の農村經濟厚生と呼び聲に應じて、青年男子の間で働く者の會を作つたりなどして、農村の復興に努力してゐますが、また、村によると、女性ばかりで農耕共同作業も行はれてゐます。たとへば、岡山縣倉敷町では、今次の戦争が始まつた頃、

「わづかな勞力もつもりつもれば、やがて大きな大となるものだ。家庭の仕事の暇には、田圃に入つて稻を作らうではありませんか。」

と、相談を一決して、附近の水田四反五畝歩を借り受け、毎日泥まみれになつて、女性ばかりの共同耕作をはじめてゐるのであります。最近では、その努力が見事に實を結び、年々三十俵をあげてゐます。肥料代その他小作料、諸雜費を差引いた純益百餘圓を得ましたので、これで、愛國債券だの、事變債券だのを買い、また、春の小麥作は二反二畝から七俵を收穫し、その利益で國債を買つて、國家のために、いはゆる貯蓄報國のまことをつくしてゐるのです。

元來、我が國の農業は、女性の働きによつて發展して來たものであります。神代の昔、天照大

神は、人民に耕作や養蠶や機織などの業をお教へ下さつて、御みづから、水田をお作りになり、織女と共に機をお織りなされたと傳へられてゐます。その頃、水田の耕作は男女共にしたのでありますが、その技術は、女の方がむしろすぐれてゐたやうであります。それについて、播磨の國で、男神と女神とが稲の作り方の技競べをしたといふ話が、「播磨風土記」といふ古い本に載つてゐます。それによると、女神は鹿の血を糶種にまぶして蒔いたので、稲が非常によく出来て、女神の方の勝になつたと申します。紀元後になつてからも、女性の工夫と努力によつて、農業の改良された事實がいろいろと傳はつてゐます。また、崇神天皇の御時には、男子の弓弭のみつぎ、女子の手末のみつぎといふのをお定めになりましたが、弓弭の調といふのは、男子が弓矢で得た獣の肉や皮などで、手末の調は、女子の手で作つた布の類をいふのでありますから、昔から、農村にあつては、女性の働きが男子の働きと並んで、時にそれを凌駕して、國家のために重きをなしてゐたことがわかります。

その後、我が國史を通じて、今日に至るまで、農村漁村の女性たちは、一方では家事や育児の重い役目を持ちながら、一方では家業を助けて、水田や畑作の野良働きから、綿紡ぎ、養蠶、製

絲、機織、味噌、醤油の醸造、或は漁業の手傳などにまで、はげしい勤勞をつゞけて來たのであります。しかも、その時代は、肥料や農具なども今日のやうに發達してゐなかつたのでありますから、その勞苦は思ひやられます。殊に、室町の末から戰國時代にかけて、農村がともすれば戰亂の巷となつて、折角出来上つた穀物が馬蹄が荒される氣苦勞は云ふまでもなく、泰平の御代といつても武家政治で、男性以上の壓制のもとに働かねばならなかつた農村女性の忍苦の生活は思ひやられるものがあります。

今日の農村は、肥料や農具の點で、大なる發達をとげてゐますが、なほその上に、農村における仕事著しく組織化されてゐることをみのがすわけに行きません。その一つの實例は、千葉縣安房郡平群村の若い女性によつて行はれてゐる共同炊事及び託兒所の設置であります。

銃後の模範村として讃えられてゐる平群村は、戸數七百、人口三千五百の純農村で、九割は農業、その多くは自作農または自作兼小作でありますから、村としては頗る堅實であります。

共同炊事は、農繁期——お百姓のもつとも忙しい時に、時間と經濟の節約の意味から行はれてゐるのであります。お寺の鐘が鳴ると、老人や子供がお櫃やお鍋をもつて、畦道づたひに炊事場

であるお寺へやつて來ます。そして、家の人数だけの食事を目方に計つてもらつて、朝は自宅へ、晝は田圃へ持ち運ぶのです。

炊事場の高照寺の庫裡には、白禱姿しろたすきの甲斐々々しい女子青年團の人々、それに、住職を始め、小坊主さんたちがこれを助けて、栄養食の献立をしてゐるのであります。働きさかりの男子がぞくぞく應召されて手不足な農村において、銃後支援の精神から行はれてゐるのですが、寺院中心のこの涙ぐましい勞力奉仕には思はず頭の下るものがあります。

「村民が、同じ釜の飯を食ふ親しさ、ほがらかさは、まことにうれしいものであります。」と、その村の女性たちは、顔を輝しながら語るのです。

次に、この平群村には、四ヶ所に託兒所が設けられてあります。託兒所の設備は、大きな都會ではめづらしいことではありませんが、かうした農村では、ちよつと類のないことであります。その託兒所の保母ほぼさんは、みな若い女性であつて、それぞれ數十名の幼兒を預つてゐるのであります。

この託兒所があるために、幼い子供を持つ親たちも安心して、田圃に出て働いてゐます。子供

たちもまた午前六時から午後六時まで、規則正しい日常生活に馴れて、健康な身體でたのしさに跳ねまはつてゐるのです。殊に、出征家族の子供たちには、村の若い娘さんたちが殆ど總出で保母に當つて、遺家族の家業をお手傳ひしてゐます。

この他、平群村の女性たちは、或は道路の清掃修理に、裏山の開墾作業に、凛々しいモンペイ姿で鋏を打ち振りながら、勤勞奉仕に汗を流してゐますが、かうした男手を借りずに、女性のみにて農村の振興のためにその力を發揮してゐる平群村女性のめざましい活動は、まことに現代農村女性の模範であります。

文化に働く女性

現代文化の發展と共に、教育家として、著作家として、演技家として、女性の文化的な仕事に携たづなはるものが次第に多くなりつゝあります。これは、女性の性能が文化上の仕事と合ふところが多いからだと思ひます。また、家庭の女性でも、文化的な仕事ならば、その生活の餘暇にこれをなし得る可能性が充分にあるからだと思ひます。

これに就いて、私共は、日本女性が立派に家庭生活を営みながら、その側に社會的の仕事をするだけの力を持つてゐる例を、特に文化方面に活動してゐる女性に見るのであります。

皆さんもよくご存知のやうに、我が國文學史の上で最も華やかな時代と見なされてゐる平安朝文學は、その殆どすべてが女性の手によつて作られてゐます。國文學で隨一の名作と云はれる「源氏物語」は紫式部の作であります。我が國における隨筆文學の先驅と云はれる「枕草子」は清少納言の作であります。その時代における代表的な勅撰和歌集である「古今集」、「後撰集」のなかには、小野小町、伊勢大輔、その他の女性の歌が夥しく出てゐます。「蜻蛉日記」、「更級日記」、「和泉式部日記」、「紫式部日記」、「讃岐典侍日記」などの作者もすべて女性であります。ところが、このやうな文學の上ですぐれた技能を示した才媛が、たゞさうした文學生活にだけ終始したかといふに、決してさうではありません。先づその時代に於ける代表的な才媛であつた紫式部は、立派な家庭の女性でありました。右衛門督藤原宣孝といふ人の妻となり、二人の女子をまうけ、良人が世を去つた後、もつばらその子女の教育に盡して來たので、「源氏物語」は、その生活の餘暇になつたものであります。「枕草子」の清少納言についてはあまり知られてゐません

が、「蜻蛉日記」の作者道綱の母の如き、男女關係のとかくだらしのなかつた平安朝時代にあつて、彼女は稀に見る貞淑な女性で、その日常生活の如きも極めてつゝしみ深く、たゞ一子道綱の成長をたのしんで、その薫育にひたすら心を盡してゐたことが、その日記の内容からも充分知られます。また、歌人として知られてゐた和泉式部も、和泉守橘通貞といふ人の妻となり、不幸、良人に死別した後、藤原保昌を第二の良人に迎へましたが、小式部内侍の母として家庭の女性でありました。その歌のなかに情交の濃やかなものを詠じてあるといつて、その生活を疑ふは誤りであります。

時代はこれらからすこし後になりますが、鎌倉時代に代つて、紀行文學として有名な「十六夜日記」の作者阿佛尼の如きも、藤原爲家の妻となり、一子爲相を生み、その「十六夜日記」は、良人と死別して剃髮、尼となつてからの作であります。その作のなかに、彼女がどれほど子供の教育に心を悩ましたか、母としての努力の姿がまささまと痛ましいまでよく現はれてゐます。

それは、しかし、平安朝、鎌倉時代の昔だけのことでなく、明治時代になつても、樋葉の如きは、不幸、天死して妻としての生活を経験しなかつたのであります。よく老母に仕へ、妹

を勞はつて、そのつゝましやかな家庭生活のなかゝら、明治文壇の傑作と稱される「たけくらべ」その他の作品が書かれたのであります。また、與謝野晶子女史の如き、明治大正の紫式部とまで云はれた才女であり、歌に、文にいろいろの述作のあつた上に、學校にも教鞭を採つてゐられましたが、それで、家庭では十何人かの子供のお母さんとして、その多くの子供をそれぞれ立派に育て、行かれたのであります。

更にまた、女性の文化方面への進出として、教職についてゐる者がもつとも多いのであります。この學校に勤めてゐる女性のなかには、家庭の女性として、良人に仕へ、子供をそだてゝゐる人がすくないのであります。

このやうに、日本の女性は、昔も今も、文化方面に特にすぐれた技能を持つてゐましたが、それがたゞ文化生活にのみ終始して、家庭のことを一切顧みなかつたといふのでなく、家庭の生活でも立派に女性として勤めをつくしてゐるのは、かの英米の女流文化人と大なる違ひであります。我が國では、女流作家のことを閨秀作家といひますが、閨秀といふのは女流と同じ意味でも、多分に家庭の女性たるの意味が加はつてゐます。

一體、女性が文化上の仕事に携はる場合は、著作にしても、教壇に立つにしても、家庭の女性としての生活経験のあることは、それだけ仕事の上にも効果があらはれます。また、逆に、家庭の女性が、その家庭内に文化的教養を取り入れる意味で、生活の餘暇を見出し、如何なる形式にせよ、文化上の仕事に従ふといふのも、また、極めて効果の多いことと思ひます。

大妻高等女學校の校長、こたか女史は、女流教育家として最近の成功者にかぞへられてゐますが、女史が今日の成功の基礎をつくるまでの唯一の相談相手は、御主人の大妻良馬氏であつたといひます。この御二人の夫婦生活について、最初のうちは多少面白くないことがあつたらしいのですが、女史のまごころによつて、御主人良馬氏の生活を更新させたといふやうな話もあります。とにかく、教育家としてあれほど社會的に有名なこたか女史も、良人に仕へてはよき妻であつたことが知られます。そして、よき妻であつたればこそ、女子教育家として世の尊敬と人氣を受けることが出来たのでないかとも思ひます。

働く女性の信念

戦争が始まると、とかく人手が足りなくなるに拘らず、軍需方面の工場や会社などでは事業が非常にさかんになるので、自然と従業員の争奪といったことが行はれます。そのために、職場に働く人々のお尻は一向落着かないで、甲の工場から乙の工場へ、乙の会社から丙の会社へと、従業員が絶えず移動します。これは、好餌でもつて優秀な従業員を引っこ抜かうとする工場や会社の経営者の罪といへば云へますが、また、さうした好餌に釣られる従業員の罪でもあります。

それが如何なる仕事であらうとも、その仕事に對して強い信念さへ持つてゐれば、たとへどのやうな好条件で引っぱり込まうとする者があつても、尻軽にあちらへふらり、こちらへふらりするやうなことはないと思ひます。一つの仕事に尻の落着かないといふのは、要するに、その人が自分の仕事に對して強い信念を持つてゐないからであります。

一體に女性は感情に動かされ易く、他の会社や工場から好条件で引っぱり込まうとするやうな場合、それに動かされるのは、勿論、個人的な利得の氣持もありませうが、そればかりでなく、いろんな感情問題などに支配されて、自分から轉々と職場を變へて行く人があります。仕事は、どのやうな仕事でも、云ふまでもなく、その仕事になれるといふことが極めて必要で、仕事に對

する技術なども、五年、十年の年期を入れて始めて得られることでありますから、絶えず職場を變へてゐるやうでは、一つの仕事に熟練するといふことも不可能で、その技術にもすぐれることは出来ないであります。

村松貞代さんは、大崎の某製作所の従業員であります。二十六の年から三十五になる今日まで、その同じ会社に十年一日の如く働いてゐます。そもそもこの人がその工場で働くやうになつたのは、最初結婚すると間もなく良人に死別れ、二度目の結婚が失敗に終つたので、それから断然自活で身をたてやうと決心したためであります。彼女は、その工場に入つた半年ほどの間、見習工としてホンの僅かな日給をもらつてゐましたが、朝の出勤時間の七時を必ず三十分前に出かけるといつたやうな熱心な勤めぶりが認められて、一年目にはその工場で女性の従業員の中では第一の高給取りになり、今では主任となつて、多くの女性従業員の監督をし、男女ひつくるめてその工場では破天荒の高給を取つてゐます。

その貞代さんが、或る時、次のやうなことを人に語つたのであります。

「それやねえ、最初のうちは女工といふので、づるづる氣のひけたこともありませんわ。最初の

主人が生きてゐました時分におつきあひをしてゐたお方にお逢ひしたときなど、ホントにいやな氣持がしましてね。会社へお勤めなんですつてね、と口ではおつしやるものゝ、腹のなかでは、へん、女工のくせになどと嘲つてゐられるかと思ふと、もう、たとへ食べられなくなつてもいいから、仕事をやめてしまひたいと思ふやうなこともありましたね。それから、古い學校時代のお友達で、わたしと同じやうな境遇になり、丸の内の或る商事會社などへ勤めてゐる人があつて、こちらへいらつしやいよ、それやね手當はすくないけれど、仕事が氣樂だからなどと、暗に、女工なんてみつともないね、やめておしまひなさいよといつた口振りなんでせう。それには、わたしもつるぶん一時は迷はされて、夜勤で夜おそくなるときなど、よつぽどさうした事務所への勤めに變らうかと思つたこともありすが、なかに、働くとなれば、事務所の勤めであらうが、工場の勤めであらうが同じことだ職業に上下はない筈、それに、何も知らないで飛び込んで行つた自分を、かうして樂に暮せるまで使つて下すつた會社に對してもすまないと思ひましてね。自分の身體がつかまへまでは、今の工場で働くつもりでゐます。」

働く女性がすべてこの貞代さんのやうな強い信念を持つてゐれば、その仕事がどのやうな仕事

であつても、いつかは仕事に熱と力とが湧いて來て、自然と仕事の技術にもすぐれるやうな結果になるのだと思ひます。

銃後に輝く女性

銃後を守る女性の力

對外戦と女性の力

昔から、國衰へれば忠臣あらはれ、家傾けば孝子いづとよく云はれますが、人間の力といふものは、平々凡々な時には特別にあらはれることがなくても、それがいざ鎌倉といふ場合に臨むと、案外に發揮されるものであります。平素は重いものひとつ持てないやうな弱々しい非力の人、火災か何かの非常の際には何貫匁もあるやうな重い荷物でも持上げるといふのは、かつて川中島の合戦で越後の上杉謙信が敵の本陣に飛び込んで大筒を切つた話があるやうに、否、話だけ

でなく、實際にもたしかにあり得ることだと思ひます。

我が國の歴史を顧みましても、何かの國難が襲ひ來たときには、必ずその國難を背負ふて立つだけの人物が現はれてゐます。それは、その時代に於いて特にさういふ人物が飛び出したといふわけでなく、それが無事泰平の時代なら別に發揮されないやうな人間の力が、さういふむづかしい時代によつかつて、自づから發揮されたのだと見る事が出来ます。

平素はおとなしく見られても、いざとなれば鬼をもひしぐ力を出すのは、日本人としての著しい性格であります。我が日本の國民は、この非常の際における非常の力、この力によつて、過去幾度かの國難を突破して來たのでありますが、また、この力によつて現在の非常時局を切り抜けやうとしてゐるのであります。

日本人は、また、歐米人に較べると非常に敵愾心の強い國民であります。負けることの嫌ひな國民であります。まさか負けることの好きな國民もないでせうが、日本人のそれは絶対といつてよいので、その心の底に常に熾烈な負じ魂を持つてゐます。そして、その敵愾心や負じ魂は、外國と干戈を交へなくてはならなくなつたやうな場合、もつともよく現はれます。それまで國內で

どのやうな仲間あらそひをしてゐても、ひとたび外國と事を構へれば、その國內における争鬭をケロリと打ち忘れて、外敵に向つていはゆる舉國一致の體制を取るのです。明治維新の變革が、あれほど大掛りのものであつたにかゝはらず、たいした血を見ないで行はれたといふのも、それが王政復古といふ特別の現象であつたといへ、やはりこの独自の性格を示してゐます。當時、フランスのロツシエといふ公使がナポレオン三世の意を傳へて、幕軍に若し西國の兵と一戦する覺悟があるならば、武器彈藥を借さうといつた申出を斥けたのも、徳川慶喜や勝海舟にそれだけの勇氣のなかつたわけでなく、この日本人としての性格を持つてゐたからであります。日清、日露の兩役の場合は云ふまでもありません。滿洲事變でも、支那事變でも同様であります。事變の勃發する前に、國內にいろんな事件があつたため、蔣介石などは、日本は現在仲間あらそひをしてゐるからなどと、飛んでもない認識不足の考へを持つてゐたのでありますが、いざ事變が勃發すると、國民は一切の行掛りなどを放擲して、直ちに舉國一致の體制をとつて外敵に向つたのであります。こゝに、我が國民は如何なる外敵と干戈を交へても決して負けないといふ強味があります。

今や事變は大東亞戰となつて、支那の蔣介石ばかりでなく、英米の列強を向ふに廻して戦つてゐます。忠勇無比の皇軍は、畏くも御稜威の下、海に、陸に、空に赫々の戦果を収めてゐますが、この戦争の目的を完遂させるためには、國民は益々舉國一致、男子も女子も力を協せて進まなければなりません。度々云はれてゐますやうに、これからの戦争はたゞ武力戦のみではありませぬ。思想戦でもあり、經濟戦でもあります。たとひ戦線において勝利を占めても、銃後における守りが堅固でなければ、戦争に勝ち抜くことは出来ません。戦ひに勝つて戦ひに負けるといつたやうな結果にならないとも限りませぬ。

さて銃後の守りといへば、それは、云ふまでもなく、女性の力に待たねばならないのです。日本女性は、元來、あらゆる意味で男子にたよりすぎて生きて來ました。これは、女性は蔭のものでありおもてむきのものでないといつたやうな、支那の儒教風の思想の悪影響であります。この非常時局に當つては、そのやうな依頼心は大禁物であります。さうした過去の習慣による氣持をすつかり拭ひ去つて、銃後の生活戦線に雄々しく立ち上る力を出して貰はねばなりません。軍國の女性として、いはゆる非常時型に目覺めることが大切であります。

支那事變およびその延長と考へられる大東亞戰において、すでに日本の女性は、恐ろしい力を發揮して、日清、日露の兩役においてさへ見られなかつたやうな素晴らしい活躍をしてゐます。それはたゞ、出征兵士の歡送とか、傷病兵や戦歿遺家族の慰問とかいつたやうなことばかりでなく、防空群長或は防空擔任者として防空訓練を行ふとか、或は勤勞奉仕團をつくつて家庭生活の餘力を國家に奉仕するとか、或はいろんな遺家族だけの會をこしらへて自力更生に激勵しあふとか、その活動は實に涙ぐましいものがあります。

私共は、この日本女性が國家の非常時に際して、發揮されつゝある力を、如何に頼母しく、心強く思ふことでせうか。銃後の守りは、かくして女性の力によつて確保されつゝあります。

苦難に生き抜く力

銃後の女性が如何に生活の苦難を切り抜けて、奮闘努力してゐますか、それは、實に驚くばかりであります。理窟よりも實例であつて、新聞や雑誌にあらはれたものについて語つてみたいと思ひます。

東京市渋谷區幡ヶ谷笹塚町一一四九番地に、その邊で有名な女の魚屋さんがあります。毎朝、まつ暗いうちからゴム長靴をはいた雄々しい姿で、荒くれ男に混つて河岸がよひ、買ひ出しから戻ると、盤臺ばんたいに向つて魚の料理、お正午前には、札を持つて買ひに来るお客への公平な分配、時に注文があれば仕出しなどもして、小僧一人使はずに孤軍奮闘してゐるのです。彼女はまだ三十を出たばかりの若さですが、その活躍振りは、銃後女性の模範として町會からもいく度となく表彰されてゐます。

彼女——名を吉井やすさんといひますが、かねて軍籍にあつた御主人の三代吉さんが出征すると間もなく、その弟の文十郎君、それから、雇人の大野政雄君、荒牧安太郎君といふ都合四人の働き手が、ひきつづいて召集されました。他の商賣とちがつて、男手がなくてはやつて行けない魚屋さんです。やすさんは、さすがにどうしようかと一時まつたく途方にくれて、店を仕舞つて田舎の實家へでも行かうかとも思ひましたが、

「いや、そんな氣の弱いことでどうならう。男に出来ることが、女にも出来ないことはない筈だ、安閑と田舎にひつこんでゐるやうな場合でない、なんとしても商賣をつゞけて行かう。」

と、自分のこゝろに鞭打ちながら、軍國の妻として雄々しく立ち上りました。

町内の人々やお客などが、

「あなた一人では大へんでせうな。」

と、なぐさめ顔に云ふことがありますと、やすさんは却つて不機嫌な顔をして、

「主人は戦地で御國のために働いてゐるんですもの、これくらゐのことは當り前ですわ。」と、大へんな元氣であります。

近所の人々は、このやすさんの意氣込みにすつかり感心して、あの人は、女留守部隊長だといつて評判してゐます。

この女魚屋さんと好一對になる女八百屋さんが、牛込區揚場町十九番地にあります。

それは、村田はつえさんといつて、御主人の三郎さんは、在郷軍人で、後備の上等兵でありました。事變が勃發すると、御主人はいつ何時御用にたゝねばならないかも知れないといふので、その時の用意に、彼女は常々自轉車の積古をしてゐました。

「なんだ、女だてらに自轉車に乗つたりして、みつともないぢやないか。」

良人から笑はれると、

「だつて、あなたはいつ召集になるか知れないのですもの、そのときになつて、まごつくやうでは困りますから、今のうちからその用意をしておかなくては……」

はつえさんは、毎夜、子供を寝かしつけると、晝間良人の使つてゐた自転車を近くの小學校の校庭の薄くらがりに持ち出して、猛練習をするのです。男でも最初のうちはなかなか思ふやうに足の運びないものですが、ましてお尻の重い女性の身で、はじめのうちは、乗つては轉び、轉んではまた乗るといふやうな有様で、そのために、手足を傷だらけにしてゐました。しかし、人間の根氣といふものはたいしたものです。彼女も、いつの間にか上達して、主人の代りに自転車でりつぱに用足しが出来るやうになりました。

ところへ、御主人の三郎さんに召集令状が下りました。かねてこのことを覺悟して、自転車の積古までしてゐたはつえさんは、極めて朗かに、

「今は、私もお蔭で自転車を乗り廻はすことが出来るやうになつたのですから、貴郎は、家のことをすこしも御心配なく、どうぞ元氣でお出で下さい。」

と、良人を勵ましました。

かくて、その翌日から、御主人に代つて奮闘するはつえさんの勇ましい自転車姿は、町内の人々の大評判となつて、その筋向ひに住んでゐる女醫として有名な吉岡彌生さんなどは、これこそ軍國の女性だと云つて、心から感心してゐられるのです。

これらは、身近のホンの一つ二つの例にすぎないので、第一線に活躍する我が勇士達の留守宅を守つて、銃後の生活戦線に奮闘する女性は、日本全國の到るところにあります。

新潟市上大川前通り七番町の田部功さんの妻千代さんは、三人の小さな子供を抱へて、良人が出征後も軍事扶助を辭退し、自分は毎夜古町の夜店で花を賣つて、立派に生計をたてゝゐるので

又、浦和市常盤町二六八一番地の洗濯業中根正司さんの妻静枝さんは、結婚後何ヶ月かして、身重になつたと思ふと、良人に召集令状が下つて、一時はすつかり途方に暮れ、一度は店を閉ぢて實家に身を寄せやうとも考へましたが、いよいよ良人が出征すると、こゝに飄然意を決して、店の若い者を激勵しながら、自分で註文を取りに廻はつたり、アイロンがけをしたりなど、甲

斐々々しくも商賣をつゞけてゐるのです。

人間は、常に精神の持ち方、心の据え方が大切で、如何なる苦難にぶつかつても、その苦難を切り抜けやうとする決意さへあれば、どのやうな力も湧いて来るものです。私共は、銃後に活躍するこれらの女性のことを耳にする度毎に、このことの眞實であるのをますます強く考へさせられます。

御國を護る愛の力

女性の愛情が如何に力強いものであるかといふことは、東西古今の物語のなかで、私共はこれをよく知つてゐます。殊に、日本の女性は、昔から愛情の深いことをもつて特色としてゐるので、そのために何物をも顧みなかつた愛情の力強さを、詩や歌に謳はれ、物語に描かれてゐます。しかし、私共がひと口に愛情といつても、その動機、その目標から見ても、いろんなものがあります。個人的な愛情の如きは、愛情のなかでも極めて小さなものであるばかりでなく、國家社會のためには時に害になることさへあります。かの英米の自由主義者などの説くところの戀愛至

上(ラヴ・イズ・ベスト)などは個人的なものであつて、國家社會のためには捨て去らねばならないものです。今日、私共が女性に對して求めるところの愛情は、國家社會へ注ぎかけるやうな大きなものです。それは、飽までも全體のための愛情でなくてなりません。

日本人の愛國心などは、云ふまでもなく、この國家への愛情であります。私共は、銃後の社會に、この愛國心がいろんな形であらはれるのを見きゝしてゐますが、日本の女性の愛情が今や御國を護る愛となつて、その愛の力が如何に強く發揮されてゐるかを知ることが出来ます。さうしたことの實例として、こゝに一つの物語を述べてみませう。

時は昭和十二年七月、支那事變の勃發して間もない頃、場所は朝鮮京畿道、振威郡平澤面京釜線平澤驛の驛手西元團治さんは、先年妻を亡ひ、不自由なやもめぐらしの中にも、十六になる長男の武雄君、十一になる長女よし子さん、八つになる次女愛子さんといふ三人の子供を男手一つで育てながら、責任の重い輸送事務に當つてゐました。

すると、突如〇〇部隊に出動命令が降つて、後備一等兵であつた西元さんは、名譽の召集令状を受けることになりました。軍籍にある自分だ、いつなとき召されるかも知れないと覺悟をし

てゐた西元さんは、いよいよ出發といふ前夜、感激の眼を光らせながら、出發の用意をしてゐましたが、ふと氣がつくと、自分の側かたはらには、母を亡つた三人の愛兒がスヤスヤと寝てゐます。

「あゝ、自分は、帝國軍人として思ふ存分の働きがしてみたいが、今は亡妻の長患ながわづらひひで僅かな貯金をもすつかり費ひ果して金もなし、母のないこの三人の子供を誰れが引受けて世話してくれるであらうか。」

さすがの勇士も、我が兒の行末のことを案じて、しばし悩み苦しんでゐましたが、やがて氣を取り直した西元さんは、寝てゐる三人の子供を次ぎ次ぎ起しました。

「眠いのを起してすまなんだな、三人とも心を落ちつけてお父さんの話すことをよく聞くのですぞ。お父さんは、今、お役所からこの通り名譽の召集令狀を戴いたのだ。そして明日すぐに出發するのだ。お前達兄弟は不幸にして早くお母さんに別れ、不自由なお父さんの男手一つで育つて來たのだが、今、お父さんは 天皇陛下の御命令で、悪い支那軍人を討ちに出掛けるのだ。さうすれば、お前達は頼りに思つてゐるこのお父さんとも別れ、六年間住み慣れた官舎も出なければならぬ。しかし、何事も運命だと思つて決して泣いたり、寂しがたりしては、いけないん

だよ。解つたね。よし子も、愛子も武雄兄さんと力を併せて、よく勉強するんだね。」

と、悲しい父の決心を語つて聞かせました。それから、西元さんは、言葉をついで、

「お前たちは、お父さんの出征した後、郡山にお母さんの親類がゐるから、その人を頼つて行きなさい。」

親戚といつてもまことに遠い親戚で、先方で果して世話をしてくれるかどうかわからないのですが、他に方法もなかつたので、とにかくその家を頼つて行くことを教へました。

父の話をきいて、二人の妹はたゞ父の顔を見詰めてゐるばかりでありましたが、長男の武雄君は、

「お父さん、僕達のことには心配せんで下さい。僕も十六だし、よし子も十一になつたし、二人が奉公に出て働けば、愛ちゃん一人ぐらゐは養つて行けます。それよりか、お父さんこそ、ウンと働いて、亡なくなつたお母さんを悦ばして下さい。」

と、目に涙をいつばいたため、父を勵ましなくさめるのでした。

この哀れな實情を誰れよりもさきに知つた志村平澤驛長は、たゞちに澁谷在郷軍人分會長や町

會の幹事の家を飛び廻り、なんとかして三人の愛兒の面倒を見てやる方法はないものかと頭を痛めました。が、なかなかいい方法はみつからないのです。

狭い町のこと、この氣の毒な話は忽ち町中にひろがりました。平澤驛前の米屋旅館に女中奉公をしてゐた脇山千代子さんも、女將からこの話をつたへきいて、しばらくじいツと考へ込んでゐましたが、急に態度を改め、女將の綾子さんの前に兩手を突いて、

「私のやうな者でもお役に立つやうでしたら、その三人のお子さんのお世語をしたいと思ひます。幸ひ私もお店で四年間働いて貯めたお金も少額ではありますが、持つてゐます。私は女で詳しいことは存じませんが、在郷軍人のお方や警察の人々のお話によると、今は、舉國一致して支那の軍隊をこらしめねばならない時ださうです。それに、この戦争はながくかゝるからその覺悟でゐなければならぬとききました。さういふ大切な戦争に出て行かれる勇士のお子さんを、もしお世話することが出来るやうでしたら、私はこんなうれしいことはありません。」

と、しみじみと語るのです。

日頃からかうしたところに奉公する人にしてはめづらしい立派な心掛の人だと思つて、それとなく目をかけてゐた女將も、このお千代子さんの覺悟をきいて、驚くやら感心するやら……。

「それでは……」と、女將は、千代子さんをつれて、早速、驛長や在郷軍人會の人々の集つて西元さんの子供のことで下相談會を開いてゐる席上へかけつけると、一座の人々に、千代子さんの立派な希望を傳へました。

これを聞いて、相談會の連中はすつかり悦びました。誰れも彼れもみな千代子さんの勇しい心に打たれ、感謝の言葉が飛び交ふといふ有様です。

この騒ぎのなかで、じいと腕を組んで考へてゐたのは、濱村宮七といふ町の有力者の一人です。濱村氏は、千代子さんに向つて、

「あなたの立派な心には、私達も自然と頭が下りました。まことにお恥かしい次第だが、非常時における日本國民としての覺悟を教へられました。これで、西元君も安心して御國のために働くことが出来るでせう。しかし、どんなものだらう、物は相談だが、あなたも獨身だし、三人の子供さんも母親を亡つて淋しがつてゐるし、世話して下さる序に、一生涯西元君の子供の面倒を見てやつて下さらんか。さうすれば、西元君は戦場でも充分に働き、名譽の戦死が出来ますのぢ

やが……」

年寄りの、情理をつくして語る濱村さんの話に、千代子さんは異存はなかつたのです。そこで、相談会の連中も、これは願つたり、叶つたりとばかりに、驛の官舎に飛び込み、

「いや、そいつは……」

と恐縮する勇士を説きつけて、結婚話はトントン拍子にまとまりました。

ところが、出発は明朝に迫つてゐます。それをおくらせるといふことは出来ません。そこで、結婚式はその夜一時半から舉行されることになり、仲人は濱村氏が引受け、式場も同氏の宅と決定しました。相談會に集つてゐた人々は結婚準備員に早變りし、寝てゐる雜貨屋や酒屋を叩き起し、三方や酒肴の準備にかけ廻るといふ騒ぎです。

花嫁の千代子さんも高島田に結び上げる暇もなく、ふだん着のまま、これ又、軍服に勇しく赤纏をかけた新郎と仲よく式場へ駆けつけました。

急場のこと、何の御馳走もなく、酒とスルメと勝栗が五十人分並んでゐるだけです。しかし、それは町の人々の心づくしの祝宴でした。このまことに劇的な愛國婚禮に、参列した人々は

「高砂や」の代りに「天に代りて不義を打つ」の軍歌を何遍も何遍も繰返し、勇士と新しく母となつた花嫁さんを心から激励しました。それは軍國風景そのものです。

夏の夜が白々と明けると、勇士を乗せる一番列車は、平澤驛内にすべり込んで来ました。新しいお母さんをなかに、武雄、よし子、愛子の三人は、晴ればれとした顔で、勇躍、戦地に向つたお父さんの姿が見えなくなるまで、萬歳の歡呼を浴せてゐました。

この千代子さんの愛情は、戀愛とかなんとかいふやうな、そんな個人的な小つぽけな愛情ではありません。國家をおもひ、銃後における女性としての探るべき道をはつきりと認識した愛情であります。それは、御國を護らうとする力強い愛情であります。

泣かぬ勇士の母

我が皇軍の強いことは、かの日清、日露の兩戦役ではじめて諸外國の人々に知られましたが、近くは、滿洲事變、支那事變、大東亞戦において、その底知れぬ強さに、世界の人々を驚嘆させてゐます。日本の軍人は、ひとたび戦場に出れば、天皇陛下のため、御國のために自分の命を捧

けることを最大の名譽としてゐます。そこに、皇軍の無敵の強さがあります。かの日露戦役における旅順閉塞隊といひ、上海事變における爆弾三勇士といひ、大東亞戦の劈頭、ハワイ海戦における眞珠灣特別攻撃隊といひ、一死奉公のあの烈々たる軍人魂は、日本傳來の武士道精神によつて培はれて來たもので、到底外國人の眞似し得られるものでありません。

このやうな強い日本の兵隊さんを思ふにつけて、私共はその強い兵隊さんを生みそだてたお母さんのことも考へねばなりません。そして、兵隊さんたちの輝かしいお働きに對して感謝を捧げると共に、この強い兵隊さんを生みそだてたお母さんたちにも感謝しなくてはならないと思ひます。

正成の佛前において我が兒正行を教訓した楠公夫人のことは、前にも述べましたし、皆さんもよくご存じのことと思ひますが、この正行の母の立派な態度といひ、その精神は、今日に傳はつて、いくた「軍神の母」を生んでゐます。

昭和十二年八月十五日、渡洋爆撃の尊き犠牲として空の華と散り去つた我が海軍航空隊山内達雄中尉の母堂ヤス刀自が、その悲報を手にすると共に、水莖のあと美はしく、我が兒の戦死を

感謝する書状を海軍省人事局によせて、その雄々しい態度に、鬼をもひしぐ將星たちを感泣させたといふのは、あまりにも有名であります。又、眞珠灣頭の壯舉を敢行した特別攻撃隊九勇士の母が、そろひもそろつて、我が兒の死に一滴の涙もこぼさず、國家への最大名譽として悦んでゐることは、すでに各新聞や雑誌によつて報道されたところでありまして、それは飽までも日本軍人の母としての精神を發揮したものであります。

人の親であるからには、愛兒の死を悲しまないわけはないのでありますが、その愛兒が 天皇陛下のために立派に御奉公申上げたといふ悦びと感謝は、その悲しみをも打ち消してしまふのです。そこに、日本女性の他國に見られない美しい性格があります。そして、このお母さんの強い性格によつて、日本の兵隊さんは、如何なることにも屈しないといふ、その烈々たる軍人魂をきたへ上げて來たのであります。

ここに、親子恩愛の情に女々しくも引きもどされて來た愛兒を叱咤激勵して、戦線へ送り出したといふ、まことに軍國日本の母として恥ぢない女性があります。

彼女は、本所區厩橋で綿商を営む楠木倉三さんの妻きくさんといひます。昭和十二年〇月〇

日、事變が勃發すると間もなく、一子の徳三郎君が召集されることになりました。

ところが、いよいよ門出といふ晴れの日、倉三さんが徳三郎君を見送つて歸宅すると、突然腦溢血で急死しました。きくさんは、あまりのことに呆然としてしまひました。それはさうでせう。朝に愛子の目出度い門出を心の底から祝つたその日その夕に、今度は夫と死別の悲しみに泣かねばならなかつたのですから、無理もないことだと思ひます。

しかし、性來氣丈なきくさんは、すぐ自分自身に立ち返ることが出来ました。

「さうだ、父親の死を知らせて、あの子の折角の覺悟を鈍らせるやうなことがあつてはならな

5.]

さう覺悟をかためたきくさんは、涙を拂つて雄々しくも決然と起ち上りました。

そこで、きくさんは、町會の人々や在郷軍人分會の人々が、口をそろへて、このことを一刻も早く徳三郎君に知らせるやうにとすゝめても、頑としてきかないのです。

「御國にひとたび身體をさへげた徳三郎は、もう私たちの子であつても、私たちの子ではありません。また決して佛もそれをのぞんではゐないでせう。徳三郎のりつばな働きたいと、た

だ一と言いつて死んだ佛に對しても、いまあの子をこゝへ呼んだりしては私がすみません。」

町の人々も、このきくさんの立派な態度には、ひとしく感動させられました。しかしそれではいくらなんでもすまないだらうと、一同がひそかに申合せ、きくさんには内密でこのことを○部隊長に通知しました。

その翌日、佛前に坐つて回向してゐたきくさんは、圖^はらすも表の方で我が兒の聲のするのを耳にしました。はつとしてたち上つたきくさんが、走るやうに玄關に出てみると、昨日の朝送り出したばかりの徳三郎君が、軍服姿でそこに立つてゐるのです。

「徳三郎！」

「お母さんッ」

親と子は、しばらくじいツと眼を見合せてゐました。たまらなくなつた徳三郎君が玄關をかけたらうとすると、きくさんは、それを阻んで、きつと我が兒の顔を睨みつけながら、冷やかな言葉浴せかけるのでした。

「何故おめおめと歸つて來たのです。白骨となつて凱旋するまでは、たとひどんなことがあつ

ても、家へ入れることは出来ません。」

彼女は、町會の人々が部隊長へ通知したことを、またその通知を受けた〇〇部隊長が、事情を察して、特に外出を許可したことも、すこしも知らなかつたのです。

徳三郎君は、眼にいつばい涙をためながら、

「お母さん、私は、むろん、すぐ隊に歸ります。歸りますが、せめてお父さんに焼香だけは許して下さい。お願いします。焼香だけさせて下さい。」

しかし、きくさんは、それでも受け付けやうとしなかつたのです。

あまりの不愍ふびんさに、見るに見かねた町會の人々が、

「まあ、お上さん、部隊長からのお許しが出て歸つて来たのだから、このところは、なんとか私たちに免じて……」

と取りなしましたので、きくさんもやつと、

「皆さんがさうおつしやるのだから、許して上げるが、一分間だけです。それ以上の長居はしません。」

「は、ッ、有難うございます。」

あたふたと佛間に走つて行つて、父親の靈前に額づいた徳三郎君は、

「お父さん。」

と叫んで、すゝり泣いてゐましたが、

「私もすぐに行きます。立派な働きをして、それをお土産にお父さんの處へまわります。」

と云つて、玄關へ引返して来たその顔にはもう涙のあとは見られませんでした。

二度と生きては歸らぬ覺悟をもつて出て行く徳三郎君、その愛兒の後姿を格子の間から見送つてゐたきくさん、その胸のうちはどんなであつたでせうか。しかし、たうとうきくさんの眼には涙一滴も見られなかつたのです。

泣かぬ涙の悶えは、泣く涙の悶えよりもはるかに辛いものです。私共はきくさんの胸のうちを察すると涙を催します。これも、軍國日本が銃後の巷ちまたに生んだ感激美談として、私共に強い印象を與へるのです。

勇士を激勵する妻の力

我が皇軍の將士が大陸の山河に、赤道直下の大洋に、鬼神を哭せしめるやうな奮戦をつゞけてゐるのも、銃後の家庭を護る妻子が、絶えず戦地の良人を激勵してゐるからであります。さうして戦線の良人を力づける蔭には彼女等の血を吐くやうな努力と苦心をみのがすことは出来ないのであります。

東京市豊島區池袋一ノ五三建築請負業の竹田圓治さんの妻さき子さんの家は、良人が出征するとき、町内壯行會の人々といつしよに、驛頭で、紅葉のやうな手を擧げながら、力いつばいに、

「お父ちゃん、萬歳！」

と、元氣に送りました六つになる節子さんが、その翌朝、突然の疫病で、あれといふ間もなく、同夜の八時には、哀れにもなつかしの父親を呼びながら死に去りました。

たつた一粒種の愛兒を、しかも良人の出征した翌日になくして、さき子さんの心の痛手はどんなであつたでせうか。とても、筆や口では云ひつくせないのです。

しかし、さき子さんは、その悲しみのなかゝらも、

「御國のために勇ましく出かけて行つた良人に、こんなことを知らせて、御奉公の心をすこしでも挫くやうなことがあつてはならない。」

と強い決心をもつて、このことを遂に良人には知らさなかつたのであります。

これと同じやうなことが、滋賀縣にもありました。神崎郡北五箇莊村の辰己喜太郎さんの家では、喜太郎さんが應召を受けて出征した當時、たゞ一粒種の愛兒與一君が重態でありましたが、氣の毒にもその後間もなく死亡しました。一家の嘆き、わけて喜太郎さんの妻すてさんの悲しみは如何ばかりであつたでせうか。しかし、彼女は、この愛兒の死を知らせて萬一にも良人の士氣を鈍らせるやうなことがあつてはならないと、健氣にも決心の臍をかため、子供のことを心配して、戦地からたづねてよこす良人への手紙の返事に、

子供の病氣はよくなりました、いまは丈夫で元氣よく遊んで居ります。あなた様にも何の心置きなく、御國のためにお盡し下さるやう、そのみたま々々祈上げます。

と、涙と共に認めて激勵したと申すのであります。

愛兒の死を秘して、戦地の良人を勵ます、その心根をおもへば、おそらくは血を吐くよりも苦しいものがあつたと思ひます。しかし、そのやうな苦しいおもひまでして、良人を勵まさうとは、軍國の妻としてなんといふ健氣な心意氣であります。私共も到底涙なくして語ることも聞くことも出来ないであります。

銃後女性の活動

銃後における女性の活動は、家庭を護る母として、また、妻として、その戦地にある愛兒や良人を激勵するほか、慰問袋募集に、獻金運動に、防空訓練に、愛國公債購入に、また、看護婦として出征志願に、宣撫班婦人部隊に、出征者遺族の慰問に、今まで家庭内のみにあつて、あまり世間に顔を見せなかつたやうな人々も、何々婦人會などの文字入りの白だすきを肩にかけて、日夜街を往來してゐますが、それは、まことに軍國日本にふさはしい光景で、銃後女性の生活を強く彩つてゐます。

ここに、中將の令嬢が名も告げず戦死者の家を弔問し、その遺族の人々を感泣させたといふ實

話があります。

昭和十三年八月二十八日午後三時ごろのことです。沼津市眞砂町二三九番地の、支那事變で名譽の戦死をとげた吉川兼吉上等兵の家へ、見知らぬ一人のお嬢さんが訪れて來ました。家の者は、思はぬお客で、これは何かの間遠ひでないかと不審な顔をして迎へると、そのお嬢さんは鄭重にお悔みの言葉を述べたうへ、「志」とだけ書いた無名の香料を靈前に供へ、逃げるやうに去つて行きました。

そのどこかに品のある物腰、やさしい言葉つかひなどから、この名も告げない弔問客が、果して何人であらうかと、その隣り、近所の人々にも好奇心をわきたゞせてゐたのであります。ところが、その後になつて、この弔問客こそ梅津將軍の令嬢美代子さんと判明すると、この評判は近隣から近隣へとひろまつて、その町の人々にも深い感銘を與へたのであります。

美代子さんは、その數日前から靜浦海岸にスケッチ旅行に來てゐましたが、たまたま沼津千本海岸の六代松附近でスケッチ中、その附近にあつた吉川上等兵の墓標を發見し、父將軍ゆづりの日本人的の純情から、この匿名の弔問となつたのであります。ところが、美代子さんのかうした

かくれた行ひは、たゞ吉川家訪問のみに止まらないうで、静浦全村の戦死者の遺家族をも弔問してゐられたことがわかつて、人々の感動は更に深いものがありました。

このことを耳にした土地の新聞記者が、静浦の旅宿に滞在中の美代子さんを訪ねると、彼女は處女らしい含羞みを見せながら、

「戦死された方をお見舞ひするのは、わたくしたち銃後の女性として當然のことですわ。そんなことぐらゐあまり大袈裟にしないで下さい。」

と云つて、評判のひろまるのを却つて迷惑がれる様子でありましたが、この美代子さんの行動こそ、銃後の女性たちのひとしく範とすべきことではないでせうか。

次に、北關東の前橋市では、八十歳の老婆が、銃後の社會に活躍したといふ、まことに涙ぐましい話があります。

支那事變が勃發して間もない頃、炎熱灼く暑い眞夏の街頭に、殆ど毎日のやうに、人通りの多い街の四ツ角などで、何々婦人會などの白褌を肩にかけ、千人針に、慰問金募集に、若い人々のなかに混つて、奉仕の生活をしてゐる總白髪の、どことなく上品な老婆の姿が通行人の眼を惹い

てゐました。

このお婆さんは、前橋市柳町十四番地の鈴木もとさんといつて、安政二年生れ、當年八十四歳になる高齡の媼でありましたが、銃後の護りの挺身隊にみづから進んで参加され、右手に鳩杖、左手に日の丸の小旗をかざして、若い者が顔負けするやうな熱誠振りであります。

眼も耳も達者で、乗物は嫌ひといふ、まことに元氣なお婆さんではありましたが、何分にも八十四の高齡ですから、家人がもしものことがあつてはと心配して、あまり出歩かないやうにと申しますと、

「御國が非常時の今日、たゞちつとなんかしてゐられません。この老人に出来ることを何なりともし、御國に最後の御奉公をつくしますのぢや。」

と、かへつて家人を叱りとばすといふ有様でありました。あまつさへ若い者にすら容易にできない千社詣りにまで参加したのです。その男勝りの意氣と足達者には、全市の人々がみな驚いてゐるのであります。

このお婆さんは、かの日清、日露兩戦役の際にも、銃後の固めに寢食を忘れてつくした功績

で、たびたび表彰されてゐたのですが、その後今日に至るまで、いろんな社会事業などにも力をつくして、何度となく表彰されてゐます。かういふ人こそ、眞に愛國女性の鑑といふべきではないでせうか。

軍國少女のまごころ

戦争の勃發と共に、我が國民の全體が舉國一致して國家に盡さうといふ精神は、軍部への夥しい獻金、獻納にもよくあらはれてゐます。かの日清、日露の兩役、または滿洲事變の際にも、陸海軍への獻金、獻納はさかに行はれたのでありますが、支那事變、大東亞戰となると、全國民の愛國心が彌が上にも湧き上つて、全國津々浦々はもとよりはるか海外の在留邦人からも、連日に亘つて陸海軍省恤兵部にと、或は各新聞社で取扱ふ國防獻金を通じて、國民として赤心を披瀝するものが後を絶たず、獻金、獻納はまことにすばらしい記録を示してゐます。その高は、過去の日清、日露の兩役及び滿洲事變の場合の比ではありません。

このやうに、日本全國民の獻金、獻納の赤誠は、あらゆる家庭、あらゆる職場から現はれてゐ

るのでありますが、こゝに、純眞な六人の少女が健氣にも、朝早くから納豆賣りをして、その賣上げをすつかり獻金したといふ、まことに可憐な銃後美談があります。

大陸の戦野における我が皇軍將士の血みどろの奮闘の有様は、毎日のやうに新聞やラジオを通じて、まだ世間を知らぬあどけない少年少女たちの胸にも、大きな感動を與へてゐました。こゝに、東京市澁谷區元廣尾町一の六にお家のある麻布本村國民學校の五年生島田らく子さんと、澁谷區商業實踐高女一年生若松みさをさん、麻布區筭國民學校五年生同きよ子さん、同ひさ子さんの三姉妹と、それから、澁谷區臨川國民學校五年生前澤きよ子さん、同じく榎きよさんの六人は、年齢もおよそ十二三歳前後の同じくらの年頃で、ふだんから近所同志のだいの仲よしでありましたが、或る時、

「わたしたちでも、兵隊さんをなんとかしてなくさめてあげませうよ。」

と、誰れ云ふとなくいひ出しますと、少女たちの純情な氣持はすぐに共鳴を呼んで、

「えゝ、さうとも、獻金のことが新聞に出てゐますから、わたしたちも獻金させようか。」

「ほんたうに、それがいゝわ。」

忽ち意見は一決しました。

しかし、献金するにもそのお金がないといふことに気がつくつと、小さな額をあつめていろいろと相談した結果、島田らく子さんの發案で、

「いゝことに、丁度いま学校の夏休みでせう。わたしたち毎朝、六人みんなで納豆賣りしてお金を儲け、そのお金を献金すればいゝわ。」

といふことになりました。ところが、何をいふにも少女たちのことで、納豆を仕入れる、その資金がありません。そこで、らく子さんはお父さんに相談しました。それには、らく子さんのお父さんも非常に感心され、

「さういふお金なら、喜んで出してあげるよ。」

と、早速いくらかのお金を出して下さいました。それで、一同は大喜び、すぐにどやどやと駆けつけたのが、麻布竹谷町の納豆問屋青木商店でありました。

その納豆屋の主人が、少女たちの様子をシゲシゲと見るに、別に納豆賣の必要もなさうな身装です。不審に思つて、

「あんたたちは、そんなにどつさり納豆を仕入れて、一體、どうなさるのかね。」
とたづねました。

「あのね、小父さん。わたしたち、みんなしてこれを賣つて、お金を儲けてね、それを献金しようと思ふのよ。」

と、少女たちは無邪氣に、しかもまじめに申します。話を聞いた納豆屋の主人は、すっかり感動して、

「そいつは感心なことだ。それでは小父さん、納豆全部寄附してあげるから、しつかりおやりなさいよ。」

と、即座に三十本の納豆を無代で與へました。この納豆屋の義侠心に、少女たちはいよいよ元氣になり、その翌日からそれぞれ手分けして、早朝の街から街を、

「納豆、納豆。」

と、呼賣ながら、一生懸命に賣り歩きました。そして、毎日二十錢三十錢と賣つたお金を貯めておいたところ、八日間でなんと十圓五錢といふ金額にのびりました。それに勢ひを得た少女た

ちは一同打揃つて、折から献金者の群の押合ふ陸軍省恤兵部を訪ね、

「これ、どうぞ兵隊さんに差上げて下さい。」

と差出しました。そのとき、六人の少女たちの顔には、さすがにいひ知れぬ大きなよろこびの涙が浮んで、聲さへふるへてゐました。

陸軍省の係官かきくわんであつた三宅大尉も、これには何か深い事情があるのだらうと察し、それとなくたづねてみたところ、上述のやうな次第がわかつて、三宅大尉も非常に感動して、

「有難うよ、ほんたうに有難う。」

金額は僅か十圓でも、その少女たちのまごころに對して、百萬圓の金を受けたよりも大きな感謝のこころをこめて、禮を述べたといふのであります。

時局を乗切る女性の力

女性と時局の認識

現代の戦争は、國家總力戦だと云はれてゐます。總力戦といふのは、その文字のやうに、みんな力を合せて戦ふといふ意味です。戦争は云ふまでもなく、戦場で武器をもつて敵と渡り合ふばかりではありません。銃後の者も戦場に出てゐる者と同じ精神で、眼に見えない敵と渡り合つてゐるのです。戦場における將兵の奮闘をお願いしなければなりません。それと同時に、銃後の國民も、その一人々々が力を協せて敵と戦つてゐる覺悟が必要です。このことをはつきりと自覺するのが、いはゆる時局認識であります。女性といへども、この時局の精神をよく認識して、それに善處して進むといふことが、今日の場合、何よりも必要とされてゐます。

さて、そのためにどうすればよいかと申しますと、積極的には、家庭にゐる人も、職場にゐる人も、自分の仕事に對して一層の努力を盡すといふことであります。今まで二人三人でやつてゐ

た仕事を自分一人でやるだけの力を出すことです。子供の多い家庭や客の出入りの多い家庭では、女中がなくて困るといふやうな聲をよくききますが、この場合、主婦なる人が女中のするだけの仕事を餘分に働くといふ覺悟を持つてゐれば、このやうな悲鳴は起らないですむわけです。また、職場でも人手が足りなくなつたやうな場合、かういふことはよくあるだらうと思ひますが、その足りなくなつた人の分を自分が引受けてやる、それだけ餘けいに働かうといふ意氣込みがあれば、かうした職場における人手の不足は補はれると思ひます。

以上は先づ積極的に力を出す場合であります。消極的には、あらゆる物資を使用する場合、なるべく僅かなもので間に合せるといふことが必要であります。今まで十使つてゐたものを五ですませるといつた氣持です。勿論、十と五とですから、如何なるものにしても、そこにいろんな不便はありませう、不自由もありません。しかし、今日の場合、時局に善處するには、その不自由や不自由を飽までも忍ぶことが極めて必要であります。そのためには、不必要なものなるべく買はないやうにすること、不必要なことに時間をつひやささないことで、すべて物事を思ひきつて切り詰めて行くことを忘れてはなりません。私共の日常生活をかへりみると、自分で氣のつか

ないところに、意外のムダなことをしてゐるものです。日常の生活において、さういふムダを一切なくすること、それが大切であります。それには、結局、緊張した氣持で生活するといふことでもあります。決して油断をしない、氣を許さない、常に兜の緒を締めるのを忘れないことです。

されば、時局をよく認識してこの非常時を乗切するには、國民の一人々々が積極的にも、又、消極的にも、常に緊張した氣持をつゞけてゐることです。私共の學生の時分に、「頑張る」といふ言葉が流行りましたが、この頑張るといふことがもつとも必要でないかと思ひます。

時局の精神をよく認識しない若い女性などは、よくかういふことを口にします。「自分一人ぐらゐいくら頑張つてみたところで始まらない、大局に影響するわけではないから……」

ところが、この「自分一人ぐらゐ」といふ氣持、自分一人ぐらゐがやきもきしてみたとこで、何等大局に影響するものでないといつて、たかを括つて、時局に無關心で呑氣にかまへてゐるといふのは、まことに情けないことです。自分一人ぐらゐどうでもいゝといふのは、やはり英米の個人主義思想から來てゐる悪い考へ方であつて、自分は全體のなかの一人だといふこと、す

なはち、國家は全身で自分はその細胞だといふことを忘れてゐるからであります。まことに無責任きはまる態度だと思ひます。

皆さんも少女の折、學校でいろんな團體競技をなさつたことがあるでせう。そんな場合、味方のものゝなかにたとへ一人でも力を出し惜んだり、怠けてゐたりする者があると、それが全體にひびいて、さういふ者のゐる組はきつと負けるのです。たゞ一人のものが力を出し惜んだり、怠けてゐたりすることは、全體のなかでそれだけの力が不足するばかりでなく、そのことが全體へも面白くない影響を及ぼして、全體の力が弱まつて來るのであります。

時局の警語として一億一心火の玉といひ、また、昔からの金言として千萬人と雖も我行かんと云ふことがあります。國民は男も女も、年寄も若い者も、一人残らず時局の重大性をよく認識して、時局を自分一人で背負つてゐるといつたぐらゐの意氣込みで進まねばなりません。戦争の目的を完遂する新體制の總力戦を前にして、私共は飽までもこの「自分一人ぐらゐ」といふ誤つた考へを捨て去つて、「全體のなかの一人だ」といふ精神に目ざめ、日頃に二倍も三倍もする力を發揮したいと思ひます。

時局に順應する心

戦争が勃發すれば、當然のこととして、統制經濟が強化されるために、あらゆる日常物資の廻りが悪くなるのは止むを得ないことです。前のヨーロッパ大戦の折にも、ドイツ、オーストリアはもちろんのこと、フランスでも、イギリスでも、その國民がどんなにこの物資の缺乏に悩まされたか知れません。それを思ふと、今日、私共は、まだまだ物資に恵まれてゐると申されませう。それでも、平時のやうに、いろんな物資がふんだんに廻らないと云つて、つい愚痴が口をついて出るので。そして、口々になんとかかんとか愚痴を洩しながらも、みなこれが非常時だから、この非常時物資で我慢しなくてはいけないと思つてゐるやうです。しかし、この非常時だから我慢しなくてはいけないといふ氣持には、自發的な點がすくなくて、多少の無理があります。だから、非常時を考へて我慢しなければいけないといふ口先から、なんとかしてほしいなどといふ愚痴が飛び出して來るので。

非常時だから、辛いけれども我慢してゐるといふのでは、そこに無理が出來てきます。そんな

ことでは到底ながつまきはしません。不平も湧けば、いつか不満も洩れて来るのです。されば、この我慢するといふ氣持をもう一步進めて、むしろこの時局に順應するといつた氣持にまで持つて行きたいと思ひます。それはあだかも水が高い方から低い方へと流れて行くやうなものであります。もしもこれが低い方から高い方へ流れさすとすれば、そこに無理をしなければなりませんから、いろんな故障が生じて來ます。私共の非常時に善處する氣持は、あくまでも自然に進むこと、それに順應してゆくことで、そこにすこしの無理もあつてはならないと思ひます。それには、國民のすべてが、男も女も、非常時そのものゝ性格をよく認識して、何の不平もなく、不満もなく、この不足を百年、二百年の後に取り返すのだといふ、極めて遠大な希望と抱負にみちた氣持で、悦んで國策の線に沿ふて行くことが必要であります。

では、如何にして時局に順應するか、それには、假りに肉がなければ、肉のない國に住んでゐると思へばよいのです。また、バタがなければ、始めからバタのない國に住んでゐると思へば不満もないわけです。今までふんだんにあつたものが手に入らないと思ふから、我慢することも辛ければ、不自由にも感じるのですが、始めから全然ないものと思へば、なんでもありません。それ

れは、まことに氣の持ち方ひとつであり、心の構え方ひとつであります。

新潮社々長の佐藤義亮さんは、なんでもお若いときからさんさん苦勞して今日の成功を得られた人ですが、それだけに、かうした物資の不足についても、まことに結構な觀察を下してゐられます。

ガソリンの不足から自動車に乗れない時が来るだらうといつて、心配してゐる人もあるやうですが、日露戦争の頃までは、大東京に電車さへなく、自動車などは勿論拜むことすらできませんでした。短い線路をのろのろ走る鐵道馬車がたゞ一つの交通機關だつたのでしたから、みんな東京の隅まで平氣で歩いたもので、市民の脚が強くなり、自然と健康にもよかつたのです。もし今後自動車がなくなつたら、昔に返つたゞけのことと思ひ、この方が却つて體によいと決めてゐたら、何の愚痴も出なくなるでせう。

これは、ガソリンの不足から交通機關の不便について云はれたことでありますが、食糧についても同じことが申されませう。我が國は農業國で野菜は比較的豊富でありますし、また、四面海にかこまれてゐますから、魚類には事欠きません。それで、假りに牛肉や豚肉が全然手に入ら

なくなつたとしても、野菜と魚類とで十分に栄養を補ふことができます。大體、日本人がしきりに牛肉や豚肉を食するやうになつたのは、西洋の文化にかぶれ出した明治以降のことで、舊幕時代の人々は、これらのものを四つ足もの稱して口にしなかつたのであります。さうかといつて、その頃の人々はみな栄養不足で、天死でもしたかと申しますと、決してそんなことはなく、醫術の進歩といふことを割引してみれば、却つて昔の人の方が丈夫で、長壽を保つたとさへ見られるのであります。

物資を愛護する心

物を大切にするといふことは、いつ如何なる場合にも必要なことでありますが、別して今日のやうな物のない時代には、忘れてはならないことであります。

人間の定命は、五十とか、七十とかいはれてゐますが、二十代とか三十代とかの若さで死んで行く人もありますし、八十、九十といふ長壽を保つ人もあります。これは、その人のもつて生れた體質の強弱にもよほど關係してゐませうが、やはりその人の日常における身體の取扱ひ方の如

何にあると思ひます。如何にすぐれた身體を持つて生れた人でも、不攝生な行ひをして、身體を亂暴に使へば、短命で終らねばなりませんし、これに反して、それほど丈夫な身體をもつて生れない人でも、よく養生し、身體を大切に取扱へば、相當の長命を保つことが出来るのであります。

この人間の命と同じやうに、すべての物についても、たとへば一本の萬年筆にしても、一着の洋服にしても、また、一足の靴にしても、これを大切に、丁寧に、よく氣をつけて使用すれば、三年のいのちのものが五年も十年も使へます。

女は男にくらべると、一體に物を大切にするやうであります。それでも、若い女性のなかには、物をぞんざいに取扱ふ人がないとは申されません。

「あなたのやうに、なんでもかんでもさう早く悪くしてしまつては困りますよ。」

「いゝわ、自分のものですもの。」

といふ風に、若い人などはよく自分の持物だから、どのやうな使ひ方をしても構はないと思つてゐますが、決してさういふわけのものでありません。たとひ現在それは自分のものであつて

も、大きくみれば、一時假りに自分の所有になつてゐるといふだけで、公けのものであり、國家のものであります。自分だけの所有物ではありません。先づ云つてみれば國家が一時預つてゐるやうなものです。預つてゐるものと思へば大切にしなければならぬでせう。自分が持つてゐるものだから、こわしても、そこねても構はないといふ法はありません。

電燈や瓦斯なども、現在、使用の制限を受けてゐますが、かういふものも氣をつけて、なるべくむだづかひのないやうに心がけねばなりません。會社や工場の便所などで、暗いので電氣のついてゐるところがありますが、あの電燈なども、用を足して出るときには必ず消すことを忘れないうやうに注意してほしいと思ひます。

それから、水道なども、女性には特に使用することが多いのであります。使用のたびに必ず栓を堅くしめておくことを忘れぬやうにしていたゞきたいものです。栓の締め方のゆるいため、水がタラタラながれ落ちてゐることがありますが、なんだ水ぐらゐと考へては困ります。今日は水も極めて大切なものであります。その水が、あの僅かな不注意のために、どれだけむだに流れてゐるかと思へば、そら恐ろしい氣がします。

二宮尊徳翁といへば、報徳教といふ經濟道德を説いて、身をもつてそれを行つた偉い人でありませんが、その尊徳翁は、常に物を大切にせよ、感謝の氣持を忘れるなと説いて、

明日たべるものがなくて、生きて行くことができなくなつたら、釜も洗ひ、膳も極もきれいに洗ひあげた上で餓死するがよい。それは、その日までこれらのもので、命をつないで來た恩があるからだ。

わたくしたちが毎日釜や膳を洗ふのは、明日これらのものをつかふためではなく、昨日までわたくしたちのために用を足してくれた、その大恩にむくいるためである。この感謝の氣持あるものは、天のところにかなふので、長く富を保つてゐられるが、それがないものは、貧乏からはなれることはできない。富も貧も遠くへだたつてゐるものでなく、みな自分の心のなかにあるのだ。

と申されてゐますが、物資愛護の精神を指示したこれほど大きな説教はありません。

又、皆さんは、國民學校の教科書で、松下禪尼のことはよくご存知じでせう。この人は、鎌倉幕府の執權北條時頼の生母であります。贅澤をしようと思へば、いくらでもぜいたくの出來る身

分でありましたが、常につまましい生活をしてゐました。

或る時、禪尼が居間の障子のやぶれたのを、紙片と糊をもつて来て自分でつくろひ張りをしてゐますと、兄の義景といふ人が来て、この有様を見て、

「お前、そんな面倒なことをせず、破れたらすつかり張り替へる方が、よつほど手数がかゝらないぞ。」

と云ひますと、禪尼は、

「そんなことは、わたくしだつてよく知つてゐます。けれど、この障子はまだ張り替へるほど古ぼけてゐません。それに、すこし破れが出来たからといつて、全部張り替へるのはあまりに勿體ないことです。破れたところをかうしてつくろつておけば、張り替へずにすみ、それだけ紙の助けともなりますから。」

と申したとのことです。

これこそ、實にりつばな物資愛護の精神です。私共の先祖には、このやうな女性のあつたことをよく記憶していただきたいと思ひます。殊に、今日は紙を大切にしなければなりません。紙が

なくては、皆さんの知識の糧である書物も充分つくれないのです。たとひ一枚の紙でもこれを活かして使ふやうに大切に致したいと思ひます。

皆さんは、お勝手へ入れれば、お米を炊いだり、お釜やお櫃を洗つたりしなければなりません。そんなとき、たとへ一粒のお米やご飯でも流しへこぼさないやうにしてほしいと思ひます。

「一粒や二粒のお米がこぼれたつて、それがなんだらう。」

と思ふひとがあるかも知れませんが、よく考へてごらん下さい。日本人が、一日一人たつた一粒のお米をこぼしたとしても、いま内地の全人口約七千萬といひますから、それだけで、七千萬粒のお米を流すことになります。一斗のお米はおよそ六萬四千粒の割でありますから、七千萬粒で約十一石となり、一年三百六十五日に見積れば、四千石となります。俵にすれば一萬俵です。一粒ぐらゐといふ、そのたつた一粒で、四千石、一萬俵のお米が失はれるのだと思へば、たとひ一粒のお米でも粗末にはできませんか。

今日、政府は、物價の高まるのを抑へ、貯金を増させるやうに、さかんに消費の節約をすすめてゐます。されば、國民もこの非常時にはいつでも國策について行くことを覺悟し、放漫な生活

をたがひに戒めあふやうにしなければならぬと思ひますが、それは決してケチな心から出るものではなく、物の命を完全にはたらかすといふ、物に感謝する心、勿體ないといふ物を大事にする心から、自然と出て来る無理のない節約でありたいと思ひます。

廢物を厚生する心

物はなるべく廢品とならないやうに、物の命を延ばして使ふ工夫が大切であります。さうして使へるだけは使つて、その物の效用をつくさせた上で、いよいよ廢品といふことになれば、それを他の使ひ途に利用するか、屑物として賣るか、または一部は利用して一部は賣拂ふかするのがよろしいのです。例へば、大人の洋服が着られなくなれば、そのよいところを取つて子供の服を作つて、裁ち屑を集めて賣れば、それが再生工場へ送られて新しい織物の材料になります。

私共が消費生活をしてゐるうちには、いろんな廢品が生じます。これらのものは溜めておいて屑屋に持つて行つてもらふのでありますが、時には、屑屋さへ持つて行かないやうなものがあります。邪魔になるからといふので、大概はゴミ箱へすてしまひますが、かういふ仕様のない屑

も、時には國家にとつて極めて重要な資源となることがあるので、決してむざむざとは捨てられないと思ひます。

昔から、「屑も寶」といふ言葉があります。まつたくその通りで、一本の折釘、一枚のボロぎれ、一箇の古鍋でも、これを拾ひ上げれば、立派に生れ替つて、まことに貴重な國家の資源となります。

それが鐵だと思へば、この非常時にあたつて、たとひ古釘の一本といへども粗末にはできません。我が國の鐵材の生産高は、目方にして約十三萬噸です。ところが、使ふものゝ不注意で百本のうち一本の鐵釘がすてられるとしても、すてゝおけば鐵は錆びて消えてなくなりますから、年にして千三百噸、すなはち、三十六萬貫の鐵が消滅してしまふわけです。若しもこの三十六萬貫の鐵材があつたならば、どれだけ多くの機關銃やタンクや彈丸がつくられることでしょうか。それを思へば、まことに勿體ない氣がします。

その他、足袋の鞋でも、たとひ一片のボロ、一本の毛絲屑でも、たとひ一寸四方の紙片でも、ゴミの破片でも、決してムダにはできません。これらの廢品がいかに重要な資源であるかをよ

く認識して、その回収と再生について真剣に考へてみる必要があります。

されば、原料となる物資の乏しいドイツなどでは、重要物資の廃品回収といふことに就いて政府はいろんな施設を行ひ、國民もまたよくこれに協力してゐますので、七割から八割といふ、まことに立派な回収率をあげてゐます。これに對して、我が國の現状はどうかといひますと、鐵、銅、木綿、羊毛、紙、ゴムなどの重要物資の廃品回収率が、わづかに二割内外にすぎないので、それだけ我が國にあつては、それらの大切な資源が死蔵なれ、死滅するにまかされてゐると見るよりほかありません。

廢品を回収することは、直接には軍需品の供給を潤澤じゆんたくにすることになり、間接には、わが國の國際收支にも貢獻するものであり、更にまた、非常時のりつばな精神運動にさへなりますが、この廢品回収を徹底的に行ふためには、何としても女性の努力を俟たねばならないのであります。それは、女性は一般に男子に較べて、これらの廢品を處理する機会が多いからであります。

次に、この廢品回収と同時に考へられるのは廢物利用であります。廢物利用とは、廢品のなかからすこしでも利用のできるものを、そのまま利用することで、廢物利用の方法については古く

から考へられてゐることであり、今日でも種々の新工夫が絶えず新聞や雑誌の上に發表されてゐます。それらをよく見ておいて、そのなかで自分にもつとも適切だと思へる方法を探つて用ひるのがよいのです。たゞしかし、廢物利用はどこまでも經濟的で、實地に役に立つことを主とせねばなりません。蓄音機の針の廢物を利用するために、生花の針山をつくり、そのためにわざわざセメントを買つて來るといふやうなものは考へるべきです。

こゝでよく注意しなければならないのは、廢物と資源活用とを混淆こんごうしないことです。すなはち、廢物利用のためといつて、重要資源を死滅させてはならないことです。たとへば、罐の古いものを植木鉢にして花を植ゑてゐた人がありますが、これなどは、女性の日常生活に科學知識の足りないことを語るものです。

廢物の利用にしても、廢品の回収にしても、まだまだ工夫と努力を要する餘地があります。利用できるものならば、できるだけ利用することが肝甚であります。先年滿鐵の或る工場で、十名の委員を設けて、これまで鐵屑、眞鍮屑、木片、石炭殻などを取調べさせて、再び使用のできるものを選び出して使用し、その残りだけを賣拂ふことにしたところが、その結果は一ヶ月當り四

萬圓乃至五萬圓の節約が出来たといひます。また、内地の或る大會社で右と同様のことを試みたところ、本當の屑として賣拂ふものは、これまでの百分の四だけになつたといふことであります。

寺田甚與茂氏といへば、岸和田紡績會社の創立者で、關西で鳴らした富豪であります。この寺田氏が和泉紡績會社を買収しようとして、その會社へ出かけたときのお話であります。その折、寺田氏が工場の便所に入りますと、綿ぎれのすてゝあるのが眼につきました。

「便所のなかに、大事な綿がすてゝあるやうでは、この工場はムダが多いにちがひない。」と見破つて、そんなことのために、この會社は衰へたのだらうから、内部をひきしめて無駄のないやうに行けば、きつと建直せるといふ見透しがつけられ、早速買収の話をまとめたのですが、寺田氏の經營に移ると、果してその會社は急に面目を一新し、りつばな成績を擧げるやうになつたといふ話です。

右の話でもわかるやうに、工場や會社でも、勞務や事務員のちよつとした不注意のために、物資を濫費したり、利用できる廢物を利用しなかつたり、廢品回収を忘れてみすみす資源をムダに

したりしてゐますが、もつと眞劍になつて工夫すれば、回収すべき資源がどつさりあると思ひます。今や私共の周圍を見渡して、屑が原料として入つてゐない商品はありません。屑こそ、もつとも重要な原料となり、資源となります。だから、廢品を回収することは、資源を愛護するに止まらず、資源を開發することにもなるのです。そして、それは長期建設に處する銃後國民の義務であります。

貯金を忘れぬ心

昔からある金言に、恒産のない者は恒心なしといはれてゐます。財産ほど、その人の生活に安定と落着を與へるものではありません。一定の財産を持つてゐないものが、そのために、つねに生活の不安と動搖にかられてゐるのは、まことに止むを得ないことだといはれます。貯蓄のない生活は、まるで不幸を背負ふて人生の山路を歩いてゐるやうなものです。そこには、幸福といふものはありません。

若い間は貯金なんかする必要がないと考へてゐる人があるかも知れませんが、それは大へんな

誤りです。若くても病氣にかゝることがあります。病氣になつても貯金さへあれば、父母や兄弟にも迷惑をかけないで、安心して療養することができます。一家にどのやうな災害が降りかゝつて來ても、それを救ふことができます。そんな不幸な場合ばかりでなく、自分が勤めをやめてお嫁に行くやうなときにも、貯金があればそれがどんなに役だつこととせう。

貯金は、かうして自分のため、一家のために必要なことであるばかりでなく、日本人として國家への御奉公であります。今日の貯金は、壺に入れて土中に埋めたといふ昔とちがつて、郵便局とか、銀行とかに預金するのですから、そのお金がたゞちに國家のため、社會のために用ひられて、我が身のためとなると同時に國家のためともなり、いはゆる一石二鳥の効果を奏するのであります。しかも今日大東亞建設といふ國民緊張の時に當つて、國家が力を極めて國民の貯蓄を奨励するのには、まことに深い意味があります。

先づ第一に、國防のために國家に多額の費用を要するので、ぼうだい老大な豫算を組んで、一部は税金でまかなひ、大部分は公債でまかなふことになつてゐます。それでは、政府の發行する多額の公債を誰が買ふかといひますと、銀行・信託會社・保險會社・大藏省預金部等の金融機關かまたは

國民各個人が買ふより他はありません。金融機關が買ふといつても、そこに集まつてゐる金はみな國民各個人の預金であり、大藏省預金部は郵便貯金の集まりですから、結局國民の貯金がなくては、公債が消化できないことになります。それ故、この際國民が非常に奮發して多額の貯金をすることは、國家のために絶対に必要であつて、それがなくては國家は立ちゆかないのであります。

第二に、貯蓄はすでに申上げたやうに自分のために不時の用となり、産業の資金ともなり、また金融機關に預けてある金は、國家に有用な産業の資金として融通することが出来るやうになつてゐますから、自分のためにも、國家のためにも、極めて有益な働きをします。

第三に、政府は多額の費用を使ひますから、その金はすべて民間に落ちて、國民の誰かのふところに入りますが、その増加した収入を勝手に使つて贅澤に暮すときは、物價が天井知らずに騰貴して、國民の生活を困難に陥れ、國家の經濟を混亂させてしまひます。それ故、収入の殖えた人は殖えたゞけの収入の全部を貯金して、なほその上にも節約して貯金する、収入の殖えない人も、時局柄緊縮の生活をなし、國策に添うて貯金し、物價の騰貴を防止しなければなりません。

第四に、国内の物價が騰貴すれば、輸出製品の値段も高くなりますから、輸出が減つて來ます。輸出奨励のためにも、節約貯蓄がぜひ必要となつて來るのです。

さて、貯金といふものは、一概に、収入が多いから出来る、収入がすくないから出来ない、といったわけのもではありません。相當の収入のある人でも、貯蓄心のないために、手いっぱい餘裕のない生活をしてゐる人もあれば、わづかな収入でもちやんと豫算をたて、月々いくらかの貯金をし、不時の場合や將來にそなへてゐる人もあります。貯金は、ぜつたいに収入の多寡にあるのでなくて、その心掛けのあるなしにあります。どれほど僅かな収入のなかへからも、またいかに苦しい生活のなかへからでも、どうしても貯金しようといふ心掛けさへあれば、よしんばその額はすくなくも貯金はできないことはなからうと思ひます。

かういふわけで、貯金は、収入の多寡、生活程度の如何に拘らず、その人の心掛け次第で出来るものです。たとひ日給一圓二十錢の見習職工でも、月給四十五圓の女事務員でも、その心掛け一つで、たとひ多額の貯金はできなくても、月々二圓なり、三圓なりの貯金はできないことはありません。國民一人が一月一圓の貯金をすれば、國民全體で一年に十二億の貯金をすることに

ります。

貯蓄は、一億同胞が一心目標を目指す進軍であります。貧富貴賤の別なく、職業環境の如何を問はず、老人も若者も、男も女も、共に實行しなければなりません。自分の収入では貯蓄する餘裕がない、貯蓄は収入の多い、生活に餘裕のある人だけにまかせておけばよい、などと考へるのは、たいへんな誤りであります。日本全國で、その勤勞收入に對して所得税を拂つてゐる人は、全人口の何分の一にしか當りません。更に五千圓以上の年收の者となると、その數は極めて少數であります。だから、これらの大所得者にのみ貯蓄をまかせておいたのでは、効果のあがるわけはありません。それには、どうしても、日本國民の全體が貯蓄する、すなはち、一億同胞の勤勞貯蓄にさらに一段の拍車をかけねばなりません。そこに、始めて非常時局を乗切る重大な力が湧きあがつて來るのであります。

大東亞の建設と女性

頼母しき大和撫子の力

坂上郎女といへば、有名な萬葉歌人の大作家持の姪に當る女性で、彼女もまた萬葉歌人の一人であります。その坂上郎女の歌に、

盃に梅の花うけて思ふどち

のみての後はちりぬともよし

といふのがあります。爽快な詞句のうちに、毅然たる日本女性の氣魄があらはれてゐます。その時代の女性は、みな青空はるかに聳ゆる富士の高嶺の神々しい姿を見る如く、その精神も、その行動も凛として犯しがたいものを持つてゐました。それが、泰らけく治まる御代と共に、平安朝時代の長袖、情痴を本位とする生活に沈湎し、やゝ失はれて行つた形でありましたが、鎌倉、室町のいはゆる武家時代に入ると、女性はひたすらにその家族本位の生活のなかに生きること

よつて、剛健、着實な氣風を示し、父母につかへて孝、夫にまみへて貞といつたところに、まことに麗はしい日本女性の力を發揮し、江戸時代になつても、打ちつゞく泰平と、あまりにも強く根を張りすぎた儒教風の躰のために、女性の力はあまりにも家庭の一隅に追ひこまれたかの如く思はれますが、しかし、それだけに、日本女性の貞順な氣風は彌が上にも現はれ、家庭の主婦又は母としての力は、雄々しく、また、麗はしく發揮されて來ました。即ち、鎌倉時代における松下禪尼、室町時代における楠公夫人に、その時代における日本女性の最も代表的な姿を見た私共は、江戸時代に入ると、例へば、大石良雄の妻に、また、吉田松陰の母に、その時代における日本女性の著しい面影を見受けるのであります。そして、明治、大正の時代に入ると、國威の發展と、社會の進歩は、日本女性の氣風の上にも大なる變化をもたらし、その日本女性獨特の家庭を本位とする貞淑、従順の性格は決して失はれたと思はれませんが、その上に、國家的な、社會的な方面へ乗り出さうとする彼女らの力を見たのであります。即ち、例へば、東郷元帥の母堂、乃木將軍の夫人の如き女性を見る一方において、かの奥村五百子、瓜生岩子、下山歌子、その他、女流教育家といはれる人々の活動に、その著しい例を見るのであります。

しかし、明治、大正の時代における女性の社会活動は、主として指導者としてのそれでありました。従つて、その人も、その範囲も限られてゐたのでありますが、今や我が國は、働き得る男子をすべて動員すると共に、母胎保護に必要な限りの女性をも動員して、彼女らの力をして家庭以外の方面へもドンドンと發揮されることを要望してゐます。これは、單に戦時だからといふばかりでなく、世の情勢の赴くところ、必然の形でありまして、或はギイギイと鳴る齒車の蔭に、或はクルクル廻る輪轉機の側に、或は山道を走るトロツコの上に、男性と力を協せて働く女性の雄々しい姿を見るのであります。今日は社會に出て働くといふ點で、決して男も女も區別されることはない、女性は家庭の人間で、家庭内の仕事さへキチンキチンとしてゐればよろしい、世のなかへ出て働くのは男子の任務だ、などとタカを括つて呑氣に構へてゐる時代ではありません。そこに、開け行く躍進日本の逞しい性格があります。秋の野に咲く楚々たる風情の撫子の如き日本女性も、ひとたび起てば、その偉大なる力を發揮して、大東亞の覇者たる日本がその前途に抱く輝しい使命のもとに、雄々しく健闘することが出来るのであります。私共は、この頼母しき大和撫子の力に讃嘆の聲をあげざるを得ないのであります。

大東亞の建設に向つて

我が國は今やアジア大陸に、南方海洋に大へんな發展を遂げ、日章旗は、千里の山河を越し、萬里の波濤を越した彼方にまで翩翩として翻つてゐるのであります。この輝しい發展は、もとより赫々たる御稜威のもと、勇敢なる皇軍將兵の血と汗との努力によるものであつて、そこに如何に尊い犠牲が拂はれてゐるかを忘れてはなりません。されば、私共は、この血と汗の努力によつて獲得した生命線を守つて、こゝにわれらの理想とする大東亞を建設し、東亞全民族が共存共榮の王道樂土を實現するといふ大きな任務を負ふてゐます。しかし、云ふまでもなく、この任務を完全に遂行し、われらの理想を實現するためには、私共の前途になほ幾多の困難が横はつてゐて、更に一層の緊張、努力を必要とします。

それは、もちろん、兵隊さんの力ばかりでは不可ないのです、日本の國民が擧つて、その力を發揮しなければなりません。

國をおもふみちにふたつはなかりけり

軍の場にたつもたぬも

明治大帝の御製を拜し奉れば、戦場と銃後の區別のあらう筈はありません。況んや、男と女の區別のあらう筈はありません。世界永遠の平和を約束すべき大東亞の建設は、愛國の誠心たゞ一つ、一億同胞が、男も女も力を協せて邁進してこそ、始めて實現されるのであります。殊に、將來における大陸の開拓といひ、南方の開発といひ、大東亞建設の途上において、日本女性の力を求めること、まことに大なるものがあります。東亞全民族の共存共榮といつた如き事は、どうしても女性の力を俟たなければならぬと思ひます。

明日に備へる覺悟

扱て、私は、最後に、若い女性の方々に對して、明日への生活に備へる覺悟に就いて愚言を捧げ、この書の結びとしたいと思います。

およそ私共には、常に明日といふ日に備へる用意がなくてはなりません。たゞ今日の生活にのみ追はれて、若し明日の生活に備へる用意を缺いておれば、最後の勝利を獲得することが不可能

であります。それは、もちろん、今日の生活に努力することも忘つてはなりません、今日の生活に努力するだけで、明日の生活への飛躍を用意するところがなくては、生活の第一線に立つことが出来なくなりす。

世の人々は、俗に取越苦勞といふことを申します。今から將來のことをいろいろと考へずして、どうなるかわからぬ先のことについて、とやかくと心配するのはまことに馬鹿げてゐるといふのです。私がこゝに明日の生活に備へるといふのは、もちろん、そのやうな取越苦勞ではありません。取越苦勞は、確かに拙らないことです。それは、云はゞ極めて消極的な生活態度を意味するものです。しかし、明日の生活に備へる心の用意は、もつと積極的な生活態度を意味してゐます。

女性のなかには、左に述べたいはゆる取越苦勞をする人があります。それは、彼女らが一體に小つぽけな現實の問題に、あまり囚はれすぎるからであります。現實の問題にあまり囚はれすぎるとは、將來への飛躍を妨げます。つまり今日の生活にあまりに拘泥しすぎて、明日の生活に備へる用意を缺くやうなことになります。

扱て、明日の生活を約束する女性として、第一に考へねばならないのは、生活の改善であり、第二に體位の向上であり、第三に知識の獲得であります。この三つのことに深い關心があつて、始めて彼女らの生活に、新しい設計せつけいがうちたてられるのであります。

生活の改善は、これを、(イ)衣服、(ロ)食物、(ハ)住居の三つに分けて考へられます。先づ衣服の點において、今日の女性の衣服は、殊に働く女性の衣服は、以前に較べればよほど合理的になりつゝありますが、まだまだ改良の餘地が充分あります。洋装にしても、和服にしても、それは、飽までも實用本位、仕事本位で、且つ衛生的、保健的のものでなくてはなりません。美といふ方面からの選擇などは、第二にも第三にも廻していただきたいと思ひますが、今日の働く女性の服装は、果して私共のさうした注文に叶つてゐるでせうか。次に、住居であります。これも衛生と保健といふ上から考へて、アパートにしても、單獨家屋にしても、理想的のものを選んでほしいのですが、たゞいはゆる便利第一主義になつてゐないでせうか。又、食糧は美味といふよりも、栄養を主眼として、自分の體質なども考慮してなるべく適當のものを攝取するやうにせねばなりません。かくて、衣食住の三方面から生活の新設計をたて、明日の飛躍にそなへることが

極めて大切であります。

更に、若い女性の體位の向上といふことは、國家的の見地からしても、極めて重要なことでもあります。殊に、働く女性は、その仕事によつて使ふ筋肉が定まつてゐるので、その他の筋肉を退化せしめ、延いては體位の低下を來することが多いのですが、次代の國民の母ともなるべき大切な身體を職業のために損はれるやうなことがあつては大へんです。そこで、働く女性の體育といふことは、特に深く考へられてゐます。しかし、働く女性は、朝から晩まで職場にあつて、はげしく手足を動かしてゐるので、心身に疲勞を覚え、特に體位を向上せしめるやうな運動を強ひられることを好みません。これは、もつともな次第だと思ひますが、何らかの方法で、體位の向上といふことを圖らねばなりません。これには、働く女性自身が自覺する必要もありませうが、それと同時に、彼女らを監督し、指導する側の人々にも、それだけの注意を促したいと思ひます。今日、若い女性を多く使用する工場や會社などで、朝の勤務前とか、正午の休憩時間などに、屋上に全員を集合して、レコードの伴奏のもとに體操を実施させてゐるところもあるやうですが、あれはまことに結構な試みであります。これによつて、一日の仕事に明るい氣分を與へ、それが體

位の向上にもなれば、まさに一舉兩得といふわけでありませぬ。最後に、若い女性は、明日の生活に備へる心の用意のために、知識の獲得といふことを忘れてはなりません。さて、若い女性が需める知識は、これを修養と教養との二方面から考へられます。修養の方では、もつぱら英米流の個人思想、自由思想を極力排斥して、我が國體の觀念に基いて、日本精神の神髓を掴むことが大切であります。そのためには、日本文化の鑑賞といつたことなども大いに奨励していゝと思ひます。また、教養の點では、生活の合理化、職業技術の進歩に役立つやうな實際的、科學的知識の他に、時局知識に接することも忘れてはならないと思ひます。そのためには、讀書は勿論必要でありませうが、なほ時間の許す限り、各種の展覽會とか、講演會とかに出掛けることも必要ではないでせうか。

斯くして、明日に備へる覺悟をもつて、今日の生活に邁進して行くことこそ、大東亞建設をめざす新興日本の女性が生きて行く眞の姿であります。

—(終)—

昭和十七年十月二十日 印刷
昭和十七年十一月十日 發行

(三〇〇〇部)

認 承 協 文 出
ア 130163



働く女性の力 奥付

Ⓢ 【定價金壹圓八拾錢】

内地送料十五錢
外地送料廿八錢

著 者 小 島 徳 彌
東京市本郷區眞砂町三十三番地

發 行 者 生 井 貢
(會員番號一一〇一四五)
東京市芝區愛宕町二丁目十四番地

印刷所及印刷者 渡 邊 丑 之 助
(番號東東一二五)

【刷印社會式株刷印宕愛】

發行所

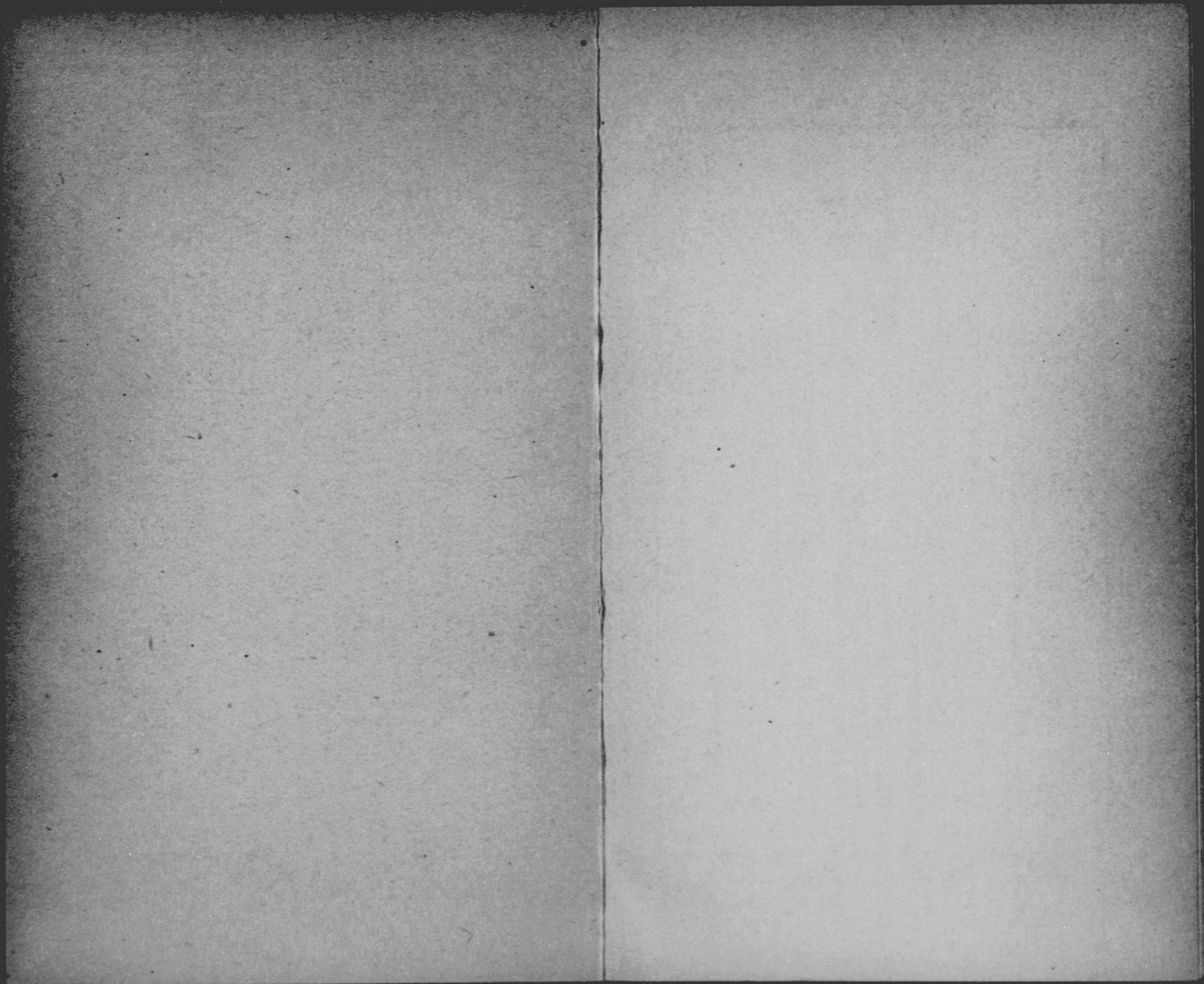
電話小石川六二七九番
東京四三五〇五番

國民教育會出版部

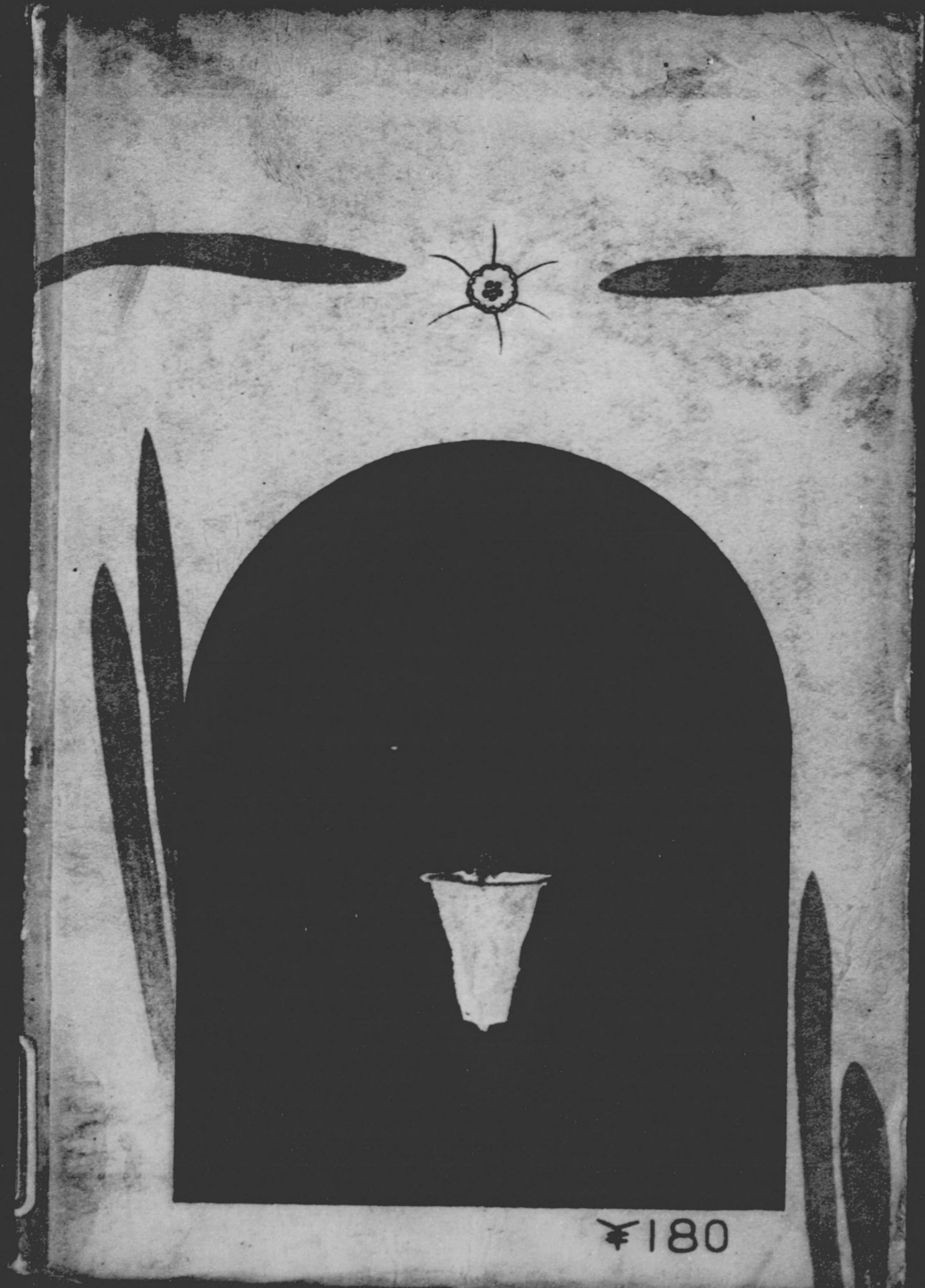
東京市本郷區眞砂町三十三番地

配給元

東京市神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社







081 180